

愛媛県越智郡上島町

# 宮ノ浦遺跡 VI

— 第10次・第11次発掘調査概報 —

2022年3月

愛媛県越智郡上島町教育委員会



## 序 文

上島町は、愛媛県の北東部、広島県との県境に位置し、瀬戸内海のはば中央に浮かぶ上島諸島および魚島群島で構成されています。瀬戸内海国立公園区域内にあり、穏やかな海と多島美からなる景観が町の大きな魅力です。令和4年3月20日に上島架橋「岩城橋」の供用が開始され、「ゆめしま海道」が全線開通することとなりました。町内の島々が橋で結ばれ、多くの人々がこの地を訪れて、瀬戸内海の豊かな歴史文化や自然を肌で感じる事が期待されています。

上島町にある佐島は、塩の荘園として知られる伊予国弓削島荘の故地である弓削島の南西にある島です。令和3年10月11日付け官報告示により、「弓削島荘遺跡」が正式に国の史跡に指定されました。弓削島荘は東寺領荘園として著名ですが、宮ノ浦（みやんな）遺跡がある中世の佐島は石清水八幡宮の荘園であった歴史があり、かつては周辺の島々と同じく製塩の島でした。

上島町では、平成25年度から上島町内遺跡発掘調査等事業として、文化庁、愛媛県教育委員会のご指導ご助言を賜りながら、製塩遺跡の発掘調査、弓削島荘の総合調査および埋蔵文化財包蔵地詳細分布調査を進めて参りました。宮ノ浦遺跡の発掘調査は、愛媛大学法文学部考古学研究室の皆様のご尽力を賜り継続して実施して参りました。

本報告書は、令和2年度から令和3年度にかけて実施された宮ノ浦遺跡の第10次および第11次の発掘調査の成果を中心に報告するものです。当初、宮ノ浦遺跡では、古墳時代および中世の製塩遺跡として発掘調査を進めてきました。第10次調査以降は、佐島周辺の瀬戸内海に海水が流入する縄文海進以前の縄文土器群が出土する文化層の解明を主な目的として調査研究を進めています。新型コロナウイルス感染症の拡大の影響から、発掘調査規模の縮小を余儀なくされましたが、これまでの宮ノ浦遺跡の調査は確実に実を結びつつあります。

現在、上島町の文化財保護行政は、「史跡弓削島荘遺跡の保存・活用」、「資料館の設置・整備」、「宮ノ浦遺跡の発掘調査」の3つの課題に取り組んでいます。宮ノ浦遺跡は、郷土の歴史を理解し復元するために必要な多くの情報をもった貴重な遺跡です。本報告書が文化財保護に対する理解を深め、教育並びに学術研究、郷土史研究の基礎資料として広く活用されることを切に願っています。

最後になりましたが、本調査事業を実施するにあたり、懇切なるご指導ご助言を賜りました諸先生方、そして、多大なるご理解とご協力を賜りました関係機関および地元住民の皆様に厚くお礼を申し上げます。

令和4年3月

愛媛県上島町教育委員会

教育長 高 橋 典 子

## 序 文

2019（令和元）年8月、例年通り宮ノ浦遺跡の第9次発掘調査を実施した。その報告書製作が佳境に入った頃、新型コロナウイルス感染が猛威を振るいはじめ、学生は大学に入ることすらできず、その年度末の報告書刊行を断念した。それを挽回し、さらに成果を挙げるべく臨んだ2020（令和2）年8月の第10次発掘調査は、再度、新型コロナに阻まれ、学部生は数日おきに数名ずつ日帰りで参加しただけで、さらに秋以降も大学での自由な活動ができず、学生が自室を作業場に取り組んだ発掘報告書は第9次調査分を刊行するのがやっとであった。

そして臨んだ今年度、2021（令和3）年8月の第11次発掘調査も昨年同様、合宿調査が認められなかった。それならばと大学の許可を得て、笹田朋孝准教授が毎日ワゴン車で松山と上島を往復するという形で学部生が参加できるようになったのではあるが、盆前からのコロナの猛威にまたもや学部生の参加を控えざるを得ず、限られたメンバーで発掘調査を収束させるしかなかった。それでもギリギリまで活躍した学生たちのおかげでそれなりの成果が上がり、秋から整理作業ができることを疑わなかった。しかし、またもや新型コロナの壁が立ち塞がり、学生たちは許可なしでは校内に入ることができず、日常的な研究室活動も全くできない状況になってしまった。

そのような状況のなか、漕ぎ着けた宮ノ浦遺跡の第10次・第11次発掘調査概報の刊行である。概報という形での刊行は、当初目的の完遂を意味するものではなく、必要最小限の内容しか公開できないという点で満足いくものではない。しかし、それに携わった学生たちの苦労、渴望、孤愁、憤懣などを思うと、なんの抑圧もなく、自由を享受して二十歳前後を過ごした自分には不満をいう資格はない。楽しい学生生活とはよほどいえない抑圧された時間をコントロールしながら、遺物を整理し、報文を書き、限られた時間に結集して本書を完成させた学生諸君に敬意を送りたい。

ただ一方で、この調査研究の舞台が宮ノ浦遺跡であり、それが佐島、上島町にあることを思い起こさねばならない。この2年間、発掘期間中の現地説明会は実施していないし、年度末の島での成果報告会も開催していない。毎年、町内外から多くの方々に足を運んでいただき、遺跡の重要性や面白さを感じていただいた。それが途絶えてしまった。この途絶をいかに回復させるかということも、先行き不透明なコロナ禍社会のなかで考えていかなければならない。

2022（令和4）年3月

愛媛大学考古学研究室  
村 上 恭 通

# 例 言

1. 本書は、愛媛県越智郡上島町弓削佐島に所在する宮ノ浦遺跡の第10次発掘調査ならびに第11次発掘調査の概要報告書である。なお、いずれの調査も国庫補助事業「上島町内遺跡発掘調査等事業」として実施した。
2. 遺跡における発掘・記録作業は第2章2に記載した参加者が行った。
3. 遺物の整理作業は次のメンバーが行った。  
品川愛〈高松市教育委員会〉、鄭宗鎬、馬赤嬰〈以上、愛媛大学大学院博士課程〉、青木聡志〈愛媛大学大学院修士課程〉、大塩啓一郎、永田櫨、藤田一希、古江七海、伴井嘉正、福本佳織、益田千遥〈以上、愛媛大学学部生〉、野本英理加〈愛媛大学研究生〉
4. 図のトレースは鄭、馬、青木、大塩、永田、藤田、古江が担当した。
5. 遺物の写真撮影は安藤公雄（愛媛大学アジア古代産業考古学研究センター）、福本が行った。
6. 文責については各担当者の氏名を文末に記した。
7. 土層の色調は『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）に依拠した。
8. 本文中における緯度、経度は国土地理院の地図情報データに基づいている。
9. 図中の方位の北は図2・図6を除き、すべて真北である。
10. 本文中の遺物番号と巻末写真図版の遺物番号は対応している。
11. トレンチごとに遺構番号を付している。
12. 本概報には整理途中の資料や知見が含まれており、また来年度以降も発掘調査が継続されることから、その内容に変更が生じる場合がある。その場合、正式報告書における記述を最終的な見解としたい。
13. 本報告書の作成に当たり、次の方々よりご指導、ご協力いただいた。  
遠部慎（久万高原町教育委員会）、黒住耐二（千葉県立中央博物館）、柴田圭子（愛媛県埋蔵文化財センター）、柴田昌兎（愛媛大学埋蔵文化財調査室）、島津義昭、鈴木康之（県立広島大学）、兵頭勲（愛媛県教育委員会）、松本安紀彦（愛南町教育委員会）、山崎純男
14. 本書の編集は村上恭通の監修のもと有馬啓介、馬赤嬰が行った。

# 宮ノ浦遺跡Ⅵ

## 目 次

序 文  
例 言

|                         | 頁  |
|-------------------------|----|
| 第1章 遺跡の位置と環境 .....      | 1  |
| 1. 地理的環境 .....          | 1  |
| 2. 歴史的環境 .....          | 3  |
| 3. 周辺の遺跡 .....          | 6  |
| 第2章 調査の経緯・体制・経過 .....   | 9  |
| 1. 調査の経緯と目的 .....       | 9  |
| 2. 調査の体制 .....          | 10 |
| 3. 調査の経過 .....          | 10 |
| 第3章 発掘調査成果 .....        | 13 |
| 1. 調査区の設定 .....         | 13 |
| 2. 各トレンチの成果 .....       | 13 |
| (1) 4トレンチ .....         | 13 |
| (2) 17トレンチ .....        | 38 |
| 第4章 宮ノ浦遺跡出土貝類について ..... | 47 |
| 1. はじめに .....           | 47 |
| 2. 貝類の検討成果 .....        | 47 |
| 3. 結論 .....             | 49 |
| 第5章 成果と課題 .....         | 53 |

## 図 版 目 次

|      |                                                                                                                                                                                                           |       |                                                                                                |
|------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------|------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 図版 1 | 1. 宮ノ浦遺跡遠景（北から）<br>2. 調査前風景（南から）                                                                                                                                                                          | 図版 5  | 1. 17トレンチ北壁<br>2. 17トレンチ南壁<br>3. 4トレンチ東壁・17トレンチ東壁<br>4. 17トレンチ西壁<br>5. 17トレンチⅢ層古式土師器・製塩土器（北から） |
| 図版 2 | 1. 4トレンチ北壁（一部）<br>2. 4トレンチ南壁（一部）<br>3. 4トレンチ東壁<br>4. 4トレンチ西壁                                                                                                                                              | 図版 6  | 4トレンチ出土縄文土器（表面）、<br>4トレンチ出土縄文土器（裏面）                                                            |
| 図版 3 | 1. 4トレンチⅡ層上面（南から）<br>2. 4トレンチ2号遺構（東から）                                                                                                                                                                    | 図版 7  | 4トレンチ出土縄文土器・石鏃                                                                                 |
| 図版 4 | 1. 4トレンチ2号遺構（南西から）<br>2. 4トレンチ3号遺構（南から）<br>3. 4トレンチ3号遺構遺物出土状況（西から）<br>4. 4トレンチ4号遺構（一部、西から）<br>5. 4トレンチⅡ層鉄塊出土状況（北から）<br>6. 4トレンチⅣ層上面縄文土器出土状況（北西から）<br>7. 4トレンチ縄文土器・チップ出土状況（西から）<br>8. 4トレンチ石鏃・チップ出土状況（北から） | 図版 8  | 4トレンチ出土弥生土器・古式土師器、<br>4トレンチ2号遺構出土遺物 1                                                          |
|      |                                                                                                                                                                                                           | 図版 9  | 4トレンチ2号遺構出土遺物 2                                                                                |
|      |                                                                                                                                                                                                           | 図版 10 | 4トレンチ2号遺構出土遺物 3                                                                                |
|      |                                                                                                                                                                                                           | 図版 11 | 4トレンチⅡ層出土遺物                                                                                    |
|      |                                                                                                                                                                                                           | 図版 12 | 17トレンチ出土古式土師器・製塩土器、<br>17トレンチ出土古代～中世の土器                                                        |
|      |                                                                                                                                                                                                           | 図版 13 | 17トレンチ出土陶磁器、4トレンチ出土土錘、17トレンチ出土土錘                                                               |
|      |                                                                                                                                                                                                           | 図版 14 | 4トレンチ出土鉄製品・鍛冶関連遺物、<br>17トレンチ出土鉄製品・鍛冶関連遺物                                                       |

## 図 目 次

|     |                   |      |                     |
|-----|-------------------|------|---------------------|
| 図 1 | 宮ノ浦遺跡の位置と周辺遺跡分布図  | 図 8  | Ⅱ区4トレンチⅡ層上面遺構配置図    |
| 図 2 | 宮ノ浦遺跡とその周辺の地形図    | 図 9  | Ⅱ区4トレンチ出土縄文土器       |
| 図 3 | 佐島遺跡分布図           | 図 10 | Ⅱ区4トレンチ出土石器         |
| 図 4 | 芸予諸島における縄文時代遺跡分布図 | 図 11 | Ⅱ区4トレンチ出土弥生土器・古式土師器 |
| 図 5 | Ⅱ区第10次・第11次調査地点   | 図 12 | Ⅱ区4トレンチ2号遺構出土遺物 1   |
| 図 6 | Ⅱ区トレンチ配置図         | 図 13 | Ⅱ区4トレンチ2号遺構出土遺物 2   |
| 図 7 | Ⅱ区4トレンチ平面図・土層図    |      |                     |

図14 II区4トレンチ2号遺構出土遺物3  
図15 II区4トレンチII層出土遺物  
図16 II区4トレンチ出土土錘  
図17 II区4トレンチ出土鉄製品・鍛冶関連遺物  
図18 II区17トレンチ平面図・土層図  
図19 II区17トレンチ出土古式土師器

図20 II区17トレンチ出土製塩土器  
図21 II区17トレンチ出土古代～中世土器  
図22 II区17トレンチ出土陶磁器  
図23 II区17トレンチ出土土錘  
図24 II区17トレンチ出土鉄製品・鍛冶関連遺物

## 写 真 目 次

写真1 発掘調査風景（第10次調査）  
写真2 発掘調査風景（第11次調査）  
写真3 宮ノ浦遺跡II区4トレンチII－4層出土貝類

写真4 宮ノ浦遺跡II区4トレンチ2号遺構出土貝類

## 表 目 次

表1 宮ノ浦遺跡II区4トレンチII－4層出土の貝類

表2 宮ノ浦遺跡II区4トレンチ2号遺構出土の貝類

# 第1章 遺跡の位置と環境

## 1. 地理的環境

瀬戸内海の西部に位置する芸予諸島は、広島県（安芸、備後）と愛媛県（伊予）にかけて所在する島々を総称している。その北部には広島県に属する向島、因島、生口島があり、それに愛媛県の上島諸島が連なる。上島諸島は越智郡上島町に所属し、弓削島、佐島、生名島、岩城島、赤穂根島、津波島、魚島などで構成されている。これら瀬戸内海の島々は、西南日本内帯の領家帯に属する花崗岩類を基盤岩とする。更新世のこの海域は、地球規模の海水面低下により、草原地帯であったと考えられている。しかし、後氷期の気温上昇にともなった北極圏での氷解が、海水面の上昇をもたらし、現在のような景観を作り出した。

弓削島の南西に位置する佐島は、南北方向に細長い島であり、南北約3.5km、東西約2km、面積は約2.67km<sup>2</sup>を測る。島の脊梁を幅の広い丘陵が占め、平地は海岸沿いにわずかにある程度である。島の北東部と南部は、山や小丘陵がそのまま海に没し、海面近くで波蝕崖が形成されている。そして、島の東部は小規模で浅い湾と波蝕崖とが交互に連なっており、その湾のうちの一つが宮ノ浦湾と呼ばれ、宮ノ浦遺跡はそれに面して立地している（図1）。

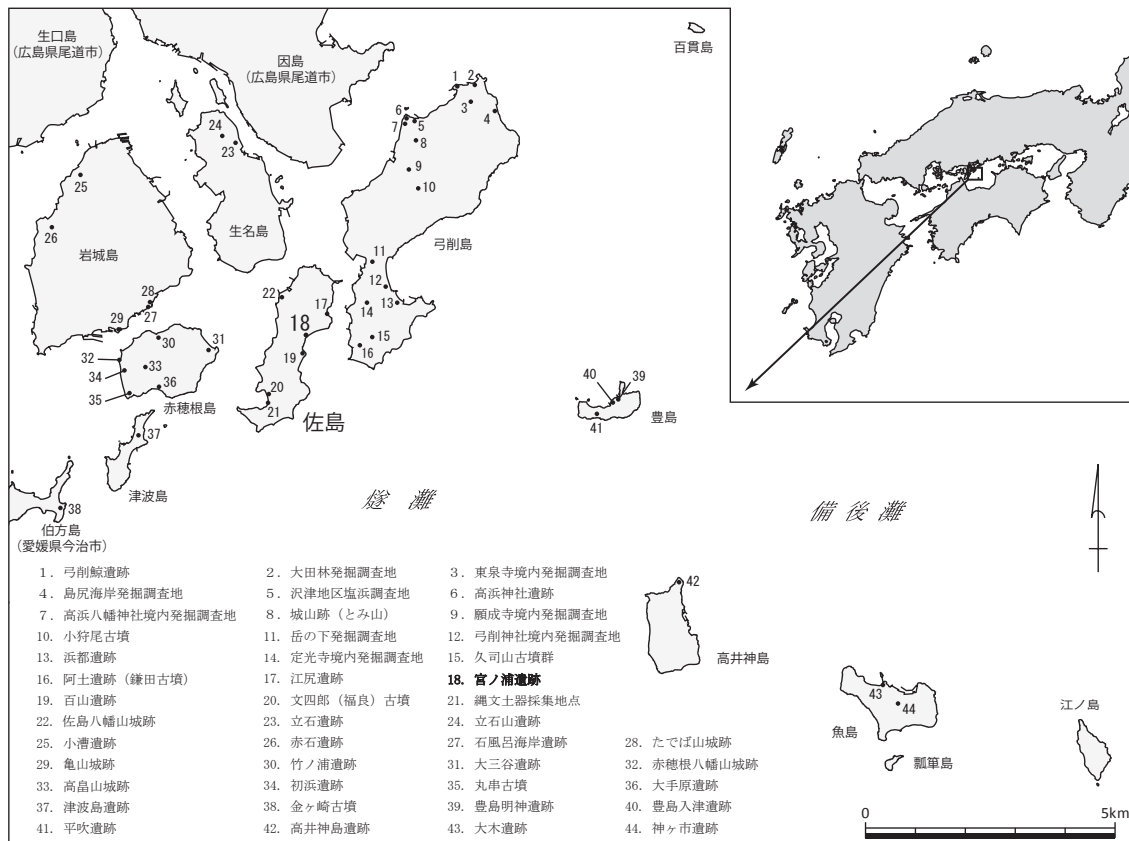


図1 宮ノ浦遺跡の位置と周辺遺跡分布図

## 1. 地理的環境

宮ノ浦遺跡は、上島町弓削佐島2232番地外に所在し、北緯34度14分42秒、東経133度11分30秒（Ⅰ区地点）に位置する。東西約400mで湾曲してのびる海岸線に併行して形成された浜堤は、北側背後にある丘陵から南側にのびる低い舌状丘陵を境に、二つの浜堤に分かれている。遺跡は主に浜堤上に立地しており、西側浜堤を中心とした遺跡と東側浜堤を中心とした遺跡がある。第7次調査から西側をⅠ区、東側をⅡ区と区分した（図2）。

Ⅰ区とその周辺は、砂浜、浜堤、その背後にいわゆる後背湿地、そして標高30m～50mの小丘陵で構成されている。後背湿地において第6次調査で実施したボーリング調査の結果、現湿地面から約11m掘っても岩盤には到達せず、また地表下約9mから検出された木炭が年代測定の結果 $15828 \pm 40BP$ を示すことから、最終氷期以前のこの一帯は崖錐地形であることが判明した〔パリノ・サーヴェイ株式会社2018〕。つまり、もともと谷のように深く落ち込んでおり、そこに陸、海から土砂が供給されることで現在の地形が形成されたのである。一方、Ⅱ区は類似した地貌を呈してはいるものの、第10次・第11次調査で、浜堤堆積物の下に縄文時代早期前半の土器を含む花崗岩の風化層があり、さらにその下に花崗岩の風化礫層が確認された。このことは海成砂層の下に埋没丘陵があることを示しており、その丘陵が東側の元見山からのびていた様子を想定できるようになった。仮に海水がないものと想像して、宮ノ浦湾側から北を見るならば、元見山から西に低丘陵がのび、その西側に高い崖が連なる景観を復元することができよう。なお、調査区最奥部の2トレンチでは、標高1m以下は水性堆積層が深く形成されていることがわかり、元見山の北にある江尻浜の方から海が湾入し、その後、湿地化して現況にいたったと考えられる。

（鄭 宗鎬）

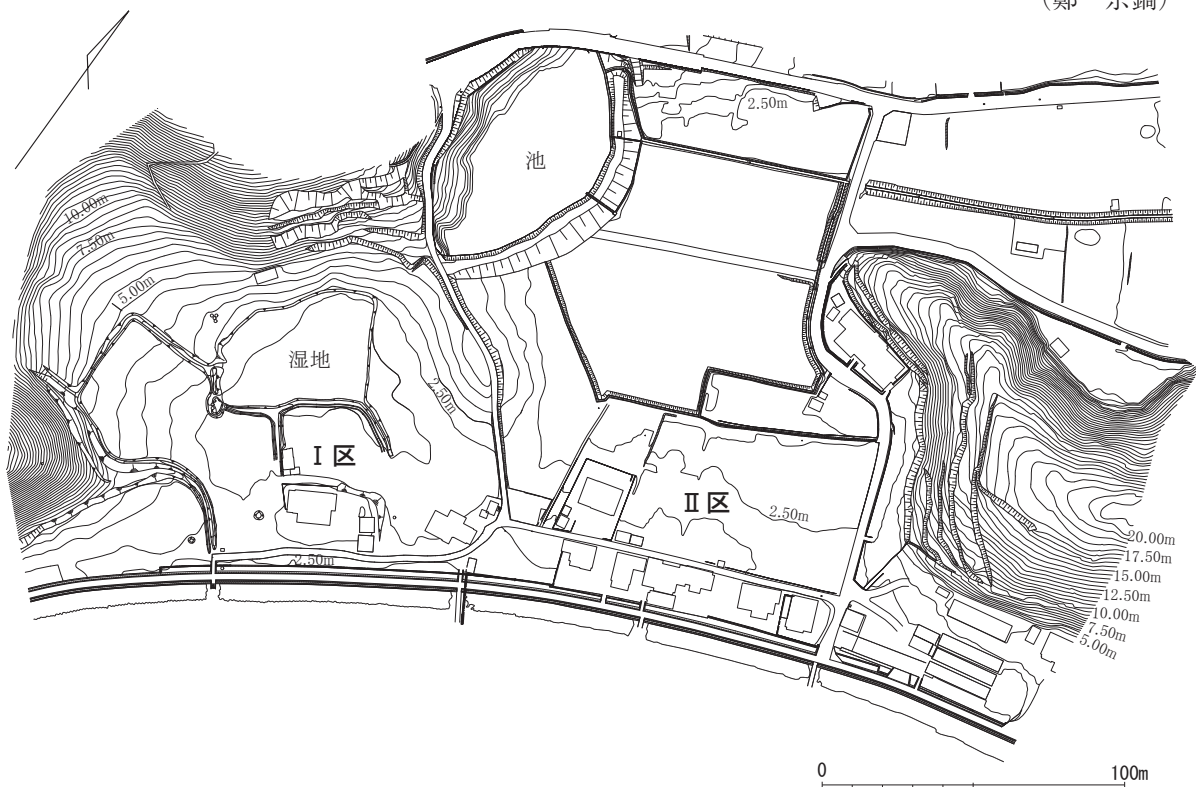


図2 宮ノ浦遺跡とその周辺の地形図

## 2. 歴史的環境

宮ノ浦遺跡から海岸に沿って南へ500m離れた場所に、東に向かって突出した小丘陵がある。その標高約30mの比較的平坦な丘陵上には旧石器時代の遺跡である百山遺跡があり、サヌカイト製のナイフ形石器が採集されている〔長井2008〕。

縄文時代の遺跡については、宮ノ浦遺跡Ⅱ区の遺物包含層で、撚糸文、刺突文、条痕文をもつ縄文土器が発見され、早期前半に遡ると報告されている〔有馬・品川編2019、有馬・青木編2021〕。宮ノ浦遺跡ではこれら以外にもⅠ区やⅡ区で前期、後期、晩期の土器が出土した。また、佐島南部にある福良地区や北東部の江尻地区の砂浜海岸においても前期や後期の縄文土器片が採集されている（図3）。

弥生時代の遺跡については、佐島ではまだ周知されている例はなく、宮ノ浦遺跡で土器数点が確認されているに過ぎない〔有馬・八木編2016〕。隣島の生名島では、その北部にあり、水道を見下ろす山頂に立石山遺跡がある〔長井・土居1979、生名村誌編纂委員会編2004〕。標高約140mに位置しており、山頂あるいはやや下った岩陰周辺で中期末葉の凹線文土器や太型蛤刃石斧が発見された。また、岩城島のほぼ中心にそびえる標高369.6mの積善山山頂でも凹線文土器が採集されている〔愛媛県史編さん委員会編1982〕。岩城島では、この山頂から南へ派生する丘陵上の標高70m～80mにある空久保遺跡でも中期中葉の土器が採集されており、この時期から丘陵や山頂へ居住域が徐々に展開するものと思われる。全体的に低平な佐島では、このようないわゆる「高地性集落」に適した地形はない。しかし、江尻地区において、砂浜海岸の北にある標高約20mの小丘陵傾斜面から凹線文を有する甕や壺の口縁部片が採集されており、当時の生活域である可能性が考えられる。立石山遺跡や積善山遺跡に比較すれば、はるかに標高は低いものの、海を見下ろす立地は同じである。この選地は、凹線文期の中期末葉において浜堤上の生活址が全く発見されないことと密接な関係があると考えられる。

古墳時代の遺跡としては、福良湾の北にある丘陵上に位置する文四郎（福良）古墳が古くから知られていた〔弓削町誌専門委員会編1986〕。1970（昭和45）年10月、農道工事中に花崗岩製の箱式石棺墓が発見され、棺内から頭蓋骨片や骨盤片のほか、長さ約1mの鉄刀が出土した。その後、人骨について調査した結果、被葬者が成年男子であることが分かり〔田中2014〕、さらに頭蓋骨から抽出したコラーゲンを試料として自然科学的な年代測定を実施した結果、3世紀中葉の年代が得られた〔今治市村上水軍博物館編2014〕。この年代は、宮ノ浦遺跡で製塩が盛んに行われた時期に相当し、生産活動が活発な段階において箱式石棺に埋葬された佐島の有力者の存在を垣間見ることができる。そして脚台式製塩土器が使用されたこの時期の製塩遺跡として、岩城島の石風呂海岸遺跡、赤石遺跡、長江遺跡〔有馬編2018〕、赤穂根島の大三谷遺跡、竹ノ浦遺跡、大手原遺跡、初浜遺跡が知られており〔野口編1992〕、上島諸島各地で製塩が行われていたことがわかる。

製塩活動が一旦低調となる古墳時代中期には、瀬戸内各地の島に祭祀の痕跡が遺されており、上島諸島では魚島の大木遺跡がそれを代表する著名な遺跡である〔長井1975〕。稀少なコップ形製塩

## 2. 歴史的環境



図3 佐島遺跡分布図

1. 宮ノ浦遺跡 2. 江尻遺跡 3. 百山遺跡 4. 文四郎（福良）古墳 5. 縄文土器採集地点 6. 佐島八幡山城跡

土器、ミニチュア土器、小型仿製鏡、鉄鋌を含む鉄器類が採集されている。鉄器類は時を経て再整理され、鉄鋌に複数の種類があることや小型鉄剣の存在が判明した。なおこのような製塩土器をともしなう祭祀遺跡が脚台式の段階、つまり前期にまで遡ることを豊島明神遺跡の発掘調査成果が示している〔村上編2016〕。

古墳時代後期を迎えると、製塩活動は小規模ではあるが復調をみせ、宮ノ浦遺跡や岩城島の石風呂海岸遺跡、船越遺跡にその痕跡がのこされていた。また、後期から終末にかけては、上島諸島でも横穴式石室を主体部とする古墳が築造されており、弓削島下弓削の久司山古墳群、上弓削の小狩尾古墳が知られている〔弓削町誌専門委員会編1986〕。生名島東岸にも、工事で滅失し、完形の須恵器や土師器が今に伝わる厳島古墳があった〔生名村誌編纂委員会編2004〕。現在までのところ、佐島では後期古墳の存在は知られていない。製塩活動が各島で行われたのに対し、古墳築造を可能とした島は限定される傾向が読み取られる。

宮ノ浦遺跡では、これまでの発掘調査で、奈良時代から平安時代にかけての土器、陶磁器が出土している。I区N15グリッドでは、鍛冶滓、鍛造剥片という鍛冶関連遺物がまとまって出土し、うち1点の鍛冶滓に噛み込んだ木炭を年代測定した結果、calAD779～984の年代が得られた〔大澤・パリノ・サーヴェイ株式会社2021〕。この時期、海に面した浜堤上に、鍛冶屋を備えた漁村の存在が想定できるようになった。

古代の様相を礎に、海との関わりは中世を迎えてますます強くなっていくものと考えられる。特に京都の東寺領荘園であった弓削島は、年貢として塩を納めた「塩の荘園」として知られている〔清水1975〕。2015（平成27）年10月に世界の記憶（ユネスコ記憶遺産）に登録された「東寺百合文書」には、弓削島における荘園に関する記録が400通ほど残されている。また、2016（平成28）年より始まった「弓削島庄総合調査」の一環で、この文書にも登場する高浜八幡神社や大田林で発掘調査が行われ、当時の塩田の浜床が確認された〔有馬・曾根編2020、村上編2020〕。塩田の構造や景観も捉えやすくなったといえよう。

さて東寺百合文書では、「弓削御庄」の名が久安6（1150）年の記録に初めて現れるが、それと時をほぼ同じくする保元3（1158）年の石清水八幡宮文書によれば、佐島は生名島、岩城島、味酒郷（愛媛県松山市）とともに京都の石清水八幡宮領荘園となっている。宮ノ浦遺跡ではまさにその時期の土器・陶磁器類が大量に出土し、また、第9次発掘調査で鹹水溜めの機能が想定される槽状遺構も発見された〔有馬・青木編2021〕。この時期の宮ノ浦遺跡が単なる漁村、海村ではなく、荘園に関わる機能を有していた可能性がきわめて高いといえよう。

その後、14世紀を迎えると、弓削島では小早川氏や小泉氏の出現により東寺の荘園経営が困難になる。その後、「村上水軍」で知られる村上氏の出現により、各島に海城が築城されることとなる。佐島では、現在八幡神社の社殿がある佐島八幡山城跡が中世城館跡とされている。

（鄭 宗鎬）

### 3. 周辺の遺跡－旧石器時代・縄文時代－

佐島にある旧石器時代の百山遺跡、そして埋没丘陵上から縄文土器が出土した宮ノ浦遺跡を理解するために、芸予諸島から高縄半島にかけて分布する旧石器時代、縄文時代の遺跡について概観したい。

佐島に隣接する島々でも旧石器が採集されており、弓削島の弓削鯨遺跡、生名島の立石山遺跡、津波島ではナイフ形石器が採集されている〔長井2008〕。遺跡はいずれも佐島の百山遺跡と同様、海を眼下におく山塊上にあり、当時における居住域の特徴を示している。津波島の南西に位置する今治市伯方島の金ヶ崎遺跡も芸予諸島の旧石器時代の遺跡として著名であり、サヌカイト、頁岩、チャート製のナイフ形石器を中心とする石器群が出土している。

続く縄文時代は、芸予諸島から高縄半島にかけて、海岸線に沿って多数の遺跡が分布している(図4)。今治市波方町にある江口貝塚の発掘を機に、入り江ごとに個別に定着するパターンが指摘され、縄文前期以降の瀬戸内島嶼部の生活形態を反映するものと評価された〔宮本1991〕。ただし、中期には季節的な集落経営を反映して集落の数が減少し、後・晩期になって定住化が促進されるという〔宮本1994〕。上島諸島でも、佐島では宮ノ浦遺跡、福良海岸、弓削島では高浜海岸、岩城島では石風呂海岸遺跡、赤穂根島では竹ノ浦遺跡、大三谷遺跡、大手原遺跡、そして豊島では豊島明



図4 芸予諸島における縄文時代遺跡分布図

神遺跡で後期の土器が発掘ないしは採集されており、上述の指摘を反映している。

この状況に対し、縄文早期以前の遺跡は数が限られている。押型文土器が出土した遺跡としては、今治市の伯方島西岸を見下ろす台地上にあった叶浦B遺跡が挙げられる。この遺跡では黄島式から高山寺式にいたる押型文土器、そして厚手無文土器、条痕文土器が出土した〔井原・野口編1980〕。また上島諸島では、佐島の隣島、生名島南岸の谷にある稲浦遺跡で高山寺式の押型文土器が採集されている〔村上編2014〕。草創期については、有舌尖頭器が採集された遺跡が点在している。北から岩城島の小漕遺跡、大三島の深山七衛門遺跡、深山大平遺跡、伯方島の熊口遺跡、そして今治市の別所定地遺跡が挙げられる〔多田1994、1997〕。草創期と早期の押型文土器段階との間には、現在のところ全く考古学的な知見がないという現状にある。

（鄭 宗鎬）

#### 【参考文献】

- 有馬啓介編2018『上島町内遺跡詳細分布調査報告書Ⅰ－平成25～27年度上島町内遺跡発掘調査等事業報告書－』愛媛県越智郡上島町教育委員会
- 有馬啓介・青木聡志編2021『愛媛県越智郡上島町宮ノ浦遺跡Ⅴ－第9次発掘調査報告－』愛媛県越智郡上島町教育委員会
- 有馬啓介・品川愛編2019『愛媛県越智郡上島町宮ノ浦遺跡Ⅳ－第8次発掘調査報告－』愛媛県越智郡上島町教育委員会
- 有馬啓介・曾根大地編2020『弓削島庄総合調査報告書』愛媛県越智郡上島町教育委員会
- 有馬啓介・持永壮志朗編2018『愛媛県越智郡上島町宮ノ浦遺跡Ⅲ－第6次・第7次発掘調査報告－』愛媛県越智郡上島町教育委員会
- 有馬啓介・八木宏明編2016『愛媛県越智郡上島町宮ノ浦遺跡Ⅱ－第1次～第5次発掘調査報告－』愛媛県越智郡上島町教育委員会
- 生名村誌編纂委員会編2004『生名村誌』生名村
- 井原忠昭・野口光比古編1980「叶浦B遺跡」『大三島・伯方島本四連絡道路（一般国道317号）埋蔵文化財調査報告書（Ⅱ）』埋蔵文化財発掘調査報告書第3集、財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 今治市村上水軍博物館編2014『芸予諸島・海民文化の考古学』平成26年度今治市村上水軍博物館開館10周年記念特別展、今治市村上水軍博物館
- 愛媛県史編さん委員会編1982『愛媛県史 原始・古代Ⅰ』愛媛県
- 大澤正己・パリノ・サーヴェイ株式会社 2021「宮ノ浦遺跡第8次発掘調査Ⅰ区出土鉄滓の分析」『宮ノ浦遺跡Ⅴ－第9次発掘調査報告－』愛媛県越智郡上島町教育委員会
- 清水三男 1975「塩の荘園「伊予国弓削島」」『中世荘園の基礎構造』清水三男著作集第3巻、校倉書房
- 多田 仁 1994「中四国における旧石器時代終末から縄文時代草創期の石器群」『中・四国の縄文時代草創期の土器と石器組成』第8回中四国縄文研究会
- 多田 仁 1997「愛媛の有舌尖頭器」『愛媛考古学』14、愛媛考古学会
- 田中良之 2014「人骨から見てくる原始古代」『弥生・古墳時代の芸予諸島：環境と人間＜予稿集＞』愛媛大学考古学研究室第14回公開シンポジウム・今治市村上水軍博物館開館10周年記念講演会、愛媛大学法文学部考古学研究室
- 長井数秋 1975「愛媛県魚島の遺物・遺跡について」『ソーシャル・リサーチ』第4号、ソーシャル・リサーチ研究会
- 長井数秋 2008「弓削諸島の考古学」『ソーシャル・リサーチ』第33号、ソーシャル・リサーチ研究会
- 長井数秋・土居睦子 1979「愛媛県立石山遺跡発掘調査報告」『愛媛の文化』第19号、愛媛県文化財保護協会
- 野口光比古編1992『赤穂根島埋蔵文化財試掘調査報告書』岩城村教育委員会
- パリノ・サーヴェイ株式会社 2018「宮ノ浦遺跡ボーリング調査および分析（概要）」『愛媛県越智郡上島町宮ノ浦遺跡Ⅲ－第6次・第7次発掘調査報告－』愛媛県越智郡上島町教育委員会

### 3. 周辺の遺跡－旧石器時代・縄文時代－

宮本一夫 1991「江口貝塚第1次調査の成果と課題」『江口貝塚第1次調査』愛媛大学法文学部考古学研究報告第1冊、愛媛大学法文学部考古学研究室

宮本一夫 1994「江口貝塚の調査成果と瀬戸内の縄文文化」『江口貝塚Ⅱ－縄文後晩期編－』愛媛大学法文学部考古学研究室報告第3冊、愛媛大学法文学部考古学研究室

村上恭通編2005『瀬戸内海西部閉鎖海域における海民文化形成史の考古学的研究Ⅰ』愛媛大学法文学部考古学研究室

村上恭通編2014『上島町における動産的文化財の調査・整理協力プロジェクト』2013（平成25）年愛媛大学法文学部人文系学部長裁量経費（地域プロジェクト）報告書、愛媛大学法文学部考古学研究室

村上恭通編2016『愛媛県越智郡上島町豊島明神遺跡』愛媛大学法文学部考古学研究室・愛媛県越智郡上島町教育委員会

村上恭通編2020『東寺領荘園（新見荘・弓削島荘）の考古学的基礎研究』2016年度～2019年度科学研究費補助金基盤研究（B）研究成果報告書、愛媛大学アジア古代産業考古学研究センター

弓削町誌専門委員会編1986『弓削町誌』弓削町

## 第2章 調査の経緯・体制・経過

### 1. 調査の経緯と目的

2011年8月に着手した宮ノ浦遺跡の発掘調査は、当初西側のⅠ区から開始し、古墳時代前期の製塩址を中心に、縄文時代から現代にいたる人々の生活の痕跡を明らかにしてきた。このⅠ区の発掘は2018年の第8次調査で終了した〔有馬・品川編2019〕。一方、遺跡の東への広がりを確認するために元見山に近い平坦地を第7次調査からⅡ区として発掘を開始した。

Ⅱ区では、まず南北の基準線に沿って1～8トレンチを設定した。発掘してまもなくⅡ区の層順がⅠ区のそれと異なり、分厚く形成されたクロスナ層が古代～中世に属することが判明した。また5トレンチでは、クロスナ層の上面から中層にかけて被熱礫を含む亜円礫、円礫が広く、大量に検出され、それらに古代～中世の土器、越州窯系を含む陶磁器、土製品、鉄製品、骨角器および貝だまりがともなうことを確認した。5トレンチの礫群の性格が十分につかめないまま、第8次調査では調査区を西に展開したところ、礫や灰白色粘土が包含層中に散在する状況を確認し、さらに第9次調査では10・15トレンチで内壁に灰白色粘土を貼った土坑が各1基検出され、槽状遺構とした。その時期は共伴土器から12世紀中葉を中心とし、機能としては鹹水溜めを想定した。また各トレンチの北に配した14・16トレンチでも土坑や厚い焼土の堆積が検出されており、当該期の製塩活動に関連するものと判断した。また5トレンチでは礫群検出面の下層で被熱礫からなる集石遺構が発見され、それが火床であるとともに、大量の礫が元来、集石遺構の部材であったことも想定できるようになった。

さて、第9次調査では、宮ノ浦遺跡の発掘調査も翌2020年には10年目の節目を迎えることから、区切りをつけることも考慮し、掘削のおよんでいない下層における遺構・遺物の存否を確認することとした。そして、広い面積をもつ5トレンチ東壁沿いを1m幅で掘り下げたところ、古代～中世の分厚いクロスナ層の下に、生痕が顕著で、小型製塩土器の脚台を含む薄い包含層があり、さらにその下層に掘り進むと約1㎡の範囲で縄文土器が面的に出土した。しかもその縄文土器には撚糸文、条痕文、刺突文などが認められ、押型文土器よりも古い様相をもつと判断された。また検出時、砂層と判断していた縄文土器の包含層は、約50mmの花崗岩風化礫をまばらに含んでおり、色調も黄味が強く、これまで確認されていたいわゆる浜堤堆積物と判断するには違和感を覚えた。

このようにして、第9次調査では芸予諸島における最古級の縄文土器を検出し、さらに広い面積を調査し、その時期の物質文化を解明する課題が新たに生じた。またその包含層の供給源あるいは旧地形についても、疑問点を残したまま調査を終えることとなった。この地形の問題は、Ⅰ区とⅡ区の層順の相違、すなわち、Ⅱ区では表土層直下で古代～中世のクロスナ層が現れることの理由にも関連するものと推察された。そこで2020年度の第10次調査は、縄文時代早期の物質文化と包含層形成の要因ならびに旧地形の復元を目的に実施することとした。ただし、第10次調査では、既往の

## 2. 調査の体制

トレンチを拡張・設定した4トレンチにおいて、上層のクロスナ層中で中世に属する複数の遺構が検出され、それらの調査に時間がかかった。またコロナ禍で発掘調査参加者が限られていたことも重なり、十分な時間をかけて縄文土器包含層を精査することができなかった。そこで2021年度の第11次調査はこの4トレンチの調査継続と4トレンチ南側に新たなトレンチを設定して縄文時代の包含層の広がりを追跡することとした。

(村上恭通)

## 2. 調査の体制

宮ノ浦遺跡の第10次・第11次発掘調査は愛媛大学考古学研究室と上島町教育委員会が協力して実施した。その実施体制は次の通りである。

事業主体：上島町

調査主体：上島町教育委員会

発掘調査担当：愛媛大学考古学研究室（代表：村上恭通）、有馬啓介（上島町教育委員会）

発掘調査の参加者は次の通りである。

第10次調査（2020年）：

有馬啓介、曾根大地、清水伸、藤原綾子（上島町教育委員会教育課）、村上恭通（愛媛大学教授）、笹田朋孝（同大学准教授）、辻康男（株式会社パレオ・ラボ）、馬赤嬰、青木聡志（愛媛大学修士2年生）、大塩啓一郎（愛媛大学3回生）、永田權、藤田一希、古江七海（同2回生）、藏本諭（大洲市教育委員会）、持永壮志朗（愛媛県教育委員会）、小野隼弥（今治市教育委員会）、谷若倫朗、国安登

第11次調査（2021年）：

有馬啓介、曾根大地、清水伸、藤原綾子（上島町教育委員会教育課）、村上恭通（愛媛大学教授）、笹田朋孝（同大学准教授）、辻康男（株式会社パレオ・ラボ）、鄭宗鎬、馬赤嬰（愛媛大学博士1年生）、青木聡志（同修士2年生）、大塩啓一郎（愛媛大学4回生）、永田權、藤田一希、古江七海（同3回生）、伴井嘉正、福本佳織、益田千遥（同2回生）、野本英理加（愛媛大学研究生）、荒友里子（愛媛大学アジア古代産業考古学研究センター）、藏本諭（大洲市教育委員会）、谷若倫朗、国安登

(村上恭通)

## 3. 調査の経過

### （1）第10次調査

第10次発掘調査は2020年8月7日～17日に実施された。新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、学部専攻生は合宿が許可されなかったために、少人数が交替しながら日帰りで参加することとなり、毎日の参加者は過去の調査にはないほど少なかった。

第9次調査では、5トレンチの最下層となる砂層が縄文土器を含む遺物包含層であることが判明

した。その縄文土器のなかには、押型文土器以前の撚糸文土器が含まれており、芸予諸島では初見であることからその重要性を認識した〔有馬・青木編2021〕。そこで、第10次調査は縄文土器の包含層の東側への広がりを確認することを目的とした。

調査区は、5トレンチの東側に位置し、第7次調査で設定した4トレンチを取り込みながら東へ拡張し、南北2m、東西4mの範囲を対象とした。Ⅰ層を完掘すると、Ⅱ層上面で土坑1基が検出された。これを1号遺構として、完掘後掘り下げると、トレンチ北西部で礫が出土しはじめ、それが切り合い関係をもつ2基の土坑にともなうことが判明した。それらを2号・3号遺構と名付け、さらにその西側で硬化面を発見し、これを4号遺構とした。本トレンチを設定した当初の目的を遂行するために、3基の遺構は検出状況を記録後、4号遺構のみ完掘し、2号・3号遺構は出土遺物を取り上げて掘削を中止した。そして、トレンチ西壁から幅1mの範囲を先行的に掘り進め、古式土師器片や脚台式製塩土器片を含む古墳時代の遺物包含層（Ⅲ層）に到達した。さらに掘り下げると縄文土器片を包含するⅣ層にいたり、器表の風化が著しい縄文土器片を含む薄い層の下に撚糸文土器片を含む真砂土層を確認することができ、それぞれの層をⅣ-1層、Ⅳ-2層とした。さらに掘り進めて、風化途中にある固結層があることを確認して調査を終了した。

第10次調査では、Ⅱ層中に掘り込まれた2号・3号遺構の構造と性格、古墳時代遺物を含むⅢ層の堆積状況に関しては十分な調査ができず、また発掘面積が限られたために、縄文土器を包含するⅣ層の広がりを把握するという点については依然として課題が残った。

## （2）第11次調査

第11次発掘調査は2021年8月1日～23日に実施された。新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、第10次調査と同じく、学部専攻生は合宿が許可されなかったために、少人数が交替しながら日帰りで参加することとなった。しかし、8月上旬において新型コロナの急激な感染拡大に伴い、学生たちの参加は12日に中止となり、その後は現地滞在の調査メンバーを中心に実施された。さらには累日の豪雨により調査の進捗が妨げられ、途切れ途切れに進めるしかなかった。

第10次調査で明らかとなった課題を解決するために、4トレンチの発掘を引き続き実施した。さらに、4トレンチの0.5m南には南北軸沿いに南北2m、東西4mの調査区を新規に設定し、17ト



写真1 発掘調査風景（第10次調査）



写真2 発掘調査風景（第11次調査）

### 3. 調査の経過

レンチとした。

4トレンチでは、2号・3号遺構の状況を記録後、調査区中央付近の3号遺構については、構造を精査しながら完掘した。2号遺構は、その一部がトレンチの東側に良好に遺存していることが確実であるため、将来的に調査されることも想定された。したがって、遺物の取り上げ後、土嚢による養生で保存作業を行った。

その後、第10次調査で設定した西壁寄りの先行トレンチで層順を確認しながら、トレンチ中央部を徐々に掘り下げ、縄文土器の包含層であるⅣ-1、Ⅳ-2層を精査した。また調査区中央では、Ⅳ-2層上面で南から北にのびる自然流路が検出され、時期の異なる縄文土器が含まれていることも判明した。さらにⅣ-2層より下の層に対しても時間をかけて観察と分層を実施し、花崗岩の岩盤から真砂土層への岩体風化と土層形成のプロセスを確認して調査を終了した。

17トレンチでは、4トレンチと同様の層順が確認され、トレンチ西壁沿いのみを先行的に掘削し、古墳時代の製塩土器片や土師器片が見え始めるⅢ層上面まで到達した。しかし、調査を担当していた学部専攻生たちの調査参加が中止となり、その後土嚢を使って埋め戻した。

当初目的としたⅣ-2層は、その調査を4トレンチ内で約6m終えたに過ぎず、17トレンチのある南側に確実に広がっている。またⅣ層に削り込んだ自然流路が南にのびることも明らかである。縄文時代の物質文化のさらなる解明は次年度の課題である。

なお第11次調査では、遺跡周辺の関連調査の一環で、元見山の西側山腹で試掘を実施した。1×1.5mの長方形トレンチを約30cm掘ると花崗岩の岩盤が露出した。土師器片数点が出土した。

(馬 赤嬰)

### 謝 辞

宮ノ浦遺跡第10次・第11次調査に際して調査地の地権者である山下敏久氏、大窪幸子氏のご理解とご協力があったのはじめて可能となりました。心から感謝いたします。

日常生活においては、村上知貴氏、村上律子氏、村上友美氏、NPO法人弓削の荘のみなさまに格別なご配慮とご支援を頂戴いたしました。

また、下記の皆さまには、宮ノ浦遺跡に足をお運びいただき、ご指導とご支援を頂戴しました。心より感謝申し上げます（敬称略）。

井上博喜、今村 純、藏本真実、栗林誠治、柴田圭子、柴田昌児、乗松真也、山口莉歩

(村上恭通)

### 【参考文献】

有馬啓介・青木聡志編2021『愛媛県越智郡上島町宮ノ浦遺跡Ⅴ-第9次発掘調査報告-』愛媛県越智郡上島町教育委員会  
有馬啓介・品川愛編2019『愛媛県越智郡上島町宮ノ浦遺跡Ⅳ-第8次発掘調査報告-』愛媛県越智郡上島町教育委員会

## 第3章 発掘調査成果

### 1. 調査区の設定

現在の汀線や集落を西南西～東北東に走る生活道路を、Ⅱ区を調査していく上で基本となる軸と考えて、道路上にポイントを設置し、それに直交するラインを調査予定の宅地跡に設定した（図5・6）。この直交するラインを南北基準線とし、以下のように発掘区を設定した。この南北基準線は、真北から西に22度ずれている。

第10次調査では、第9次調査の成果をふまえて、5トレンチの東部で確認された縄文時代の遺物の展開を明らかにするために、第7次調査で発掘した4トレンチを東側に拡張して、発掘を実施した。そして、第11次調査では、4トレンチの調査を継続するとともに、縄文時代の包含層の調査を行うために4トレンチの南側に新たに17トレンチを設定し発掘調査を実施した。

以下、Ⅱ区の調査成果の概要について報告したい。Ⅱ区では調査区間で共通する土層が確認されている。共通する土層についてはローマ数字で記載しており、Ⅰ層が近世～近代の土層、Ⅱ層が古代～中世の土層（おもに古代末～中世初頭）、Ⅲ層が弥生～古墳時代（おもに古墳時代前期）、Ⅳ層が縄文時代の土層である。なおトレンチの平面図や土層図に10%の網掛けをして粘土の範囲を示している。（笹田朋孝）

### 2. 各トレンチの成果

#### （1）4トレンチ（図7・8）

第7次調査において設定した杭 No. 5を北西隅に置くトレンチであり、第10次調査で東に拡張し、南北2m、東西4mとした。第9次調査で本トレンチの西側に隣接する5トレンチ最下層で撚糸文、条痕文、刺突文などをもつ縄文土器片が検出され、その包含層の広がり、形成過程や旧地形を解明するために設定された。

第10次調査では、Ⅰa層を除去すると、Ⅰb層上面で1基、Ⅱ層中で4基の遺構が検出されたため、まずはそれらの調査から始めた。そしてトレンチ西側の4号、5号、6号遺構を調査後、西壁沿いに1m幅の先行トレンチを設定し、下層の調査に移行した。第11次調査では、2号、3号遺構を精査後、2号遺構は保存し、トレンチ中央部まで縄文土器包含層の調査範囲を広げた。

土層は4つに分層され、各層はさらに細分される。Ⅰ層は表土層であり、a、b2つに分層される。層厚はそれぞれ15～20cmであり、ほぼ水平に堆積している。Ⅱ層は4つに分層され、それぞれ5～20cm、15～20cm、15～20cm、5～10cmの層厚を測る。Ⅱ-1、2、4層はトレンチ全域に広がっており、ほぼ水平に堆積している。Ⅱ-1層は径50～100mm程度の角礫、円礫を含み、Ⅱ-2層は貝を多く含んでいるが、下層で出土する貝と比較して破碎率が高い。Ⅱ-3層はトレンチの南西隅

## 2. 各トレンチの成果

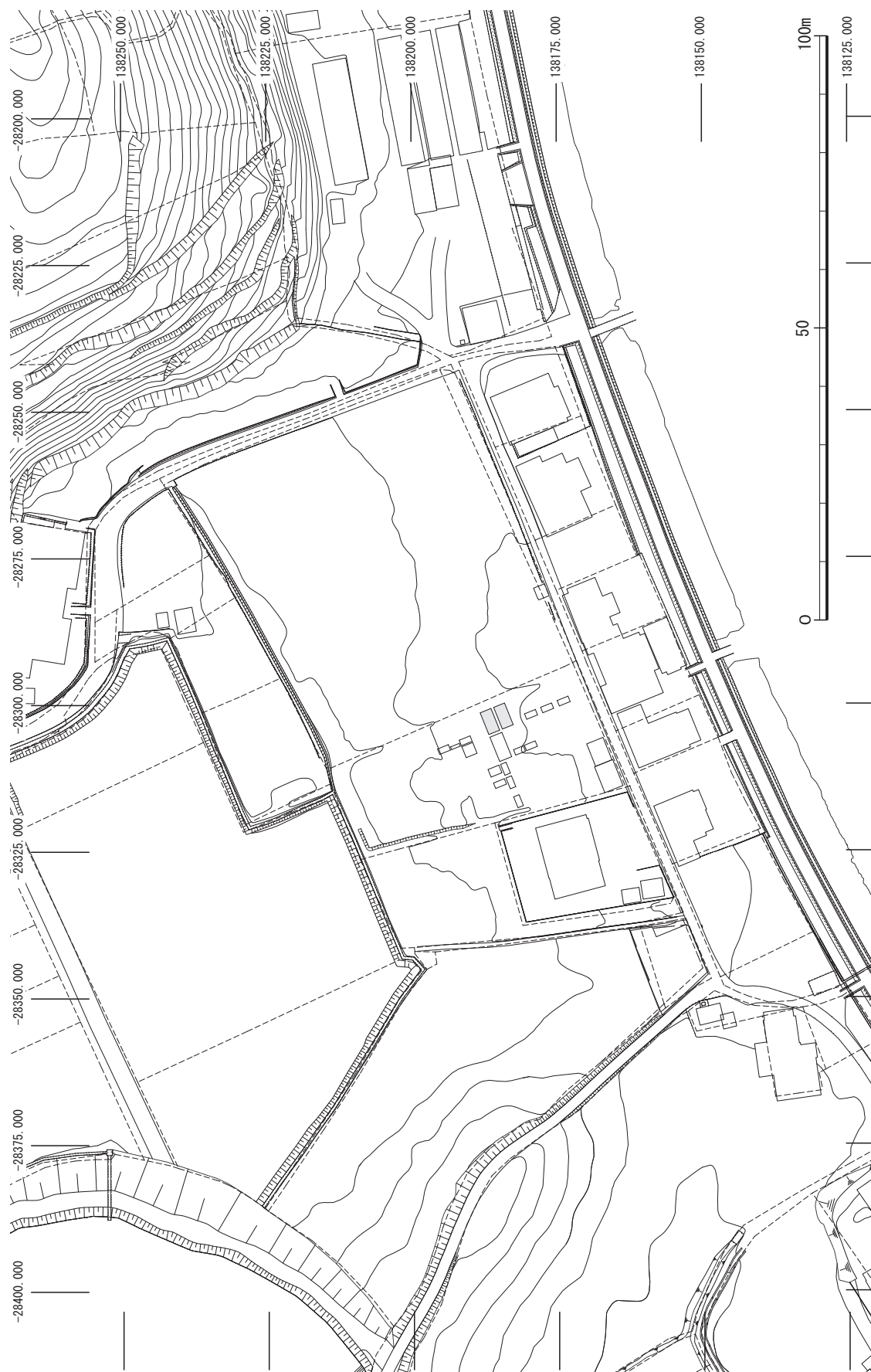


図5 II区第10次・第11次調査地点（図中の網掛け部分）

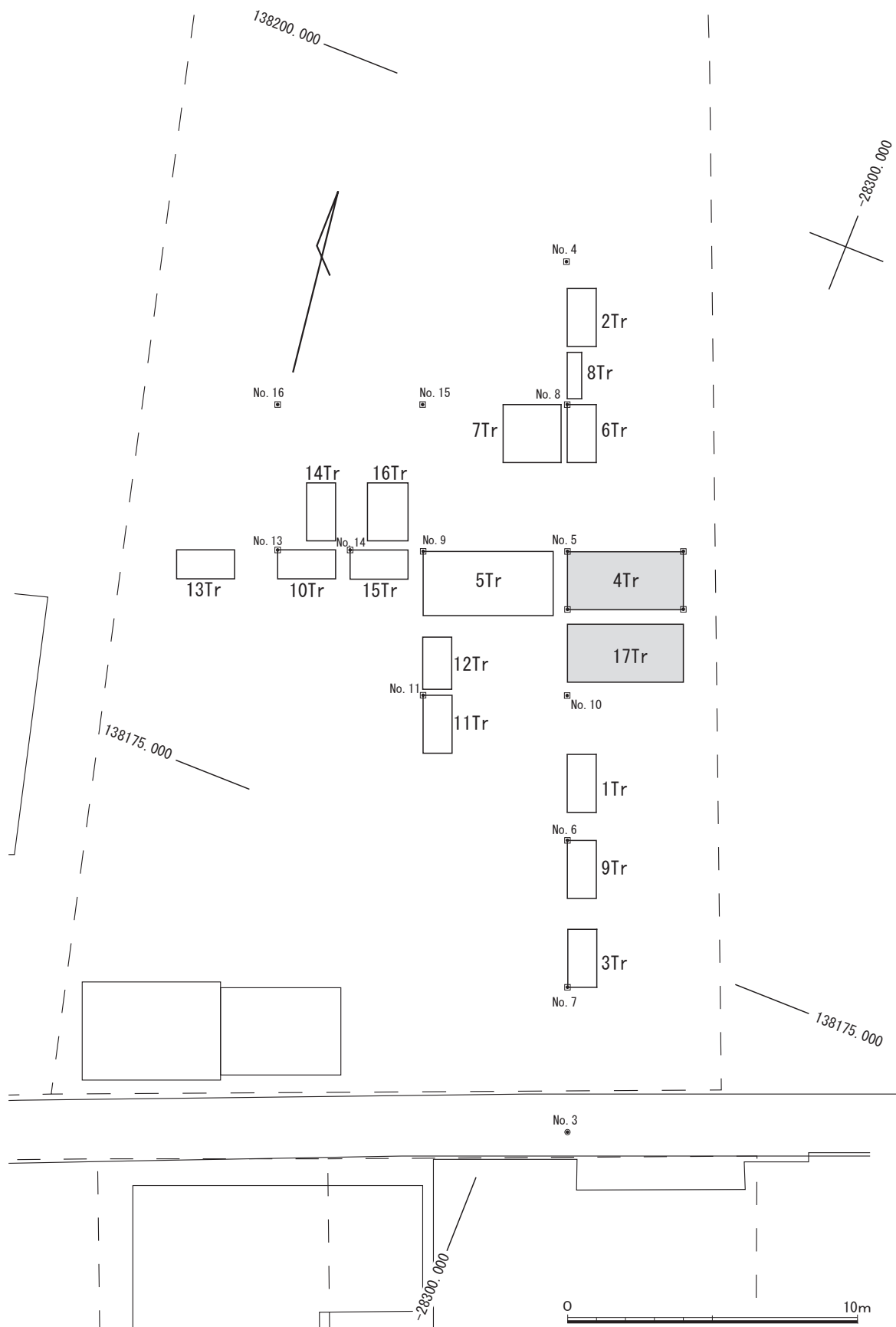


図6 II区トレンチ配置図（図中の網掛け部分）

## 2. 各トレンチの成果

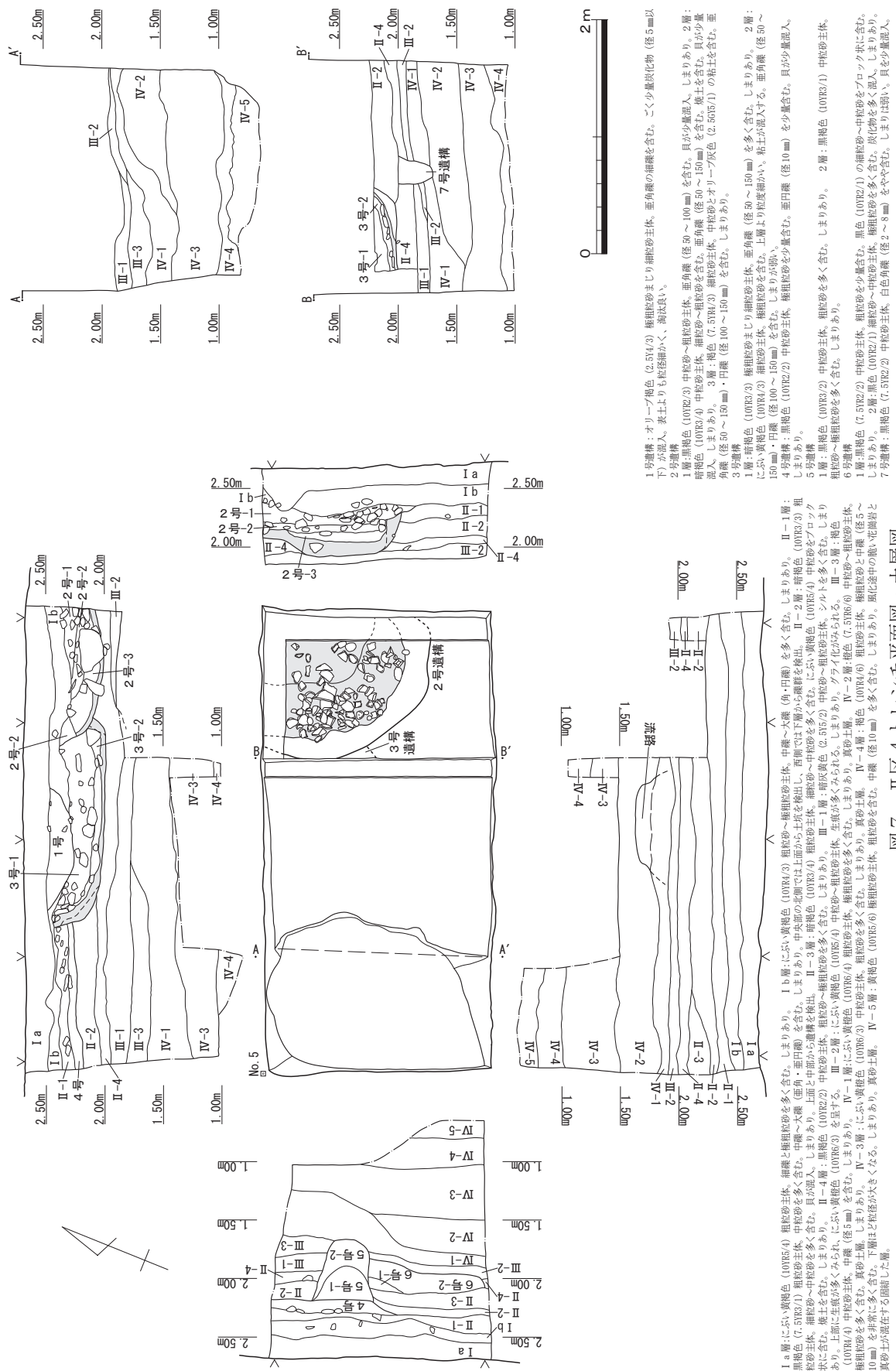


図 7 Ⅱ Ⅳ Ⅴ トレンチ断面図

のみで確認され、焼土をわずかに含んでいる。

Ⅲ層は3つに分層され、Ⅲ－1層はトレンチの西側に堆積し、層厚は北西で20～25cmと最も厚く、南東に向かって厚みを減じ、トレンチ南半にはおよばない。上部には生痕が認められ、またシルト質であることから、水成堆積の影響が想定される。Ⅲ－2層はトレンチの北西部を除き、全体に堆積が広がっている。層厚は5～10cmを測り、ほぼ水平に堆積しており、上部には生痕がみられる。Ⅲ－3層はトレンチの北西部で認められ、層厚は約15cmである。

Ⅳ層は5つに分層され、いずれも花崗岩が風化してできた真砂土層であり、そのうちⅣ－1、2層が遺物包含層である。Ⅳ－1層はやや黒みがある。他の層と比較して粘性もあり、土壤化が認められる。Ⅲ層に認められている生痕はほとんどみられない。本層はトレンチ全域に広がっており、層厚は不均等で、南側で約10cmとやや薄く、北側に向けて次第に厚みを増し、北壁では約50cmとなる。粗粒砂を主体とし、極粗粒砂を多く含む。縄文や条痕文の土器片を含んでおり、土器は小片で、多くはローリングを受けている。Ⅳ－2層は調査区の南側に堆積しており、粒度はⅣ－1層より細かく中粒砂～粗粒砂を主体とし、色調は明るい橙色を呈する。層厚は南東で約30cmと最も厚く、北西に向けて薄くなり、北壁にはおよばない。ただし本層はやや赤みがあり、Ⅳ－1層にはおよばないものの、土壤化の痕跡を示すものと思われる。第11次調査では本層とⅣ－1層の境で、遺物が面的に出土することが分かり、それ以下のレベルで出土する遺物とは分離することとした。したがって、層境で出土する遺物はⅣ－2層上面、それ以下のレベルの遺物はⅣ－2層と所属を明記している。なお本層上面において、トレンチ東寄りで南北に走る自然流路が確認された。流路は上層のⅣ－1層から貫入しており、覆土から中期末葉を下限とする縄文土器片が含まれていた。Ⅳ－3層はトレンチ全域に広がっており、北壁ではほぼ水平に堆積し、層厚が20～25cmであるのに対し、南壁では西で約50cm、東で約25cmと西から東へ向かって厚みを減じている。Ⅳ－4層は西壁沿いの先行トレンチで確認し、トレンチ全域に広がるものと推測される。Ⅳ－1～3層の真砂土層よりも粒径がかなり大きくなり、しまりが強い。Ⅳ－5層は風化途中の脆い花崗岩と真砂土が混在する固結した層である。

各層の主な出土遺物は、Ⅰa層では土師質土器、須恵器、土錘、Ⅰb層では脚台式製塩土器、土師質土器、須恵器、黒色土器、瓦器、Ⅱ－1層では土師質土器、須恵器、黒色土器、瓦器、貝、骨、Ⅱ－2層では土師質土器、須恵器、黒色土器、瓦器、吉備型土師器、陶磁器、土錘、鉄製品、鍛冶関連遺物、貝、骨、Ⅱ－3層では土師質土器、須恵器、黒色土器、瓦器、土錘、貝、Ⅱ－4層では古式土師器、製塩土器、土師質土器、須恵器、黒色土器、瓦器、土錘、鍛冶関連遺物、貝、Ⅲ－1層では古式土師器、貝、Ⅲ－2層では古式土師器、製塩土器、貝、Ⅲ－3層では古式土師器、製塩土器、貝が出土した。そして、Ⅳ－1層では縄文、条痕文をもつ土器や無文土器、Ⅳ－2層上面では彦崎Ⅱ式土器（9）や縄文、条痕文をもつ土器や刻目や沈線などを施す有文土器、打製石鏃、剥片、チップ、そしてⅣ－2層では撚糸文土器、剥片、チップが検出された。Ⅳ－3層、Ⅳ－4層、Ⅳ－5層では遺物が出土していない。

## 2. 各トレンチの成果

### 1号遺構

トレンチ中央部の北側においてⅠb層上面で検出された。トレンチ北側に展開している。直径1.05mの円形を呈する土坑であり、深さは23.5cmである。覆土は1層であり、少量の亜角礫や炭化物を含んでいる。Ⅰb層の中に掘り込まれ、3号遺構の一部を破壊している。土師質土器片がわずかに出土しているが、時期は掘り込み面から近世あるいは近代と考えられる。

### 2号遺構

トレンチ東壁沿いに位置し、Ⅱ-1層上面で検出された槽状遺構であり、底面、壁に粘土と礫を貼っている。遺構はその東側の一部がトレンチ外部にのこり、また西側に存在する3号遺構の一部を破壊している。平面形は略円形を呈し、その規模は直径約1.5m、深さ45cmである。トレンチ東壁に沿う先行トレンチで精査した結果、壁には粘土がやや混入した明褐色を呈する厚さ12.5cmのシルト質土を貼り付け、底部には厚さ5～10cm程度の粘土が貼り付けられていることが分かった。粘

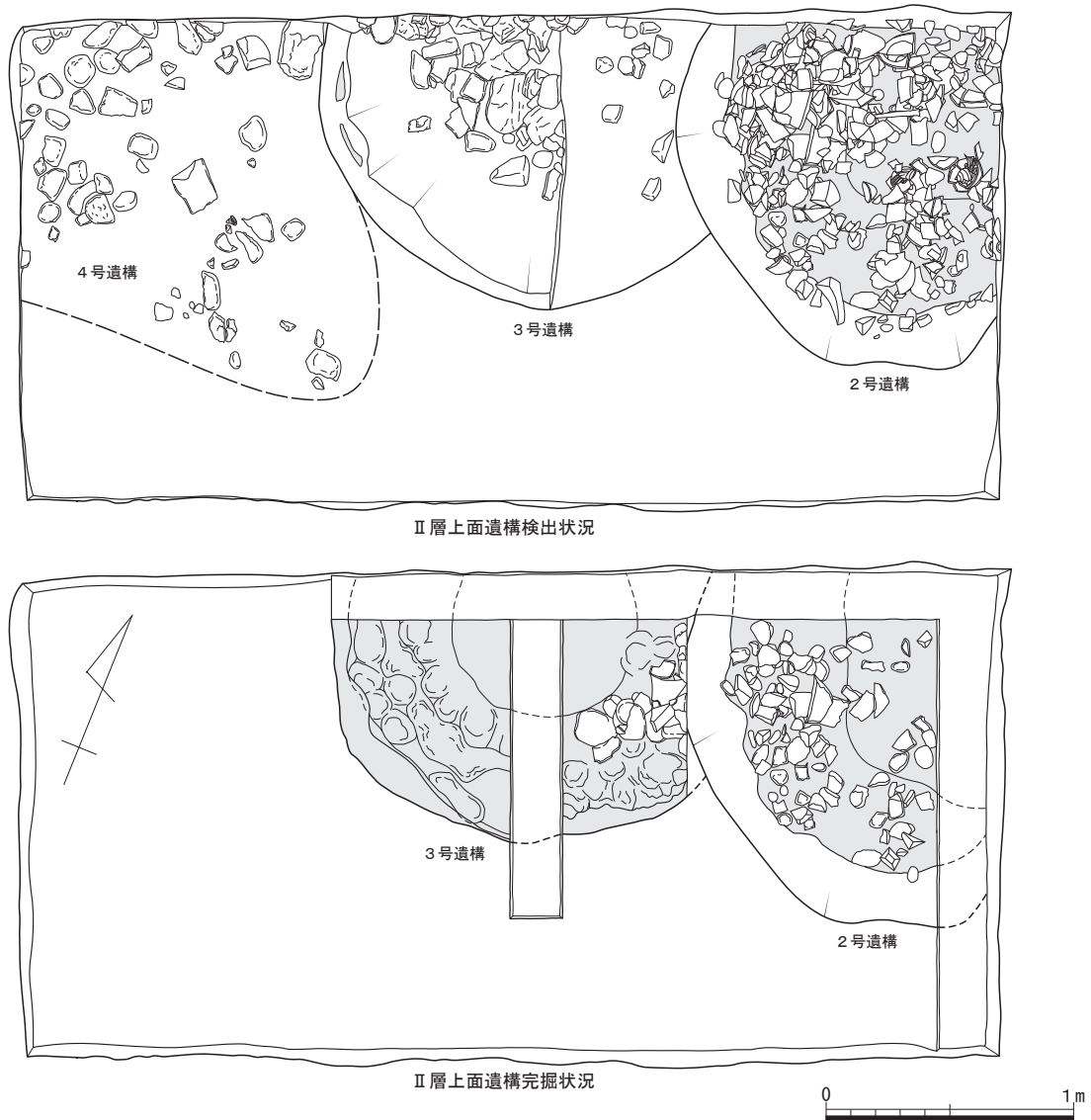


図8 II区4トレンチⅡ層上面遺構配置図

土は細粒砂、シルトのブロックを含み、灰褐色を呈する。その上面に径100～150mm程度の垂円礫、円礫が密に貼り付けられていた。

遺構検出時、南部の一部を除いて瓦器碗を主体とする遺物が全体的に広がる状況を確認した。掘り進むと、トレンチ北壁沿いと東壁沿いに土器の密集域があり、各方向から遺構内に遺物が堆積した状況が想定された。瓦器碗や皿は最低でも20個体以上出土しており、完形品が多く、その完存率はきわめて高い。移動式カマドの大型片は遺構の西縁に集中して出土した。また出土した貝の完存率も高く、大型のハマグリ、サザエ、アカニシ、レイシガイなどの大型個体が瓦器碗の内部、あるいはそばで検出された。出土遺物の取り上げが完了するころには、土坑の北縁から西縁にかけて径300～500mm程度の垂円礫、円礫が姿を現した。この大型礫は、土坑の底と壁に貼り付けられた礫とは大きさ、形が全く異なり、土坑内壁の構築材ではない。したがって、大型礫が北側から土坑内に入り込んだ後、それほど間をおかずに北側、そして東側から土器類が流入したと考えられる。

覆土は3層に分かれる。1層は、砂質土層であり、径50～100mm程度の垂角礫、少量の貝を含む。2層は砂質土層であり、1層と同様に垂角礫、少量の貝を含むが、焼土がやや混入している。3層は粘土、シルト、細粒砂が混ざった粘質土層であり、径50～150mm程度の垂角礫と径100～150mm程度の垂円礫、円礫を含む。

土師質土器、須恵器、黒色土器、瓦器、移動式カマド、貝、骨が出土した。遺構の年代は、掘り込み面ならびに出土遺物から12世紀中葉ごろと考えられる。

### 3号遺構

トレンチ中央部に位置し、Ⅱ－1層上面で検出された槽状遺構である。遺構東側の一部は2号遺構により破壊されている。平面形は円形を呈し、その規模は直径約1.6m、深さ45cmである。遺構はⅡ－4層におよぶ掘り方に、粘土とシルトが混在した粘質土を薄く先塗りし、その上に厚さ5～10cm程度の粘土を貼り付けて構築されている。粘土は質が均一であり、オリブ灰色を呈する。原位置を保っていない礫を除去すると、2号遺構と接する部分で、粘土の表面に礫が敷かれた状況を確認できた。礫は径100～150mm程度の垂円礫、円礫である。粘土の表面にのこされた略円形の痕跡から、土坑の内面全体に礫が貼り付けられていたことが分かる。

覆土は2層に分層される。1層は砂質土層であり、径50～150mm程度の垂角礫を含む。2層は貼り付けた粘土に由来する小さい粘土ブロック、シルト、細粒砂が混ざる粘質土層であり、径50～150mm程度の垂角礫、径100～150mm程度の垂円礫、円礫を含む。

遺物には覆土から出土した土師質土器、須恵器、黒色土器、瓦器、吉備型土師器、移動式カマド、貝、骨がある。ただし2号遺構に比べて、その量ははるかに少なかった。

### 4号遺構

トレンチ北西側において、Ⅱ－2層上面で検出され、遺構の東側は3号遺構に破壊されている。遺構は硬化面上に配された集石遺構である。硬化面はトレンチ西北隅を中心とした半径約1.1mの扇形に検出されており、トレンチ外部に広がっている。硬化面上の礫は径50～200mm程度の垂角礫、垂円礫であり、集中する北西部では面を揃えている。土師質土器が出土した。

## 2. 各トレンチの成果

### 5号遺構

トレンチ西端において、Ⅱ－2層中で検出され、Ⅳ－1層までおよぶ土坑であり、6号遺構の一部を破壊している。平面形は円形を呈し、検出面では直径53cm、底径15cm、深さ53cmを測る。その形状から柱穴と考えられるが、柱の痕跡は認められず、2層の覆土が確認された。1層は中粒砂を主体とする砂質土層であり、粗粒砂を多く含み、黒褐色を呈する。2層は1層より極粗粒砂を多く含む。貝が出土した。

### 6号遺構

トレンチ西端において、Ⅱ－4層上面で検出されたⅢ－2層におよぶ浅い土坑である。平面形は確認できず、規模は検出面での南北幅1m、深さ20cmである。覆土は2層あり、1層は中粒砂を主体とする砂質土層であり、細粒砂、中粒砂の団粒を含み、黒褐色を呈する。2層は細粒砂～中粒砂を主体とする砂質土層であり、極粗粒砂や炭化物が多く混入している。土色は黒色を呈する。遺物は出土していない。

### 7号遺構

トレンチ東壁から西へ約1.3mの南北中央部において、Ⅱ－4層上面で検出され、Ⅳ－1層におよぶ土坑である。平面形は円形を呈し、検出面での直径24cm、深さ30cmを測る。覆土は中粒砂を主体とする砂質土層である。白色角礫をやや含み、黒褐色を呈する。遺物は出土していない。

### 自然流路

トレンチの中央部で検出され、南北長1.5m、東西幅80cm、深さ18cmの流路である。Ⅳ－2層上面で認識したが、精査の結果、Ⅳ－1層から貫入していると判断した。底面は南から北に下って傾斜しており、トレンチ北壁まではおよんでおらず、また上流は南の17トレンチ側にのびるものと推測される。覆土は1層であり、極粗粒砂、礫を多く含み、また木炭粒も濃い密度で混入している。出土遺物には縄文土器があり、中期の里木Ⅱ式土器片（20～22）や中期末にかけての沈線文土器片（26、27）をはじめ、縄文、条痕文をもつ土器片が出土している。（馬 赤嬰）

### 出土遺物

#### 縄文時代

**縄文土器**（図9） 縄文土器は第10次・第11次調査において、小片、文様や調整のない破片を含めて約150点出土している。Ⅲ層以上ではみられず、Ⅳ－2層（1～5）、Ⅳ－2層上面（8～12）、Ⅳ－1層（13～19）、自然流路（6・7、20～27）で検出された。

1は口縁部の破片であり、端部は丸くおさまる。口縁端部の2～3mm下から縦位の撚糸文が施され、端部から1.4cm離れて刺突文がみられる。撚糸文は単節Lで、幅1mmと細く、間隔も1mmと狭い。刺突文の間隔は2mmである。胎土は2～3mmの石英粒を含み、角閃石の粉末を多く、金雲母の粉末をまばらに含む。厚みは6.5mmと口縁部にしては厚く、焼成も甘く、他の条痕文土器片とは様相を異にしている。2は単節L、幅2mmの撚糸文が1～2mmの間隔で、部分的に重複しながら施文されている。角閃石の粉末を多く含み、1mmの長石粒、石英粒をわずかに含む。焼成は良好である。厚みは7mmである。3の器面は粗いナデ調整で凹凸が著しく、その下に2mm幅の縄文がわずかに観察

される。角閃石の粉末を多く含み、2～4mmの長石粒、石英粒がまばらにみられる。厚みは5mmを測る。4は条痕文が重なり合い、その上からナデ消されている。条痕は幅が一定しておらず、絡状体で施文された可能性が高い。2mmを最大とする石英粒を含み、粉末状の角閃石を多く含む。厚さは5.5mmである。5は単節L、幅1mmの撚糸文が1.5mmの間隔で縦方向に施されている。部分的に重複し、また一部ナデ消され、指頭圧痕ものこしている。1mm以下の石英粒を含み、角閃石の粉末を多く含む。6.5mmの厚みをもつ。

6は無文の口縁部片であり、器面には斜めの粗いナデ調整が認められる。3mmの長石粒、1mmの石英粒を含み、角閃石の粉末も多い。厚みは6mmを測る。7も器面は斜めのナデ調整をのこし、口縁端部には3つの刻み目が観察される。左2つの刻み目は「ハ」字形となっており、方向を変えながらの施文が想定される。1～2mmの長石粒を含み、角閃石の粉末も多い。厚さは6mmである。

8は薄手で、無文の口縁部片であり、粗い縦のナデ調整が認められる。口縁端部は窪んでおり、内外に拡張して稜線がすどくなっている。3mmの長石粒、角閃石の粉末を含む。3mmの厚みを測る。9も口縁部の破片であり、凹凸の著しい器面にすると沈線文が施され、口縁端部には刻みが施されており、内面は横位の条痕がみられる。3mmの石英粒が含まれ、角閃石の粉末が多く、金雲母もわずかに含まれる。厚みは7mmである。10はキャリパー形を呈する部分の一部とみられ、器面に横位の条痕、内面は横位の条痕後、ナデ調整が施されている。胎土には1mmの長石粒、石英粒を含み、角閃石の粉末が多い。厚みは4.5mmである。11は単節RLの縄文がみられ、胎土には3mmの長石粒、石英粒を含み、金雲母粒がまばらにみられる。厚みは5mmを測る。12も単節Rの縄文が施され、胎土は精良で、長石、石英、金雲母の粉末が含まれている。器壁は5mmである。

13は単節RLの縄文が施され、胎土には3mmの長石粒、1mmの金雲母粒ほか、角閃石の粉末が多く含まれている。7mmの厚みを測る。14は細い幅のナデ調整が縦位にみられ、胎土には1mmの長石粒、金雲母粒がまばらに含まれている。厚さは4mmを測る。15は器壁が4mmと薄い口縁部であり、内外面ともナデ調整をのこす。1mmの長石粒、石英粒、角閃石粒がみられ、金雲母の粉末を含む。16は単節RLの縄文が施され、胎土には1mmの石英粒をまばらに含み、金雲母の粉末を含んでいる。厚みは5mmで、焼成がきわめて良好で、硬質である。17は条痕文をもち、胎土には1mmの長石粒、石英粒、そして黒雲母の粉末をわずかに含んでいる。厚さは5mmである。18は器面が指頭圧痕で波打ち、内面には横位の条痕が施されている。3～5mmの石英粒を含み、長石、角閃石の粉末も認められる。4.5mmの厚さである。19は二枚貝による条痕が施され、内面はナデ調整で平滑に整えられている。1mmの長石粒、最大5mmの石英粒を多く含んでいる。厚みは7mmを測る。

20は外反する口縁部の破片であり、厚みを増しながら口縁端部の文様帯にいたる。上段は外面に対してやや斜め方向からの連続した刺突文があり、下段は押し引きが施されている。胎土には1mmの石英粒をまばらに含み、長石、角閃石の粉末を多く含む。7mmの厚みを測る。21は幅約1cmの低平な二条の隆帯に、半裁竹管状の施文具で押し引きが施されている。1mmの長石粒がまばらにみられる。22は単節RLの縄文地に、三角形の文様が二段施されている。上段は外面からの刺突文が連続し、下段は押し引き文である。胎土には長石が多く、2mmを最大として粉末まで含み、金雲母の

## 2. 各トレンチの成果

粉末もみられる。厚みは4.5mmで、焼成が良好で硬質である。20～22は里木Ⅱ式に属する。23の器面には巻貝による縦位の条痕がみられ、胎土には1mmの長石粒を含み、2mmの石英粒もまばらにみられる。5mmの厚さを測る。24はその器面に粗くナデ調整が施され、その下地に太い4mm幅のRL

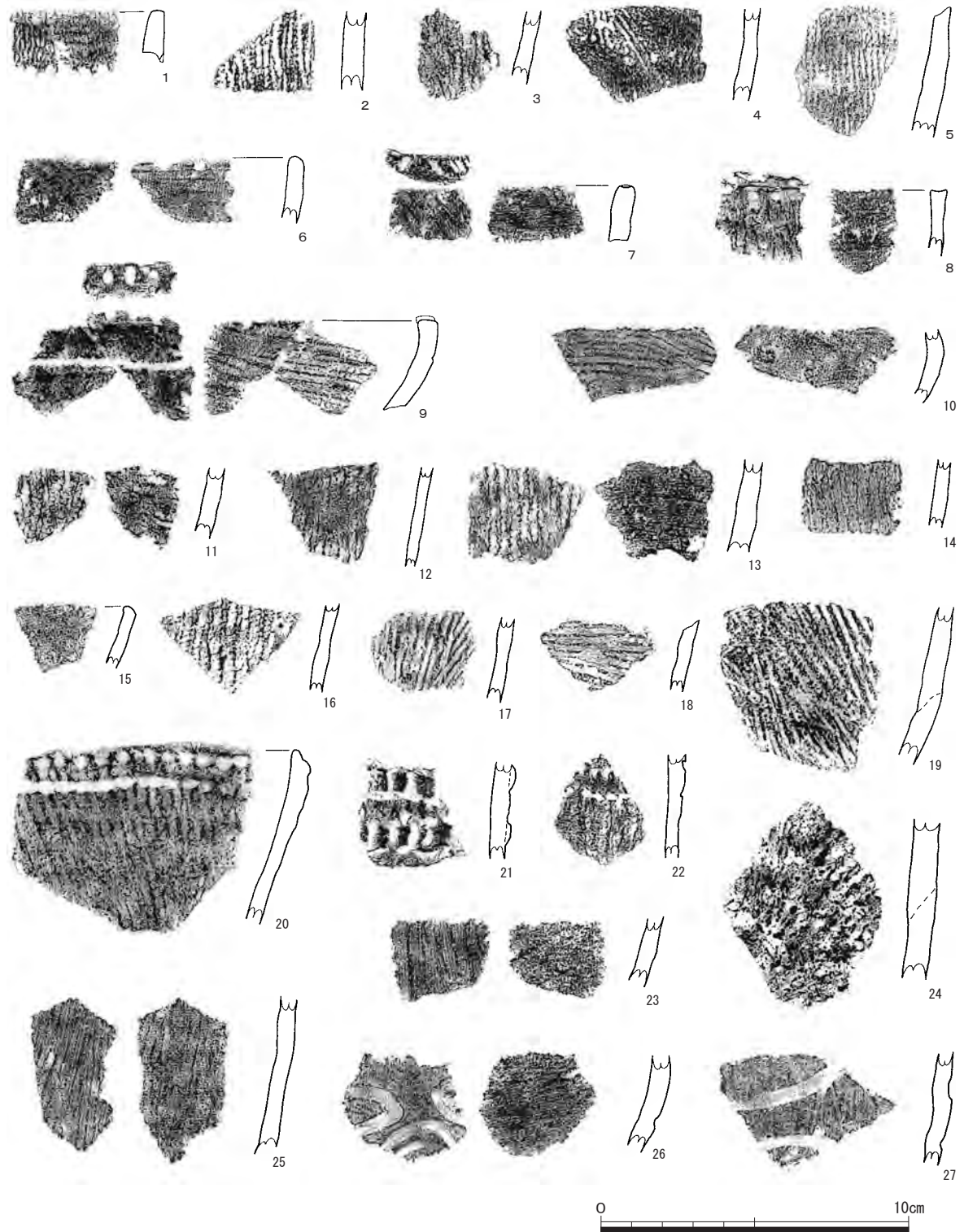


図9 II区4トレンチ出土縄文土器

縄文が部分的にみられる。3mmの長石粒、2mmの石英粒を含み、角閃石の粉末を多く含む。厚さは8mmである。25は器面に二枚貝条痕がのこり、内面は二枚貝条痕後ナデ調整が施されている。3mmの長石粒、2mmの石英粒を含み、角閃石の粉末も多くみられる。26、27は沈線文土器の破片であり、27は器面からの施文によって内面がわずかに突出している。いずれも2mmの石英粒を含み、26は長石、金雲母の粉末、27は長石、角閃石の粉末がみられる。厚さはいずれも4.5mmを測る。

**石器** (図10) 28はⅣ－2層上面で検出された打製石鏃であり、二等辺三角形の凹基式である。表面側は全周加工されているのに対し、裏面側は中央に素材剥離面を広くのこし、外周に沿った加工に留まっている。裏面側は鋒をのこし、横方向からの衝撃で広く剥落している。表面は全体的に摩耗しており、剥離痕の稜線もやや朦朧としている。全長2.4cm、幅1.3cm、厚さ2.3mmで、重量は0.69gを測る。

第10次・第11次調査では、Ⅳ－1層、2層で剥片、チップも検出されている。これらについては出土状況をドットマップで示しながら、本報告で説明することとする。  
(村上恭通)

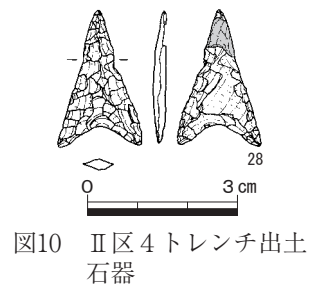


図10 Ⅱ区4トレンチ出土石器

#### 弥生時代・古墳時代

**弥生土器** (図11) 29は鉢の口縁部であり、その端部は平坦に仕上げられている。外面には左下方から右上方への斜め方向のタタキが施されており、内面は全体的に剥落している。胎土は約1mmの長石粒を含んでいる。色調は内外面ともに明赤褐色である。

**古式土師器** 35は鉢、30～34は甕、36は高坏である。焼成はすべて良好である。

30～32、34は口縁部である。30は復元口径12.6cmを測り、口縁端部は丸くおさまり口縁部から強く屈曲して、なだらかに肩部にいたる。内外面ともにナデ調整が施され、肩部の内面には指頭圧痕がみられる。胎土は約1mmの長石粒と金雲母の粉末を含んでおり、色調は内外面ともに橙色を呈している。31は復元口径15.0cmである。口縁部から肩部にかけてはゆるやかに屈曲し、口縁部は直線的に開く。内外面ともにナデ調整が施されており、肩部内面にはケズリがみられる。胎土は1～2mmの長石粒と石英粒を含んでいる。色調は内外面ともににぶい橙色を呈する。32の口縁部は内外面ともにナデ調整が施され、端部は尖り気味におさまる。内面上部は突帯が貼り付けられている。

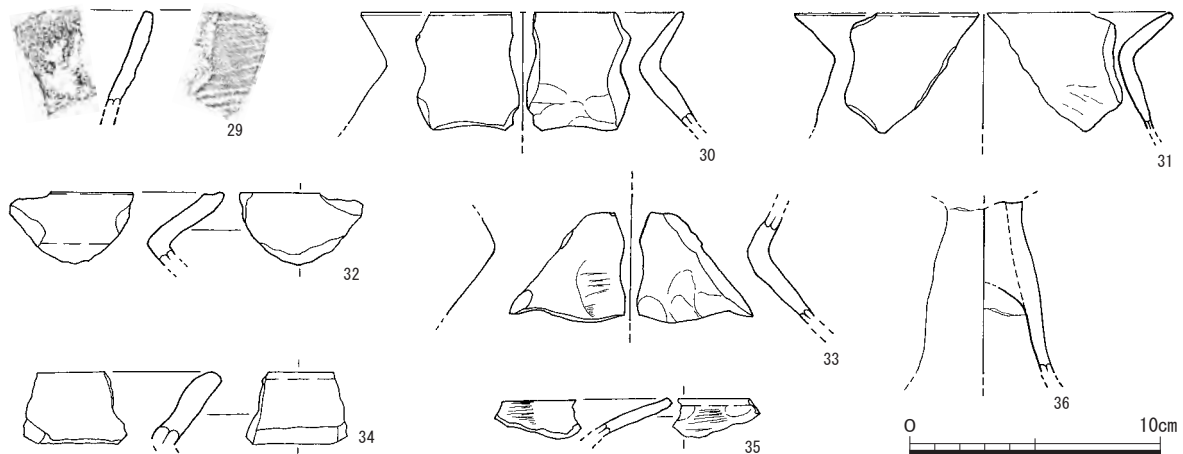


図11 Ⅱ区4トレンチ出土弥生土器・古式土師器

## 2. 各トレンチの成果

胎土は1～2mmの長石粒と金雲母の粉末をまばらに含む。色調は内外面ともににぶい橙色である。33は屈曲部から肩部にかけての破片であり、屈曲部の復元径は10.8cmを測る。屈曲部外面下半にはタタキと横方向のナデ調整が施されている。内面下半には指頭圧痕が観察される。胎土は1～3mmの長石粒を含んでいる。色調は内外面ともに明黄褐色である。34の口縁部は厚さを増しながら端部にいたり、丸くおさまる。内外面ともにナデ調整が施されている。胎土は約1mmの長石粒を多量に含む。色調は内外面ともに橙色である。

35は口縁部である。端部はやや尖り気味である。内外面にはミガキが施され、外面には指頭圧痕がみられる。胎土は約0.5mmの長石粒を微量に含む。色調は内外面ともに橙色を呈する。

36は脚柱部であり、現存高6.9cm、最小径は3.0cm、最大径は5.6cmを測る。坏との接合部からゆるやかにふくらみ、端部はふたたびわずかにすぼまっている。脚柱上部は厚さ2.9cmの粘土が充填され、その中央は窪んでいる。外面にはナデ調整が施され、胎土は1～3mmの長石粒、石英粒を多量に含む、金雲母の粉末をわずかに含む。色調は内外面ともににぶい橙色を呈している。

29は口縁部の形状と成形技法から弥生時代終末期の土器と考えられ、32は口縁端部の肥厚を内面突帯によって表現されるようになったと評価すれば布留4式を遡ることはない。34の時期も器壁の厚さと口縁部の内湾する形状から32と同様である。それ以外は布留1式～2式の範疇で捉えられる。

29、32はⅡ層上面、34はⅡ－4層、31、33、35、36はⅢ層から、30はトレンチ壁面の清掃時に出土した。(永田 樫)

## 古代～中世

### 2号遺構

**土師質土器** (図12) 37～40は皿、41～46は杯である。すべて内外面ともに回転ナデ調整が施され、底部の切り離しは回転ヘラ切りである。焼成はいずれも良好である。

37は2分の1程度残存している。口径8.1cm、底径6.3cm、器高1.4cmを測る。口縁部は外方へ直線的に開き、端部は丸くおさまる。胎土は約2mmの長石粒を少量含む。色調は内外面ともににぶい黄橙色である。38は完形であり、口径8.5cm、底径6.3cm、器高1.2cmを測る。口縁部は丸みをおびながら開き、端部は丸くおさまる。胎土は1mm以下の長石粒を含む。色調は内外面ともに橙色である。39は復元口径8.4cm、底径6.0cm、器高1.2cmである。口縁部は直線的に外方へ開き、端部は肥厚し丸くおさまる。胎土は2mm以下の長石粒を少量含む。色調は内外面ともに浅黄橙色である。40は底径5.6cmを測る。底部の切り離しは粗雑であり、底部から体部にかけて切り離しの痕跡がみられ、段や窪みが生じている。胎土は約1mmの長石粒を少量含む。色調は内外面ともににぶい黄橙色である。

41は完形である。口径14.3cm、底径8.5cm、器高3.4cmである。口縁部は若干内湾しながら開き、端部は丸くおさまる。1mm以下の長石粒を少量、雲母をわずかに含む。色調は内面がにぶい黄褐色、外面は暗灰黄色とにぶい黄褐色を呈する。内外面ともに一部に二次的な被熱がみられる。42は復元口径13.5cm、底径8.4cm、器高3.4cmである。口縁部は内湾気味に外方へ開き、端部はやや肥厚して丸くおさまる。胎土は約1mmの長石粒と角閃石粒を含む。色調は内外面ともににぶい黄橙色を呈する。43は復元口径14.2cmを測る。口縁部は内湾気味に開き、端部は丸くおさまる。胎土は約1mmの

長石粒を中量含む。色調は内面がにぶい褐色、外面はにぶい橙色を呈する。44は復元口径13.4cmを測る。口縁部は丸みをおびながら開き、上部はやや外反する。胎土は約1mmの長石粒を中量含む。色調は内外面ともに明褐色を呈する。45は復元口径14.8cmである。口縁部は内湾気味に開いたのち、端部はやや外反する。口縁端部は丸くおさまる。胎土は1mm以下の長石粒を少量含み、色調は内外面ともに橙色を呈する。46は底径8.6cmを測る。底部と体部の間には強いナデ調整が施されており、窪みがみられる。胎土は1mm以下の長石粒をわずかに含む。色調は内外面ともに橙色を呈する。45、46は同一個体の可能性が高いが、接合はできなかった。

37～46はすべて12世紀に比定される。

**須恵器** 47は須恵器の碗の底部で、復元底径4.8cmを測る。内外面ともに回転ナデ調整が施される。底部には切り離した後のナデ調整により、粘土の残余がみられる。胎土は1mm以下の角閃石粒を含む。色調は内面が灰白色、外面は灰黄色を呈する。焼成は堅緻である。東播系須恵器の可能性が考えられ、12世紀に比定される。

**瓦器** (図13) 48～63は碗、64～67は皿であり、48～61の底部は貼り付け輪高台である。いずれも和泉型であり、焼成は良好である。

48は2分の1程度残存している。口径16.0cm、底径5.5cm、器高5.6cm、高台の高さは0.5cmを測る。口縁部は丸みをおびながら開き、上半はナデ調整の影響を受けてやや外反する。口縁端部は丸くおさまる。内外面ともに横方向のミガキが施され、体部外面には指頭圧痕がみられる。外面のミガキはやや粗雑であり、間隔をあけて施される。見込みには斜格子状暗文がみられる。高台は平面形が楕円気味で、断面形は台形を呈して若干外方へ開く。高台の貼り付け後のナデ調整はやや粗雑である。胎土は約1mmの長石粒を少量含み、色調は内外面ともに暗青灰色を呈する。49は2分の1程度残存している。口径17.0cm、底径4.8cm、器高5.5cm、高台の高さは0.3cmを測る。口縁部は内湾気味に外方へ開き、上半はナデ調整によりやや外反する。口縁端部は丸くおさまる。内外面ともに横方向と斜め方向のミガキが施され、体部外面には指頭圧痕がみられる。外面のミガキは全体的に粗く、まばらに施される。高台は断面形態が台形を呈し、高さが低い、比較的丁寧に貼り付けられている。胎土は1mm以下の長石粒を微量に含み、色調は内面がオリーブ黒色、外面が灰色を呈する。

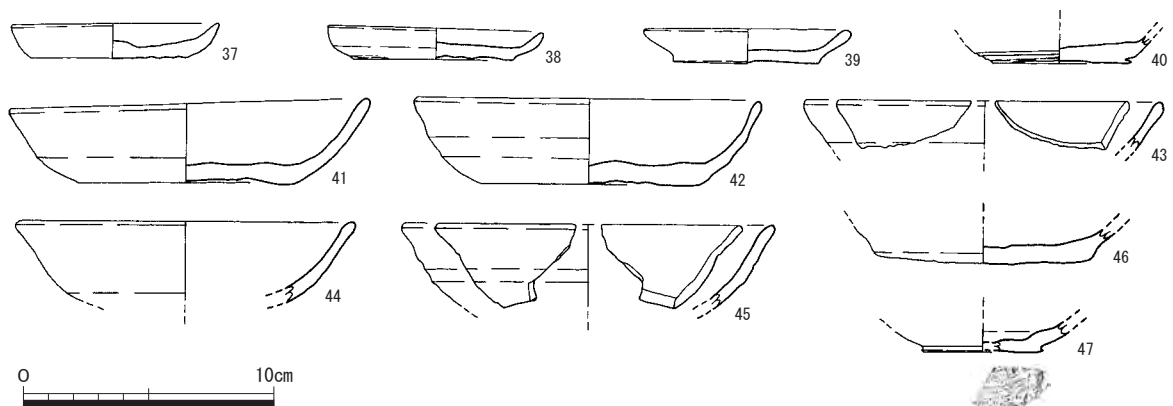


図12 II区4トレンチ2号遺構出土遺物1

## 2. 各トレンチの成果

50は口径16.4cm、底径4.5cm、器高5.2cm、高台の高さは0.6cmを測る。口縁部は丸みをおびながら開き、上半はナデ調整によりやや外反する。口縁端部は丸くおさまる。内外面ともに横方向と斜め方向のミガキが施され、体部外面には指頭圧痕がみられる。外面のミガキは全体的に施されるがやや粗く、間隔があいている。見込みには不定方向の暗文が観察される。高台は断面形態が台形を呈して若干外方に開き、丁寧に貼り付けられる。胎土は約1mmの長石粒を少量含み、色調は内面が暗青灰色、外面が青黒色と橙色を呈する。51は2分の1程度残存している。口径16.4cm、底径5.0cm、器高5.3cm、高台の高さは0.5cmである。口縁部は丸みをおびながら開き、端部は丸くおさまる。口縁上部外面には強いナデ調整が施される。ミガキは内外面ともに横方向に施され、体部外面には指頭圧痕がみられる。外面のミガキはやや粗く、間隔をあけて施される。見込みには平行線状暗文が観察される。高台は断面形が三角形を呈し、「ハ」字状に開く。高台の貼り付け方はやや粗雑である。胎土は1mm以下の長石粒を含み、色調は内外面ともに暗灰色を呈する。52はほぼ完形である。口径16.1cm、底径5.0cm、器高5.3cm、高台の高さは0.4cmを測る。口縁部は内湾しながら開き、端部は丸くおさまる。口縁上部外面には、二段に施された、やや強いナデ調整が観察できる。内面は横方向と斜め方向のミガキが施される。外面はミガキが口縁上部に限られ、体部には指頭圧痕がみられる。高台は断面形態が三角形を呈し、高さは低いが、丁寧に貼り付けられる。胎土は約1mmの石英粒をわずかに含む。色調は内外面ともに褐灰色を呈する。53は復元口径16.0cm、復元底径6.4cm、器高4.8cm、高台の高さは0.7cmを測る。口縁部はやや内湾しながら開き、上部で少し外反する。ミガキは内外面ともに施され、見込みには斜格子状暗文がみられる。体部外面には指頭圧痕がみられる。高台は断面形が三角形を呈してやや高く、「ハ」字状に開く。高台の貼り付け後のナデ調整は丁寧である。胎土は1mm以下の角閃石粒を少量含む。色調は内面の口縁端部沿いが褐灰色、それ以下はにぶい黄橙色を呈し、外面は口縁上部が褐灰色、それ以下はにぶい黄褐色である。54は2分の1程度残存している。復元口径16.0cm、底径5.0cm、器高は4.9cm、高台の高さは0.6cmである。口縁部は内湾気味に外方へ開き、端部は丸くおさまる。口縁上部外面にはナデ調整が施される。内外面ともに上半には横方向のミガキが施され、下半には横方向と斜め方向のミガキが確認できる。体部外面には指頭圧痕がみられる。外面のミガキは全体的に施されるが、やや粗雑で間隔があいている。見込みには斜格子状か不定方向状の暗文がみられる。高台は断面形態が台形を呈し、接地面には幅広い面がみられる。貼り付け後のナデ調整はやや粗雑であり、胎土は約1mmの長石粒を含む。色調は内面が暗青灰色、外面は青灰色を呈する。55は完形である。口径15.7cm、底径5.1cm、器高5.0cm、高台の高さは0.5cmを測る。口縁部はゆるやかに内湾しながら開き、端部は丸くおさまる。ミガキは内外面ともに横方向に施され、体部外面には指頭圧痕がみられる。外面には上位を中心に横方向の粗いミガキが間隔をあけて施され、中位にも散見される。高台の断面形は台形を呈し、丁寧に貼り付けられる。胎土は約1mmの石英粒を微量に含む。色調は内面が黄灰色、外面は黒褐色を呈する。56はほぼ完形である。口径15.4cm、底径5.0cm、器高5.5cm、高台の高さは0.5cmを測る。口縁部は若干内湾しながら外方へ開き、端部は丸くおさまる。口縁上部外面には強いナデ調整が観察される。内外面ともに横方向のミガキが施され、体部外面には指頭圧痕がみられる。外面のミガキは全体的にまばら

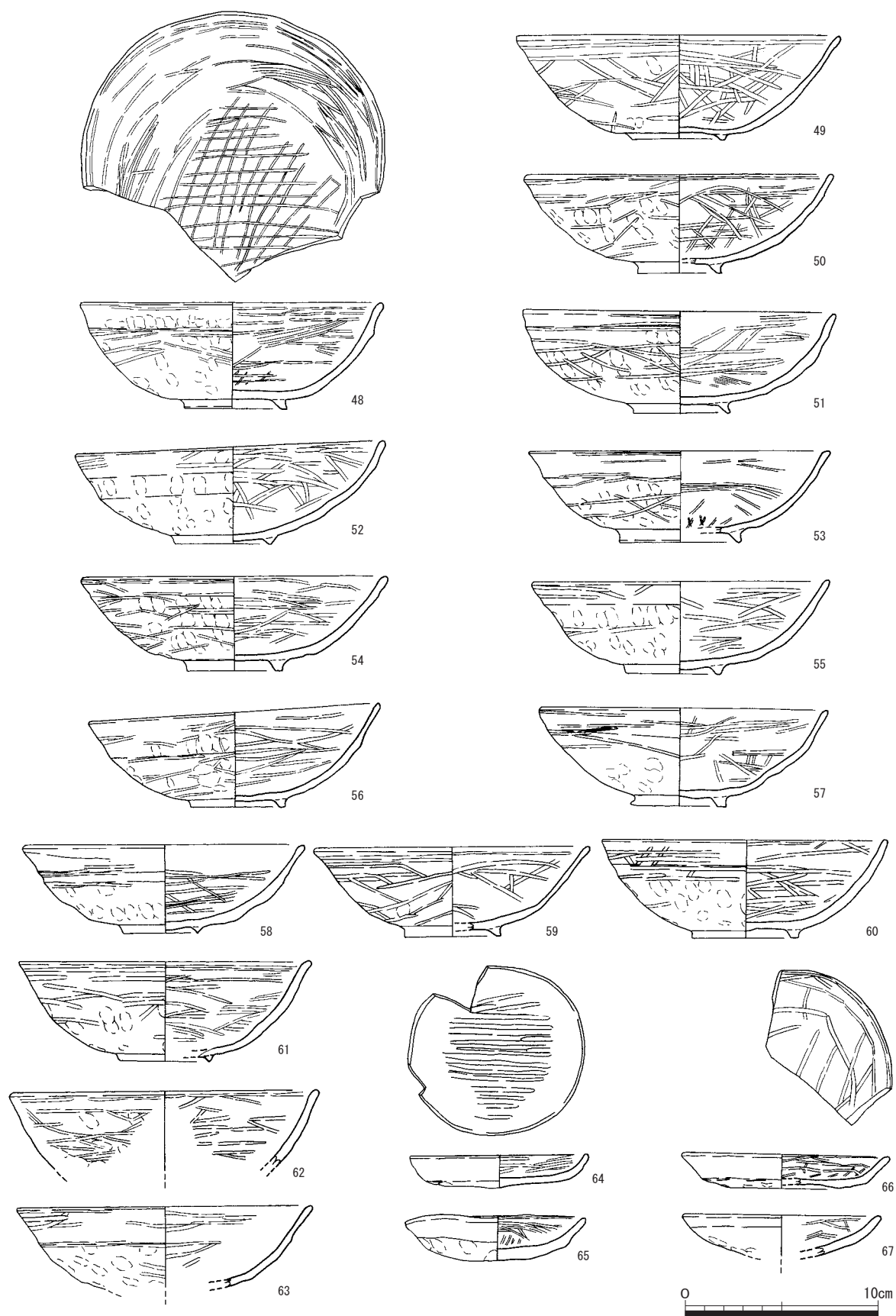


図13 II区4トレンチ2号遺構出土遺物2

## 2. 各トレンチの成果

に施される。見込みには不定方向の暗文がみられる。高台は断面形態が台形を呈し、貼り付け後のナデ調整は丁寧に施される。胎土は1mm以下の角閃石粒を含む。色調は内外面ともに黒褐色を呈する。57は完形である。口径15.2cm、底径5.0cm、器高5.1cm、高台の高さは0.5cmを測る。口縁部は内湾しながら外方へ開き、端部は丸くおさまる。内面には横方向と斜め方向のミガキが施され、外面上半には横方向のミガキが施される。体部外面下半には指頭圧痕がみられる。外面のミガキはやや粗く、間隔をあけて施される。高台の断面形態は台形を呈し、若干外方へ開く。貼り付け方はやや粗雑で、底部外面と高台の間には一部隙間がみられる。胎土は1mm以下の長石粒を含む。色調は内面がにぶい黄色、外面は灰黄色を呈する。58は2分の1程度残存している。復元口径14.9cm、底径4.0cm、器高4.9cm、高台の高さは0.3cmである。口縁部は丸みをおびながら開き、端部は丸くおさまる。口縁上部外面には、やや強いナデ調整が二段に施されている。内面と外面上半には横方向のミガキが施され、外面下半には指頭圧痕がみられる。外面のミガキはやや粗く、間隔をあけて施される。高台の断面形は三角形を呈する。貼り付け後のナデ調整は丁寧である。胎土は1mm以下の長石粒を含む。色調は内面の口縁端部沿いが褐灰色、それ以下はにぶい黄橙色を呈し、外面は口縁上部が褐灰色、それ以下は灰白色である。59は復元口径14.6cm、復元底径5.2cm、器高5.2cm、高台の高さは0.6cmである。口縁部は内湾しながら開き、端部は丸くおさまる。口縁上部外面には強いナデ調整がみられ、内外面ともにやや粗いミガキが横方向と斜め方向に施される。体部内面下半には指頭圧痕とみられる凹凸が観察される。体部外面下半には指頭圧痕がみられる。高台の断面形は三角形を呈して外方へ開き、やや粗雑に貼り付けられる。胎土は1mm以下の長石粒を含み、色調は内面が灰黄色、外面は黄灰色を呈する。60は2分の1程度残存している。口径14.9cm、底径5.6cm、器高5.1cm、高台の高さは0.4cmを測る。口縁部は丸みをおびながら開き、端部は丸くおさまる。口縁上部にはナデ調整がみられ、内外面ともに横方向のミガキが施される。外面のミガキは上位を中心に観察でき、中位にも散見される。体部外面下半には指頭圧痕がみられる。高台は断面形態が台形を呈したしっかりとした高台であり、接地面には幅の広い平坦面がみられる。貼り付け後のナデ調整はやや粗雑である。見込みにはジグザグ状暗文が観察できる。胎土は約1mmの石英粒を含み、色調は内面が暗灰色、外面は黒褐色を呈する。61はほぼ完形である。口径15.2cm、復元底径4.6cm、器高5.3cm、高台の高さは0.4cmを測る。口縁部は丸みをおびながら開き、上部外面には強いナデ調整が施され、やや外反する。口縁端部は丸くおさまる。内外面ともに横方向のミガキが施され、体部外面下半には指頭圧痕がみられる。高台は断面形態が三角形状を呈する。高台の貼り付け方は丁寧である。胎土は約1mmの石英粒を含み、色調は内面が灰白色と黄灰色、外面は暗灰色を呈する。62は復元口径16.4cmである。口縁部は内湾しながら開き、端部は丸くおさまる。口縁上部外面にはナデ調整が施され、やや外反する。内外面ともに横方向のミガキが施され、体部外面には指頭圧痕がみられる。胎土は約1mmの長石粒を含む。色調は内外面ともに灰色を呈する。63は復元口径15.4cmである。口縁部は内湾しながら開き、端部は丸くおさまる。口縁上部外面には強いナデ調整が施され、やや外反する。内外面ともに横方向のミガキが全体的に施され、外面下半には指頭圧痕がみられる。外面のミガキは上部が中心であり、それ以下はまばらである。胎土は1mm以下の長石粒を含む。色調は

内面が灰色、外面がオリーブ黒色を呈する。

64はほぼ完形である。口径9.5cm、器高1.8cmを測る。口縁部は丸みをおびながら開き、端部は丸くおさまる。内面には横方向のミガキがみられる。外面上半にはナデ調整が施され、下半には指頭圧痕がみられる。見込みには平行線状暗文が観察される。胎土は約1mmの石英粒をわずかに含む。色調は内面がにぶい黄橙色と褐灰色、外面が褐色と黒褐色を呈する。65はほぼ完形であり、焼成により器形が大きく歪んでいる。口径9.3cm、器高2.4cmを測る。口縁部は丸みをおびながら開き、上部には強いナデ調整が施される。口縁端部は丸くおさまる。内面には横方向のミガキが施され、外面下半には指頭圧痕が観察される。見込みには平行線状暗文が施される。胎土は1mm以下の石英粒をわずかに含み、色調は内外面ともに青黒色を呈する。66は復元口径10.8cm、器高1.8cmを測る。口縁部はゆるやかに屈曲して外方へ開き、口縁部には強いナデ調整が施される。端部は丸くおさまる。内面には横方向のミガキがみられ、見込みには平行線状暗文が施される。外面下半には指頭圧痕が観察される。胎土は1mm以下の長石粒を含む。色調は内面が褐灰色、外面は灰色とにぶい黄橙色を呈する。67は復元口径10.4cmを測る。口縁部は内湾しながら開き、端部は丸くおさまる。内面には横方向のミガキがみられる。外面上半にはナデ調整が施され、下半には指頭圧痕が観察される。胎土は0.5mm以下の長石粒と角閃石粒を少量含む。色調は内面が明オリーブ色、外面は暗青灰色を呈する。

48～51、53、54、56、59、61、62は和泉Ⅱ－2期、55、57、58、60、63は和泉Ⅱ－2～3期、52は和泉Ⅱ－3期〔橋本2018〕である。すべて12世紀中葉に比定される。 (大塩啓一郎)

**土師質土器鍋** (図14) 68、69は土師質土器の鍋である。

68は復元口径39.2cmを測る。口縁部は外方へ直線的に開き、外面は大部分が剥離している。口唇部にはナデ調整が施され、やや平坦な面がみられる。胴部はやや直立気味にすぼまり、外面には細かな横方向のハケメが顕著に施されている。内面にはやや強いナデ調整が観察され、胴部下半は縦方向、胴部上半および頸部付近には横方向に施され、特に頸部には横方向の強いナデ調整がみられる。胎土は比較的精良であり、1mm以下の長石粒と雲母を含む。色調は内面がにぶい褐色、外面は口縁部から頸部にかけてにぶい褐色、胴部は二次的被熱を受けているため黒褐色を呈している。焼成は良好である。69は復元口径32.4cmを測る。口縁部は「く」字状に外方へ開き、端部は丸くおさまる。口縁部外面にはヨコナデ調整、内面には横方向のハケメが施される。胴部は上部がやや膨らみ、頸部へといたる。胴部外面には指頭圧痕と縦方向に施されたやや粗いハケメがみられ、胴部と底部の境付近には横方向の粗いハケメが施される。内面には全体的にナデ調整がみられ、下半は横方向の粗いハケメがナデ消されている。胎土は1mm以下の長石粒と金雲母の粉末を含む。色調は内面の口縁部がにぶい褐色、胴部は暗褐色であり、外面は褐色を呈する。外面には二次的被熱が認められ、一部黒色化している。焼成は良好である。

**土製品** 70、71は土製品の移動式カマドである。

70は掛け口、焚口、庇、把手が残存している。庇上面や焚口など大部分が剥離している。掛け口は外面にナデ調整、内面には横方向のハケメが施されている。外面はやや肥厚し、端部には面がみ

## 2. 各トレンチの成果

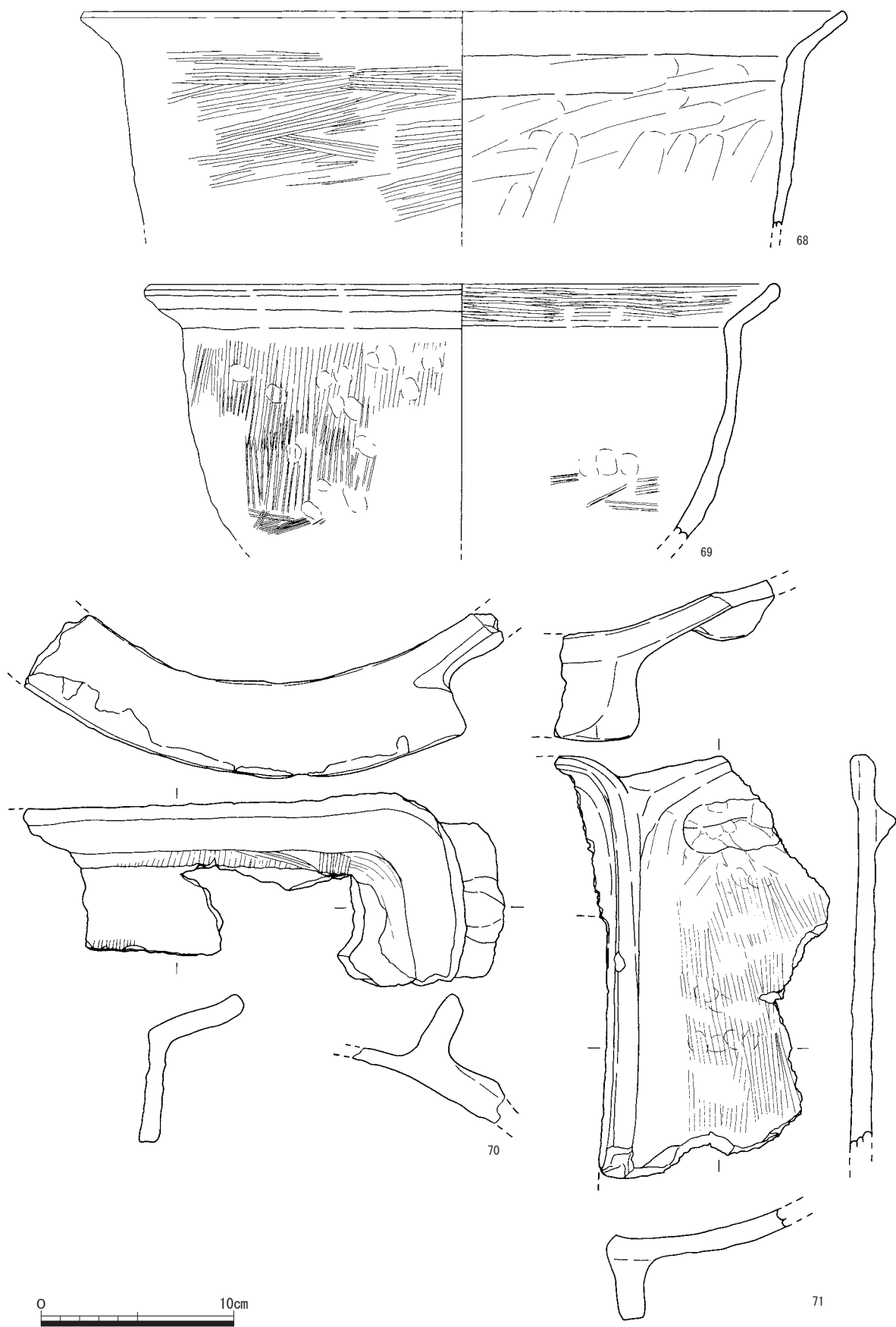


図14 II区4トレンチ2号遺構出土遺物3

られる。底は内外面ともにナデ調整が施されている。4～5cm幅の粘土帯が焚口に沿うように貼り付けられ、口唇部にはやや面がみられる。焚口の端部には強いナデ調整が施され、面がみられる。焚口と底の境の外面には縦方向と斜め方向のハケメが観察され、内面下部には横方向のハケメがみられる。把手は胴部上位に貼り付けられ、形状は楕円形を呈する。端部は一部剥離しており、ナデ調整が施され、指頭圧痕がみられる。胎土は1～2mm程度の長石粒と金雲母の粉末を多量に含み、一部5mm程度の長石粒もみられる。色調は内面がにぶい赤褐色と明赤褐色、外面は褐灰色を呈する。焼成は良好である。71は掛け口、底、把手が残存している。焚口と裾部の形状は不明である。掛け口は内外面ともにナデ調整が施され、やや内傾気味に立ち上がる。内外面ともに肥厚しており、内面には粘土帯の接合痕が確認され、端部は丸くおさまる。底は内外面ともにナデ調整が施され、3cm程度の幅の粘土帯が焚口に沿うように貼り付けられている。端部にはナデ調整によってやや平坦な面がみられ、断面形態は隅丸方形を呈する。底と焚口の境にはやや強いナデ調整が施され、面がみられる。把手は胴部上位に貼り付けられ、平面形は楕円形、断面形は三角形を呈する。ナデ調整および指頭圧痕がみられる。胴部外面には縦方向のハケメが施され、一部ハケメがナデ消されている。胴部内面にはナデ調整が施されている。胎土は1～2mm程度の長石粒と金雲母の粉末を多量に含む。色調は内面がにぶい赤褐色を呈し、底の内面は黒褐色である。外面はにぶい赤褐色を呈する。焼成は良好であり、焼き締まりが良い。(青木聡志)

#### 包含層

**土師質土器** (図15) 72～79は皿、80～88、90、91は杯、89は椀である。焼成はいずれも良好である。

72は口縁部であり、復元口径9.0cmを測る。口縁部は内湾しながら開き、端部は丸くおさまる。内外面ともにナデ調整が施され、体部外面には指頭圧痕がみられる。胎土は金雲母の粉末を少量含む。色調は内面が灰黄褐色、外面はにぶい黄褐色を呈する。73は復元口径8.4cm、復元底径7.0cm、器高1.1cmである。口縁部はやや内湾気味に開き、端部は丸くおさまる。内外面ともに回転ナデ調整を施す。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。胎土は約1mmの長石粒を少量含む。色調は内面が浅黄橙色、外面はにぶい黄橙色を呈する。74は完形であり、口径8.2cm、底径6.0cm、器高1.2cmを測る。口縁部は内湾気味に開き、端部は丸くおさまる。内外面ともに回転ナデ調整が施され、底部の切り離しは回転ヘラ切りである。胎土は約1mmの長石粒を少量含む。色調は内面が浅黄橙色、外面はにぶい黄橙色を呈する。75はほぼ完形であり、復元口径9.0cm、底径7.0cm、器高1.4cmを測る。口縁部は内湾気味に開き、端部はやや尖り気味におさまる。内外面ともに回転ナデ調整が施される。底部の切り離しは回転糸切りである。胎土は約1mmの長石粒を少量含む。色調は内外面ともににぶい黄橙色を呈する。76は口縁部であり、復元口径10.0cmを測る。口縁部はやや内湾気味に開き、端部は丸くおさまる。胎土は1mm以下の石英粒を少量含む。内外面ともに浅黄橙色を呈する。77は復元口径8.4cm、復元底径6.8cm、器高1.8cmを測る。口縁部はやや内湾気味に開き、端部は丸くおさまる。内外面ともに回転ナデ調整を施す。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。胎土は1mm以下の長石粒と石英粒を少量含む。色調は内外面ともににぶい黄橙色を呈する。78は畿内系土師器の口縁部で

## 2. 各トレンチの成果

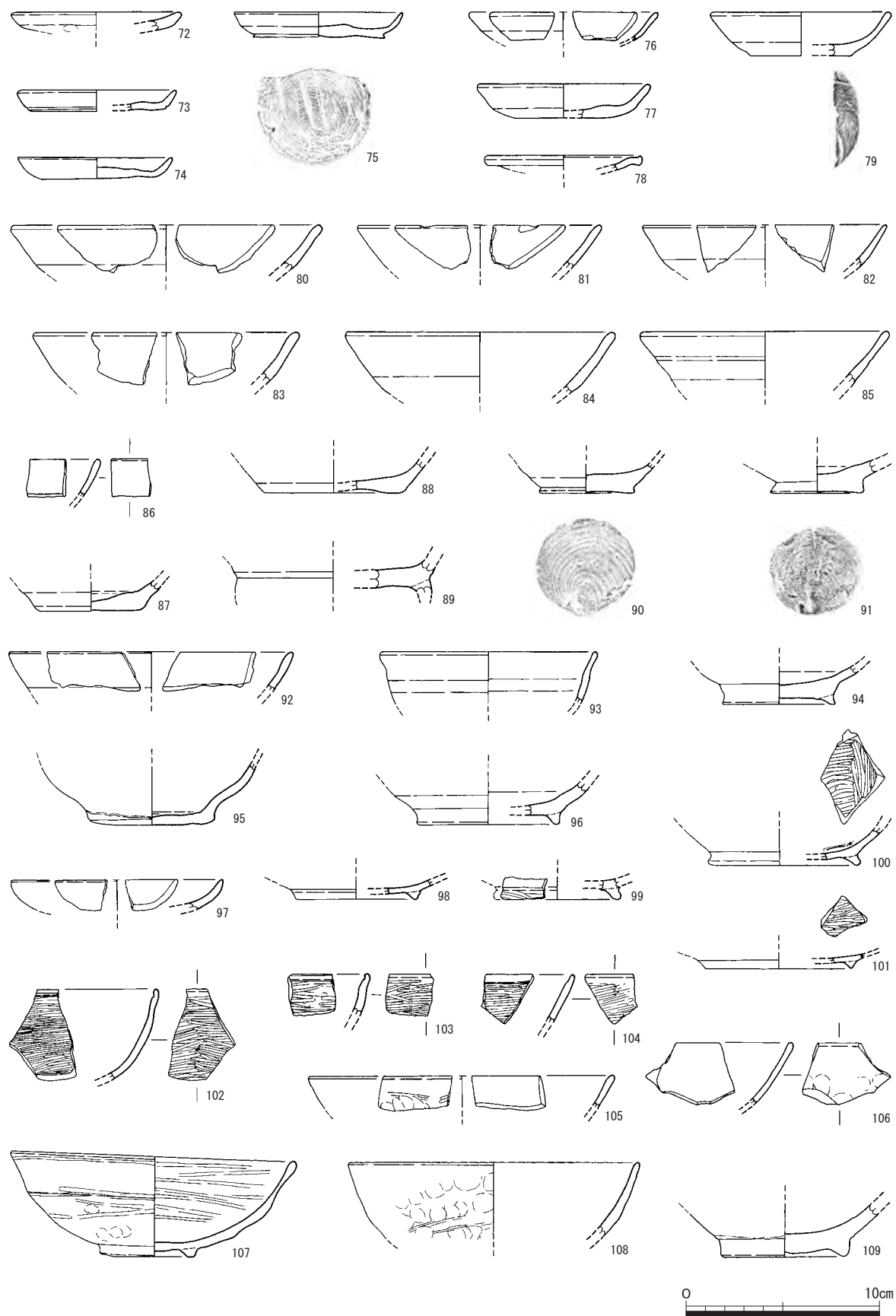


図15 II区4トレンチII層出土遺物

あり、復元口径8.4cmを測る。口縁部の断面形が「て」字状を呈し、内外面ともにナデ調整を施す。胎土は金雲母の粉末を少量含む。色調は内面が黄橙色、外面は黄褐色を呈する。79は復元口径9.6cm、復元底径5.4cm、器高2.3cmを測る。口縁部はやや内湾気味に開き、端部は若干肥厚し丸くおさまる。内外面ともに回転ナデ調整を施す。底部の切り離しは回転糸切りである。胎土は1mm以下の角閃石粒を少量含む。色調は内面の口縁端部沿いが褐灰色、それ以下はにぶい黄橙色を呈し、外面は口縁上部が褐灰色、それ以下は浅黄橙色である。

80は口縁部であり、復元口径16.4cmを測る。口縁部はやや内湾気味に開き、端部は丸くおさまる。内外面ともに回転ナデ調整が施され、口縁上部ではナデ調整がやや強い。胎土は約0.5mmの長石粒と1～2mm程度の角閃石粒を少量含む。色調は内外面ともに橙色を呈する。81は口縁部であり、復元口径12.6cmを測る。口縁部はやや内湾気味に開き、端部は丸くおさまる。内外面ともに回転ナデ調整が施される。胎土は金雲母の粉末を少量含む。色調は内面が黒褐色、外面はにぶい褐色を呈する。82は口縁部であり、復元口径13.0cmを測る。口縁部はやや内湾気味に開き、端部は若干尖り気味におさまる。内外面ともに回転ナデ調整が施される。胎土は約1mmの長石粒、金雲母の粉末を少量含む。色調は内面が褐灰色とにぶい橙色、外面は明赤褐色と暗赤褐色を呈する。83は口縁部であり、復元口径13.8cmを測る。口縁部は外方へ丸みをおびながら開き、端部はやや肥厚し丸くおさまる。内外面ともに回転ナデ調整が施される。胎土は約1mmの石英粒を少量含む。色調は内面が橙色、外面は明赤褐色を呈する。84は口縁部であり、復元口径14.0cmを測る。口縁部はやや内湾気味に開き、端部は丸くおさまる。内外面ともに回転ナデ調整が施される。胎土は1mm以下の石英粒と金雲母の粉末を少量含む。色調は内面が黄橙色、外面は橙色を呈する。85は口縁部であり、復元口径13.0cmを測る。口縁部は外方へ直線的に開き、端部はやや肥厚し丸くおさまる。内外面ともに回転ナデ調整が施され、体部外面にはナデ調整による沈線が1条めぐる。胎土は1mm以下の長石粒と金雲母の粉末を少量含む。色調は内面が灰黄褐色、外面はにぶい橙色を呈する。86は口縁部であり。口縁部はやや内湾気味に開き、端部は肥厚して丸くおさまる。内外面ともに回転ナデ調整が施される。胎土は1mm以下の長石粒を少量含む。色調は内外面ともに橙色を呈する。87は底部であり、復元底径5.4cmを測る。内外面ともに回転ナデ調整が施され、底部と体部の境には強いナデ調整が施される。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。胎土は約1mmの角閃石粒を少量含む。色調は内面が明黄褐色、外面は橙色を呈する。88は底部であり、復元底径7.0cmを測る。内外面ともに回転ナデ調整が施される。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。胎土は約1mmの角閃石粒を少量含む。色調は内外面ともににぶい橙色を呈する。90は底部であり、底径5.0cmを測る。底部は円盤状の高台を有し、高台の高さは0.4cmである。内外面ともに回転ナデ調整が施される。底部の切り離しは回転糸切りである。胎土は1～2mm程度の長石粒を少量含む。色調は内面がにぶい黄橙色、外面は灰黄褐色を呈する。91は底部であり、底径4.8cmを測る。底部は円盤状の高台を有し、高台の高さは0.7cmである。内外面ともに回転ナデ調整が施される。底部の切り離しは回転糸切りである。胎土は1～2mm程度の長石粒と金雲母の粉末を少量含む。色調は内外面ともににぶい黄橙色を呈する。

89は底部であり、高台は残存していない。底部には回転ヘラ切りによって切り離された後に輪高

## 2. 各トレンチの成果

台を貼り付けている。内外面ともに回転ナデ調整が施される。胎土は約2mmの長石粒を少量含む。色調は内面がにぶい黄橙色、外面はにぶい橙色を呈する。

**須恵器** 92、95は杯、93、94、96は椀である。焼成はいずれも堅緻である。

92は口縁部であり、復元口径15.0cmを測る。口縁部は内湾しながら開き、端部は丸くおさまる。内外面ともに回転ナデ調整が施される。胎土は約1mmの長石粒を少量含む。色調は内外面ともに灰色を呈する。95は底部であり、底径6.8cmを測る。内外面ともに回転ナデ調整が施され、底部下半では特に強い。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。胎土は約1mmの角閃石粒を少量含む。色調は内外面ともに灰色を呈する。体部の外面上部には自然釉が付着し、黒色をなす。

93は口縁部であり、復元口径11.6cmを測る。口縁部は内湾しながら開き、上部は強いナデ調整によって外反する。口縁端部は丸くおさまる。内外面ともに回転ナデ調整が施される。胎土は約1mmの長石粒を少量含む。色調は内面が黄灰色、外面は黒褐色を呈する。94は底部であり、復元底径6.0cm、高台の高さは0.5cmを測る。高台は貼り付け輪高台であり、断面形態が三角形を呈し外方へ開く。内外面ともに回転ナデ調整が施される。胎土は約2mmの長石粒を少量含む。色調は内外面ともに灰色を呈する。96は底部であり、復元底径7.6cm、高台の高さ0.8cmを測る。高台は貼り付け輪高台であり、断面形態が三角形を呈して外方へ開く。内外面ともに回転ナデ調整が施される。胎土は1mm以下の長石粒を少量含む。色調は内外面ともに灰色を呈する。

**黒色土器** 97は黒色土器A類の皿、98～101は黒色土器A類の椀、102～104は黒色土器B類の椀である。焼成はいずれも良好である。

97は口縁部であり、復元口径11.2cmを測る。口縁部は内湾しながら開き、端部は尖り気味におさまる。内外面ともにナデ調整が施される。胎土は1mm以下の角閃石粒をやや含み、金雲母を多量に含む。色調は内面上部がにぶい橙色、下部は黒色、外面は橙色を呈する。

98は底部であり、復元底径6.2cm、高台の高さ0.5cmを測る。高台は貼り付け輪高台であり、断面形態は三角形を呈して外方へ開く。高台と底部の境には強いナデ調整が施され、見込みにはミガキがみられる。胎土は1mm以下の長石粒と金雲母の粉末を少量含む。色調は内面が黒色、外面は明赤褐色を呈する。99は底部であり、復元底径6.4cm、高台の高さ0.7cmを測る。高台は貼り付け輪高台であり、断面形態は方形状を呈し、外方へ開く。高台には強いナデ調整が施され、外面には工具による面がみられる。見込みにはミガキがみられる。胎土は1mm以下の長石粒を少量含む。色調は内面が黒褐色、高台の内面が明赤褐色、高台の外面は橙色を呈する。100は底部であり、復元底径7.2cm、高台の高さ0.7cmを測る。高台は貼り付け輪高台であり、断面形態が方形状を呈して外方へ開く。内面には幅約2mmのミガキが密に施され、体部は横方向、見込みには平行線状にみられる。胎土は1mm以下の長石粒と金雲母の粉末を少量含む。色調は内面が黒色、外面は橙色を呈する。101は底部であり、復元底径7.8cm、高台の高さ0.4cmを測る。高台は貼り付け輪高台であり、断面形態が三角形を呈する。見込みには幅約1mmのミガキが密に施される。胎土は金雲母の粉末を少量含む。色調は内面が黒色、外面は赤褐色を呈する。

102は口縁部である。口縁部は内湾気味に開き、端部は丸くおさまる。口縁端部内面には沈線が

1条めぐる。内外面ともに幅1～2mm程度のミガキが横方向に密に施される。胎土は金雲母の粉末を少量含む。色調は内外面ともに黒色を呈する。103は口縁部である。口縁部は内湾気味に開き、端部は丸くおさまる。口縁端部内面には沈線が1条めぐり、内外面ともに幅1～2mm程度のミガキが横方向に密に施される。胎土は金雲母の粉末を少量含む。色調は内面が黒褐色、外面は黒色を呈する。104は口縁部である。口縁部は外方へやや直線的に開き、端部は丸くおさまる。口縁端部内面には沈線が1条めぐる。内外面ともに幅約1mmの細いミガキが横方向に密に施される。胎土は金雲母の粉末を少量含む。色調は内面が黒色、外面は黒褐色を呈する。

**瓦器** 105～107は和泉型瓦器碗である。

105は口縁部であり、復元口径16.0cmを測る。口縁部は外方へ直線的に開き、端部は丸くおさまる。外面には幅1mmのミガキが数本みられる。胎土は1mm以下の長石粒を少量含む。色調は内外面ともににぶい黄橙色を呈し、焼成がややあまい。和泉Ⅱ－3期〔橋本2018〕に比定される。106は口縁部である。口縁部は内湾気味に外方へ開き、端部は丸くおさまる。外面にはナデ調整が施され、体部外面には指頭圧痕がみられる。色調は内外面ともににぶい橙色を呈する。和泉Ⅱ－3期に比定される。107は口径15.1cm、底径が5.0cm、器高5.6cm、高台の高さは0.5cmを測る。口縁部は丸みをおびながら開き、上半は強いナデ調整が施されているためやや外反する。口縁端部はやや肥厚し、丸くおさまる。内面には幅1～2mmのミガキが施される。外面にはナデ調整後、口縁端部付近と中位に幅約2mmのミガキが粗く施される。高台は貼り付け輪高台であり、断面形態が台形を呈する。胎土は1mm以下の長石粒を少量含む。色調は内外面ともににぶい黄橙色を呈する。和泉Ⅱ－2期に比定される。

**吉備型土師器** 108は碗であり、復元口径15.2cmを測る。口縁部は内湾気味に開き、端部は丸みをおびる。外面には幅1mmのミガキが横方向に数本施され、指頭圧痕もみられる。胎土は1mm以下の長石粒と石英粒を少量含む。色調は内外面ともに灰白色を呈する。焼成は良好である。山本編年Ⅱ期に比定される〔山本悦1993〕。

**陶磁器** 109は白磁碗の底部であり、復元底径6.8cm、高台の高さ1.0cmを測る。高台は削り出し高台であり、断面形は台形である。高台を除き、表面には灰白色を呈する釉が掛かる。内外面ともに貫入がみられ、焼成は堅緻である。大宰府分類白磁碗Ⅳ類〔山本信2000〕に比定される。

72、73、75～86、88～95、97～101、103、105～109はⅡ層、74、87、96、102、104はⅡ層上面から出土した。

92、95は9世紀～10世紀、87～89、93、94、96～101は10世紀～11世紀、78、102～104は11世紀、109は11世紀後半～12世紀、72～77、79～86、90、91は12世紀、105～107は12世紀中葉、108は12世紀後葉である。

**土錘** (図16) 110～114は管状土錘、115～118は有溝土錘、119～121は棒状土錘である。114、116、118、119は焼成が良好で、胎土も精良である。それ以外は焼成がやや軟質で、摩耗も著しい。

110は円筒形の大型品であり、4分の3程度残存している。現存長9.3cm、直径3.9cm、孔径1.2cm、重量100.4gである。全体にナデ調整が施され、指頭圧痕がみられる。1～3mm程度の長石粒と石

2. 各トレンチの成果

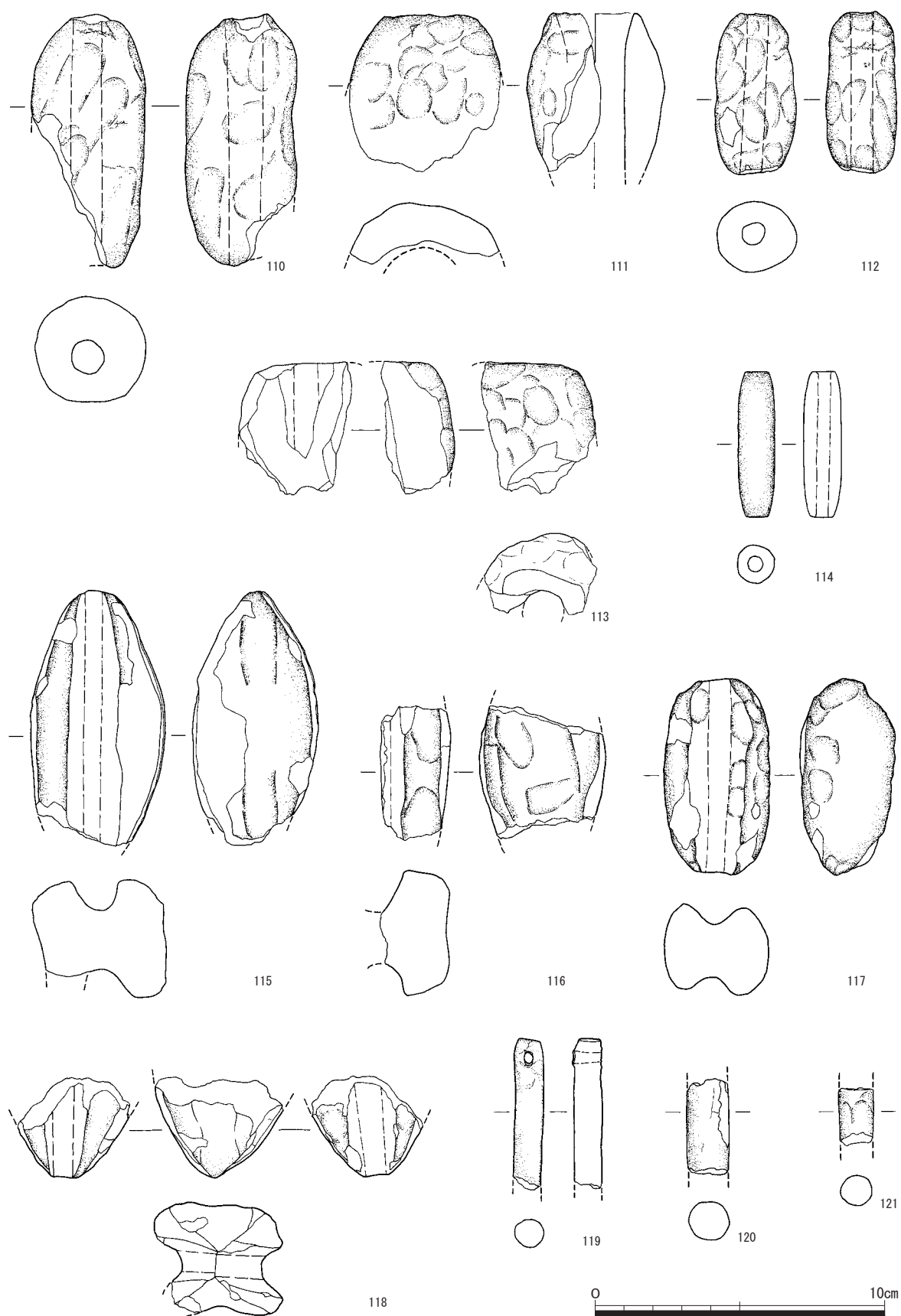


図16 II区4トレンチ出土土錘

英粒を多量に含み、色調は橙色またはにぶい橙色を呈する。112は円筒形の中型品であり、完形品である。全長5.6cm、断面の直径2.5～2.8cm、孔径0.75cm、重量42.5gを測る。全体にナデ調整が施され、指頭圧痕がみられる。1mm以下の長石粒と石英粒を多量に含み、色調はにぶい橙色または灰褐色を呈する。114は円筒形の小型品であり、完形品である。全長5.0cm、直径1.3cm、孔径0.4cm、重量10.2gである。色調はにぶい黄橙色を呈し、表面の一部は炭素を吸着し黒褐色を呈する。111は樽形を呈し、5分の1程度残存している。現存長5.5cm、復元直径6.0cm、孔径2.5cm、重量は43.4gを測る。全体にナデ調整が施され、指頭圧痕がみられる。1～2mm程度の長石粒と石英粒をやや含み、色調はにぶい橙色を呈する。113の復元形は111と同様である。6分の1程度残存しており、現存長4.5cm、復元直径4.6cm、復元孔径1.5cm、重量は39.6gである。全体にナデ調整が施され、指頭圧痕がみられる。1～3mm程度の長石粒と石英粒を多量に含み、色調は橙色である。

115は大型の有溝土錘であり、全体の5分の4程度残存し、平面形が紡錘形、断面形が「H」字状を呈する。現存長8.8cm、幅4.6cmを測り、重量は146.1gである。表裏ともに長軸に沿った溝をもち、溝の断面は「U」字状をなす。溝幅1.8cm、溝の深さは1.1cmである。1～5mm程度の長石粒と石英粒を多量に含み、色調はにぶい褐色を呈する。116、118は115と同形態に復元された破片資料である。116は片面の半分程度しか残存しておらず、現存長4.6cm、現存幅2.4cm、重量49.8gである。溝の断面は「U」字状をなし、現存溝幅0.8cm、溝の深さは1.5cmである。全体にはナデ調整、溝両側の平坦面および側面には指頭圧痕がみられる。1～2mm程度の長石粒と石英粒を多量に含み、色調は灰黄褐色と褐灰色である。118は端部付近しか残存しておらず、現存長3.5cm、現存幅3.9cm、重量37.9gを測る。溝の幅1.6cm、深さは0.8cmである。全体にナデ調整、指頭圧痕がみられる。胎土は約1mmの長石粒を多量に含み、色調は褐灰色を呈する。117は平面形が小判形を呈する中型品であり、ほぼ完形である。全長6.8cm、幅3.4cm、重量74.6gである。溝の断面形はやや上端が開き気味の「U」字状であり、溝の幅と深さはそれぞれ2.0cm、0.8cmを測る。全体にナデ調整が施され、溝内面および側面に指頭圧痕がみられる。1～2mm程度の長石粒と石英粒を少量含み、色調は黄灰色とにぶい褐色を呈する。

119は棒状土錘であり、上端の穿孔部を含む3分の2程度が残存している。穿孔は焼成前に一方からおこなわれている。現存長5.2cm、直径1.0cm、孔径0.4～0.5cm、重量7.7gである。色調はにぶい赤橙色と褐灰色を呈する。120、121は両端部を欠く、体部の一部であり、それぞれ現存長3.3cm、直径1.4cm、重量8.2g、現存長2.0cm、断面径1.1cm、重量3.7gを測る。いずれもナデ調整や指頭圧痕が認められ、1～2mm程度の長石粒と石英粒を多量に含み、色調は橙色を呈する。

110、116、120、121はⅡ－2層、117はⅡ－3層、112はⅡ－4層、111、113、118はⅡ層、119は2号遺構から出土した。114、115は出土層位不明である。 (馬 赤嬰)

**鉄製品と鍛冶関連遺物** (図17) 鉄製品は釘1点、鍛冶関連遺物は塊状鉄製品2点、板状鉄製品3点、羽口1点、鉄滓1点が出土した。

122は釘であり、頭部を欠損している。足はゆるやかに曲がり、その横断面は正方形を呈する。現存長4.8cm、最大幅0.5cm、重さ6.0gを測る。123、124は塊状鉄製品の破片であり、厚み、形態を

## 2. 各トレンチの成果

異にしている。123は最も厚い鉄塊であり、表裏面はなめらかで、鍛打で生じたと考えられるわずかな凹みが観察される。3つの側面は破面である。厚さ2.3~2.5cm、重さ117.3gを測る。124は弧を描く外周が旧状を示しており、1つの破面をもっている。中心部とその周りの厚みが異なっており、中途の鍛延状態を示すものと推察される。厚さ1.3~1.6cm、重さ96.9gを測る。125~127は板状鉄製品の破片である。125は旧状をのこす直線的な二側縁と曲線的な破面をもつ。124と比較して、薄く、平板になっている。126の破面はやや直線的である。厚さはいずれも0.8~1.1cmであり、重さはそれぞれ101.8g、67.0gを測る。127は125、126よりもさらに薄い鉄板であり、厚さは0.6~0.7cm、重さは28.4gである。劣化が著しく、一部剥落がみられる。128は羽口先端部から剥落した被熱部分であり、黒くガラス化している。送風孔は先端部分をわずかにのこしており、その孔径の復元径は3.0cmである。129は鍛冶滓の底部付近の破片であり、底面には鉄分や不純物が沈着して固結した炉床の土が付着している。重さ41.8gを測る。

122はⅡ-4層、123~127、128はⅡ-2層、129はⅡ層上面で出土した。(鄭 宗鎬)

### (2) 17トレンチ (図18)

第9次・第10次調査までに明らかになった縄文時代の包含層の広がりを捉えるために第11次調査で、4トレンチの50cm南側に設けた南北2m、東西4mのトレンチである。Ⅱ-3層まで順に掘り下げた後、トレンチ西壁沿いに幅1mの先行トレンチを設定してⅡ-4層を掘り下げ、Ⅲ層上面を確認した。新型コロナの影響で、本トレンチの発掘を中止せざるを得ず、地表から0.73m、標高1.980mまで掘ったところで停止した。

土層は大きく3層に分層される。Ⅰ層は表土であり、砂質土層でしまりが強い。2層に分かれ、

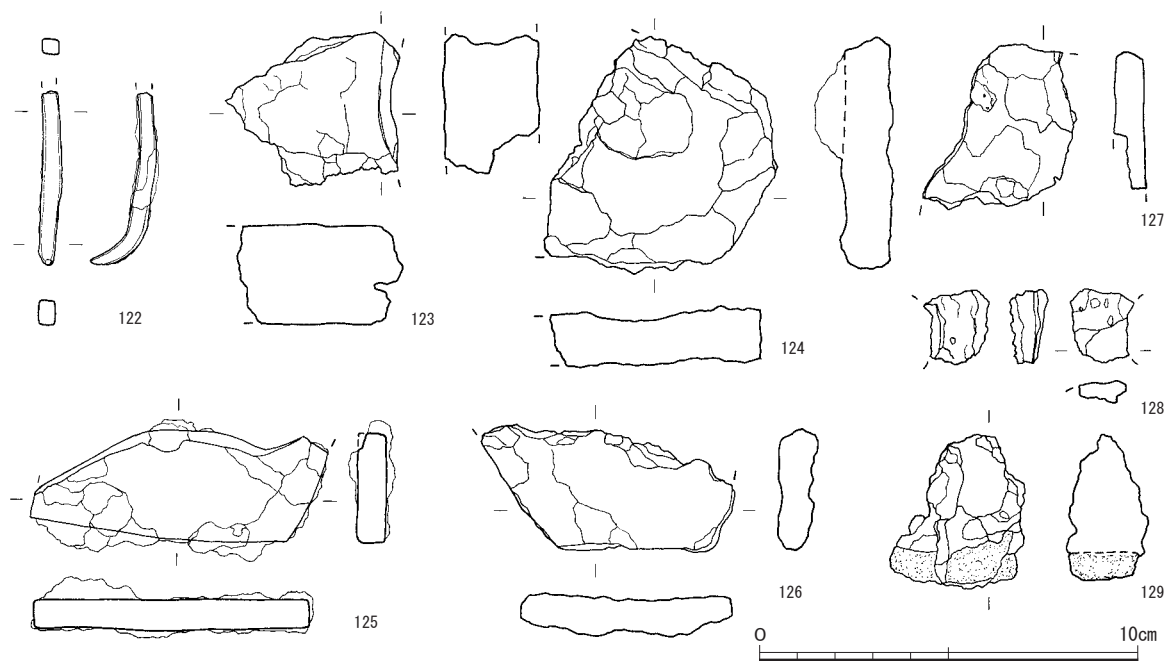
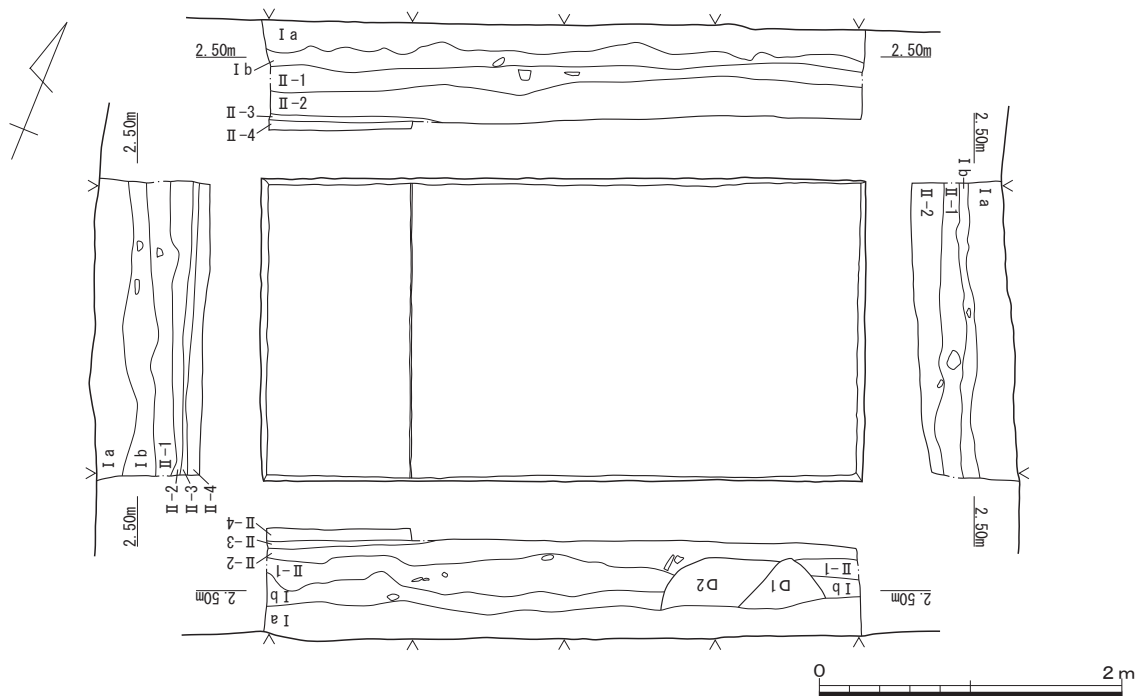


図17 Ⅱ区4トレンチ出土鉄製品・鍛冶関連遺物

I a 層はにぶい黄褐色を呈し、細礫と極粗粒砂を多く含む粗粒砂を主体とする。層厚は14～30cmである。下面が波打っている。I b 層はにぶい黄褐色を呈し、中礫～大礫を多く含む粗粒砂と極粗粒砂を主体とする。層厚は6～24cmであり、西から東に向かって薄くなる。トレンチ南東隅において、I b 層からII-1層にかけて攪乱坑D1、D2が検出された。II層は4層に細分され、II-1層は黒褐色を呈し、細粒砂～中粒砂を多く含む粗粒砂を主体とし、しまりが強い。層厚は8～24cmであり、南から北に向かってゆるやかに傾斜する。II-2層は暗褐色を呈し、細粒砂～中粒砂を多く含む粗粒砂を主体とし、しまりが強い。層厚は4～25cmであり、東から西に向かって薄くなる。4トレンチに比べて多くの陶磁器片が出土している。II-3層は暗褐色を呈し、細粒砂～中粒砂を多く含む粗粒砂を主体とする。焼土を混入しており、しまりが強い。トレンチの東側でのみ検出され、層厚は1～6cmである。II-4層は黒褐色を呈し、粗粒砂～極粗粒砂を多く含む中粒砂を主体とし、しまりが強い。層厚は4～11cmである。III層はにぶい黄褐色を呈し、中粒砂～粗粒砂を主体とする。III層上面では芸予III-3類〔柴田2015〕の脚台式製塩土器の脚台部片と体部片が多数出土している。III層は、先行トレンチ以外でもトレンチ北東隅で一部検出している。

各層の出土遺物について概要を示すと、I a 層では土師質土器、須恵器、国産陶器、土錘、I b 層では土師質土器、須恵器、黒色土器、瓦器が出土した。II-1層では土師質土器、須恵器、黒色土器、瓦器、緑釉陶器、灰釉陶器、越州窯系青磁、土錘、II-2層では古式土師器、土師質土器、須恵器、黒色土器、瓦器、緑釉陶器、灰釉陶器、スラグ、鍛造剥片、鉄塊、II-3層では土師質土



I a 層：にぶい黄褐色（10YR5/4）粗粒砂主体。細礫と極粗粒砂を多く含む。しまりあり。I b 層：にぶい黄褐色（10YR4/3）粗粒砂～極粗粒砂主体。中礫～大礫（角・円礫）を多く含む。しまりあり。II-1層：黒褐色（7.5YR3/1）粗粒砂主体。中粒砂を多く含む。中礫～大礫（角・円礫）を含む。しまりあり。II-2層：暗褐色（10YR3/3）粗粒砂主体。細粒砂～中粒砂を多く含む。貝が混入。しまりあり。中下部から礫群を検出。II-3層：暗褐色（10YR3/4）粗粒砂主体。細粒砂～中粒砂を多く含む。にぶい黄褐色（10YR5/4）中粒砂をブロック状に含む。焼土を含む。しまりあり。II-4層：黒褐色（10YR2/2）中粒砂主体。粗粒砂～極粗粒砂を多く含む。しまりあり。D1・D2：攪乱。

図18 II区17トレンチ平面図・土層図

## 2. 各トレンチの成果

器、須恵器、黒色土器、瓦器、鉄釘、Ⅱ－4層では古式土師器、製塩土器、土師質土器、土錘が出土した。そしてⅢ層上面では、古式土師器、製塩土器が出土した。

(古江七海)

### 出土遺物

#### 古墳時代

**古式土師器** (図19) 130は甕の口縁部であり、屈曲部から口縁部にかけてゆるやかに外反している。口縁端部は丸くおさまり、内外面ともにナデ調整が施される。胎土は約1mmの長石粒と金雲母粒をまばらに含んでいる。色調は内面が赤灰色、外面は橙色である。焼成は良好である。Ⅱ－2層から出土した。

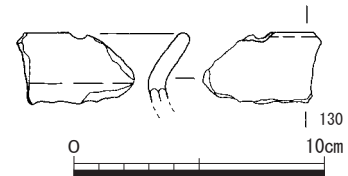


図19 Ⅱ区17トレンチ出土古式土師器

(永田 權)

**製塩土器** (図20) 131～134は口縁部、135は胴部、136～140は脚台部である。焼成はいずれも良好である。口縁部は内外面ともにナデ調整されているものが多く、やや内傾しながら開き、端部は丸くおさまるものが多い。

131、133、134は口縁部付近までタタキが施されている。器壁は平均約2mmと薄い。133、134はタタキを丁寧にナデ消しており、丁寧なつくりである。135は外面のタタキが明瞭である。その形状から底部付近の破片で、脚台部との接続部分に近い位置の破片であろう。色調は内外面ともににぶい黄橙色を呈する。136～140の脚台径は最大2.8cm、最小で1.9cmである。胎土には約1mmの長石粒と金雲母の粉末を含むものが多く、色調はにぶい橙色か橙色を呈するものが多い。ほとんどが外面にナデ調整を施しており、なかには不明瞭ながらも指頭圧痕をのこすものもある。すべて芸予Ⅲ－3類〔柴田2015〕と考えられる。

141は製塩土器の底部で、小さな丸底を呈している。胎土は約1mmの長石粒を少量含み、色調は内面がにぶい橙色、外面は橙色を呈する。いわゆる倉浦式と呼ばれる製塩土器であり、年代は7～8世紀と考えられる。

141はⅡ－1層、139はⅡ－2層、131、135、138はⅡ－4層、132～134、136、137、140はⅢ層上面から出土している。

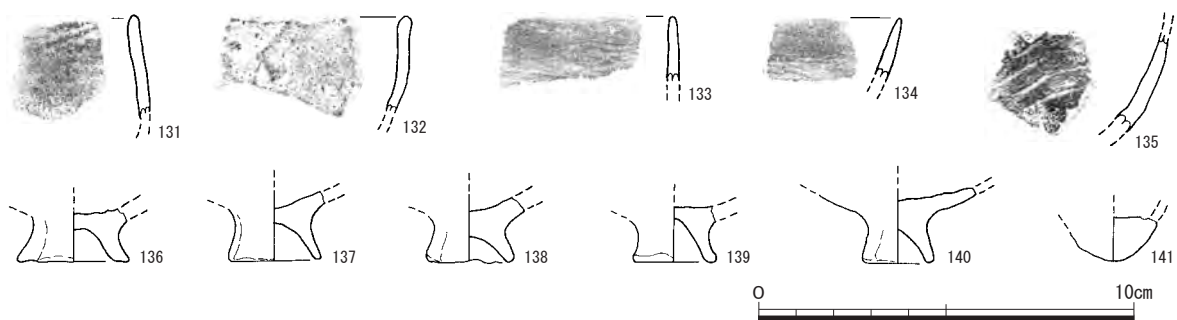


図20 Ⅱ区17トレンチ出土製塩土器

## 古代～中世

**土師質土器** (図21) 142～148は杯、149は碗である。焼成はいずれも良好である。

142～148は底部である。142は復元底径6.0cmを測る。内外面ともに回転ナデ調整が施され、底部の切り離しは回転ヘラ切りである。胎土は約0.5mmの長石粒を少量含む。色調は内面がにぶい橙色であり、外面は明褐灰色を呈する。143は復元底径7.5cmである。内外面ともに回転ナデ調整が施され、底部の切り離しは回転ヘラ切りである。胎土は約0.5mmの長石粒と金雲母の粉末を少量含み、色調は内外面ともに橙色を呈する。144は復元底径5.0cmを測る。内外面ともに回転ナデ調整が施される。胎土は約1mmの長石粒を少量と金雲母の粉末を多量に含み、色調は内外面ともににぶい橙色を呈する。145は復元底径7.6cmである。内外面ともに回転ナデ調整が施され、底部の切り離しは回転ヘラ切りである。胎土は1～2mmの長石粒を多量に含み、色調は内外面ともににぶい橙色を呈する。146は復元底径7.6cmを測る。内外面ともに回転ナデ調整が施され、底部の切り離しは回転糸切りである。胎土は約2mmの長石粒を少量含む。色調は内面がにぶい橙色であり、外面は橙色を呈する。147は底径4.8cmである。底部は体部にかけて強く立ち上がり、柱状を呈する。内外面ともにナデ調整が施される。胎土は1mm以下の長石粒を少量、金雲母の粉末を多量に含む。色調は内面が橙色であり、外面はにぶい橙色と褐灰色を呈する。148は復元底径8.0cmを測る。内外面ともに回転ナデ調整が施され、底部の切り離しは回転ヘラ切りである。胎土は約1mmの長石粒を少量、金雲母の粉末を多量に含む。色調は内面がにぶい褐色であり、外面はにぶい褐色とにぶい黄橙色を呈する。

149は口縁部である。復元口径は16.5cmである。口縁部は直線的にやや外方へ開き、端部は丸くおさまる。胎土は約1mmの長石粒を少量含み、色調は内外面ともににぶい橙色を呈する。

**須恵器** 150～158は杯、159は壺もしくは杯である。焼成はいずれも堅緻である。

150、151は口縁部である。150は復元口径17.8cmを測る。口縁部は直線的に外方へ開き、端部は丸くおさまる。内外面ともに回転ナデ調整が施される。胎土は約1mmの長石粒を少量含み、色調は内外面ともに灰白色を呈する。151は復元口径15.2cmを測る。口縁部はやや内湾しながら開き、端部は丸くおさまる。内外面ともに回転ナデ調整が施される。胎土は0.5mm以下の長石粒を少量含み、色調は内外面ともに黄灰色を呈する。

152～158は底部である。152は復元底径5.4cmである。内外面ともに回転ナデ調整が施され、見込みには段がみられる。底部の切り離しは回転糸切りである。胎土は1mm以下の長石粒を微量含み、色調は内外面ともに黄灰色を呈する。153は復元底径6.1cmを測る。内外面ともに回転ナデ調整が施されている。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。胎土は約2mmの長石粒を少量含み、色調は内面が灰色であり、外面は灰白色を呈する。154は復元底径6.8cmである。内外面ともに回転ナデ調整が施され、底部の切り離しは回転ヘラ切りである。内外面ともに火襴がみられる。胎土は1mm以下の長石粒を少量含む。色調は内面が明青灰色であり、外面は明赤灰色を呈する。155は復元底径7.0cm、高台の高さは0.6cmを測る。高台は断面形態が三角形を呈し、丁寧に貼り付けられている。内外面ともに回転ナデ調整が施され、底部の切り離しは回転ヘラ切りである。胎土は0.5mm以下の長石粒を微量含み、色調は内外面ともに褐灰色を呈する。156は底径7.0cm、高台の高さは0.5cmである。内

## 2. 各トレンチの成果

外面ともに回転ナデ調整が施され、高台は断面形態が三角形を呈し、高台は丁寧に貼り付けられている。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。胎土は約2mmの長石粒を含む。色調は内面がオリブ黒色であり、外面は灰色を呈する。157は復元底径8.6cm、高台の高さは0.3cmを測る。内外面ともに回転ナデ調整が施される。高台は断面形態が台形を呈し、貼り付け方は丁寧である。胎土は1～3mmの長石粒を少量含み、色調は内外面ともに黄灰色を呈する。158は復元底径7.6cm、高台の高さは0.3cmを測る。外面はナデ調整が施される。高台は断面形態が台形を呈し、丁寧に貼り付けられている。胎土は1mm以下の長石粒を多く含み、色調は内外面ともに褐灰色を呈する。焼成は良好である。

159は底部である。復元底径は7.8cm、高台の高さは0.3cmを測り、器壁が厚い。高台は断面形態が

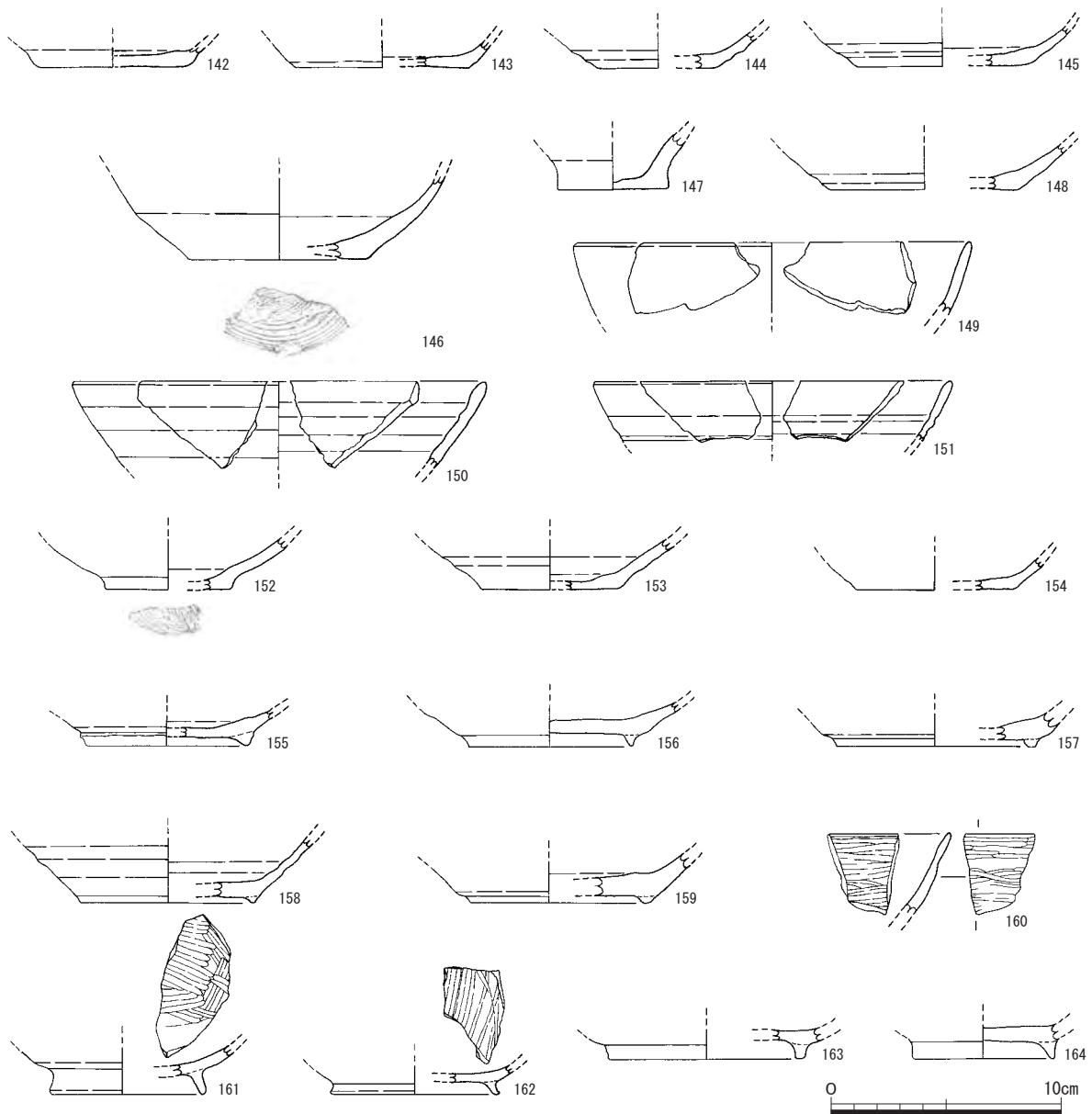


図21 II区17トレンチ出土古代～中世土器

台形を呈した輪高台が丁寧に貼り付けられている。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。胎土は1mm以下の長石粒を微量含み、色調は内外面ともに黄灰色を呈する。

**瓦器** 160は楠葉型瓦器碗の口縁部である。口縁部はやや内湾しながら開き、上部にはナデ調整を施す。口縁端部内面には沈線が一条めぐり、内外面ともに横方向のミガキが観察され、内面は緻密であるのに対し、外面には間隔をあけて施される。胎土は1mm以下の長石粒を微量含み、色調は内外面ともに灰白色を呈する。焼成は良好である。楠葉Ⅱ－2期〔橋本2018〕である。

**黒色土器** 161～163は黒色土器 A 類の碗の底部である。焼成はいずれも良好である。

161は復元底径6.5cm、高台の高さは1.1cmを測る。外面は回転ナデ調整であり、見込みにはミガキが緻密に施される。高台は断面形態が三角形を呈し、貼り付け方は丁寧である。胎土は金雲母の粉末を少量含む。色調は内面が黒褐色、外面は灰色であり、高台外面の一部は二次的的被熱により黒色を呈する。162は復元底径7.2cm、高台の高さは0.6cmである。高台は断面形態が三角形を呈して「ハ」字状に開き、丁寧に貼り付けられる。見込みにはミガキが緻密に施される。胎土は金雲母の粉末を多量に含む。色調は内面が黒色であり、外面はにぶい褐色を呈する。163は復元底径8.4cm、高台の高さは0.6cmである。外面にはナデ調整が施される。見込みにはミガキが間隔をあけて施される。高台は断面形態が台形を呈し、丁寧に貼り付けられている。胎土は金雲母の粉末を多量に含む。色調は内面が黒褐色であり、外面はにぶい黄褐色を呈する。

**吉備型土師器** 164は吉備型土師器碗の底部である。復元底径6.1cm、高台の高さは0.8cmである。内外面ともにナデ調整であり、見込みには緻密なミガキが施される。高台は断面形態が三角形を呈し、丁寧に貼り付けられる。胎土は約1mmの長石粒を含み、色調は内外面ともに灰白色を呈する。焼成は良好である。山本編年Ⅰ－3期〔山本悦1993〕である。

147、158、160、164はⅠb層、143、152～155、157、159、161、162はⅡ－1層、142、144、145、148、150、151、163はⅡ－2層、146、149はⅡ層礫群、156はⅡ－4層から出土している。

142～145、148、149、161～163は10世紀～11世紀、146、147、152は12世紀、150、151、153～159は9世紀～10世紀、164は12世紀前半、160は12世紀中葉に比定される。 (古江七海)

**陶磁器** (図22) 165は越州窯系青磁、166～170は緑釉陶器、171、172は灰釉陶器である。165、166、168、169、171、172は碗、167は皿、170は碗あるいは皿である。

165は体部片である。内外面ともに施釉され、釉調は明黄色を呈するが、釉の発色はやや悪い。胎土は粗く、胎土中には黒色の斑点を含む。焼成は堅緻である。太宰府分類越州窯系青磁碗Ⅱ類〔山本信2000〕に比定される。

166は稜碗の口縁部片である。口縁部は体部中位で屈曲し、屈曲部内面には沈線がめぐり、外面には強い稜がみられる。その後、外方へ直線的に開き、端部は丸くおさまる。外面にはミガキがわずかに観察され、胎土は精緻であり、色調は灰色を呈する。釉調は、二次的な被熱を受けて変色していると考えられ、内外面ともに下半が灰黄緑色、上半は淡黄褐色を呈する。内外面ともに濃緑色を呈するゴマがみられ、硬質焼成であり、近江産緑釉陶器と考えられる。167は稜皿の口縁部片であり、口縁端部は一部欠損している。口縁部は体部中位でゆるやかに屈曲し、外面には弱い稜がみ

## 2. 各トレンチの成果

られる。その後、丸みをおびながら外反し、端部は丸くおさまる。胎土は精緻であり、色調は灰色を呈する。内外面ともに薄い釉がかけられており、釉調は明黄緑色を呈する。硬質焼成であり、篠窯産緑釉陶器と考えられる。168は口縁部片であり、外面は大部分が剥離している。口縁部は直線気味に開いた後、端部が外反する。胎土は精緻であり、色調は灰色を呈する。内外面ともに薄い釉が丁寧かけられており、釉調は内外面ともに灰緑色である。硬質焼成であり、畿内産緑釉陶器であると考えられる。169は口縁部片である。口縁部はゆるやかに内湾気味に立ち上がり、端部は欠損している。内外面ともに横方向のやや粗いミガキが観察され、胎土は精緻であり、オリーブ灰色を呈する。釉調は内外面ともに濃黄緑色を呈し、硬質焼成である。畿内産緑釉陶器であると考えられる。170は体部片である。外面には回転ナデ調整によるロクロ目が観察される。胎土は精緻であり、色調はオリーブ灰色を呈する。内外面ともに濃緑色を呈する釉がやや厚くかけられており、内面はガラス質化している。硬質焼成であり、畿内産緑釉陶器と考えられる。

171は口縁部片であり、器壁がやや薄い。口縁部はゆるやかに外反し、端部は丸くおさまる。ハケヌリにより施釉されたと考えられ、内面は薄く、全面に施釉されているのに対し、外面には釉が認められない。胎土は灰白色を呈し、焼成は堅緻である。K90号窯式期〔山下1995〕と考えられる。172は口縁部片である。口縁部は内湾気味に開き、端部は外方へ短く屈曲する。内外面ともに薄い釉が全面に施釉されている。胎土は灰白色を呈し、焼成は堅緻である。K90号窯式期あるいはO53号窯式期であると考えられる。

168、170、171はⅡ－2層、165、166、172はⅡ－1層、167はⅠb層から出土し、169は出土層位不明である。

165は8世紀末～10世紀中ごろ、166、167は10世紀前半、168～170は9世紀後半～10世紀初頭、171は9世紀後半、172は9世紀後半～10世紀前半に比定される。 (青木聡志)

**土錘** (図23) 173、174は有溝土錘である。173はほぼ完形であり、平面形は紡錘形を呈する。現存長8.7cm、幅3.7cm、重さは112.4gである。溝の断面形は略「U」字状である。溝の幅は1.3cm、深さは最深部で1cmを測る。溝両側の平坦面にはナデ調整が施されており、側面は長軸に沿って指で押さえられており、わずかに窪んでいる。1～2mmの石英粒と約1mmの長石粒を多く含む。焼成は良好である。174の旧状は173と同じであり、現存長7.6cm、幅4.3cm、重さは87.6gである。溝のある一面のみ残存している。溝の断面形はやや上端が開き気味の「U」字状であり、溝幅1.5cm、最深

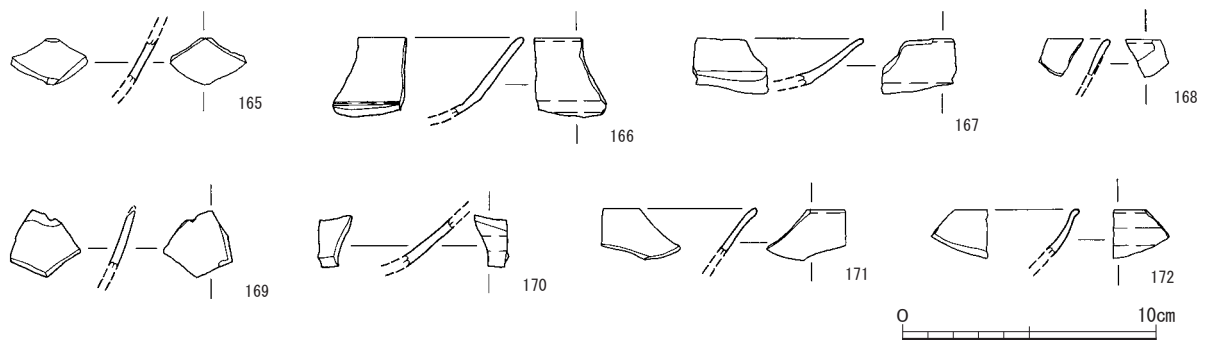


図22 Ⅱ区17トレンチ出土陶磁器

部で0.7cmを測る。平坦面にはナデ調整が施されており、胎土は1～2mmの石英粒と長石粒を多量に含む。焼成は良好である。

175、176は棒状土錘である。175は穿孔部をのこし、上端および下半を欠いている。断面形は略円形を呈する。穿孔は焼成前に片面からおこなわれており、その径は2～4mmを測る。ナデ調整が施されており、胎土は1～2mmの石英粒をわずかに含み、焼成は良好である。現存長3.6cm、直径1.6cm、重さは9.2gを測る。176は下端部を含む破片であり、断面形は円形を呈する。ナデ調整が施されており、胎土は約1mmの長石粒をわずかに含み、焼成は良好である。現存長2.3cm、直径1.1～1.2cm、重さは3.4gである。

173、175はⅡ－1層、174はⅠa層、176はⅡ－2層より出土した。（藤田一希）

**鉄製品と鍛冶関連遺物**（図24） 鉄製品は刀子1点、釘3点、棒状鉄器1点、鉄片1点の計6点、鍛冶関連遺物は羽口1点、鉄滓3点の計4点である。

177は刀子片であり、刃部と茎端部を欠損している。茎部の横断面は長方形を呈し、現存長5.2cm、身幅1.6cm、重さ6.8gである。178、179は鉄釘であり、頭部は前者がほぼ直角に、後者がやや鈍角に折れ曲がっている。180は頭部を欠く、折れ曲がった釘である。現存長3.4cm、最大幅1.0cm、重さ3.6gを測る。181は棒状鉄器であり、横断面が長方形を呈し、両端部を欠損している。現存長6.6cm、最大幅1.2cm、重量18.2gである。182は鉄片であり、旧状は不明である。現存長3.8cm、厚み0.4cm、重量9.3gである。

183は羽口先端部の破片であり、外面は強い被熱のため溶融し、ガラス化して、黒色を呈している。送風孔は先端部分と破面にわずかに痕跡がのこる程度である。孔径と外径はそれぞれ2.0cm、7.2cmに復元される。重さは13.9gを測る。184、185は小型で薄い鍛冶滓であり、それぞれ23.1g、13.9gを測る。これに対し、186は碗形滓であり、表面は滑らかで、側面に破面を有する。裏面には木炭の燃焼痕が凹凸をつくっており、一部に炉床のものと思われる砂が付着している。重さは68.5gである。

177～179はⅡ－1層、180、181はⅡ－3層、182～186はⅡ－2層から出土した。（鄭 宗鎬）

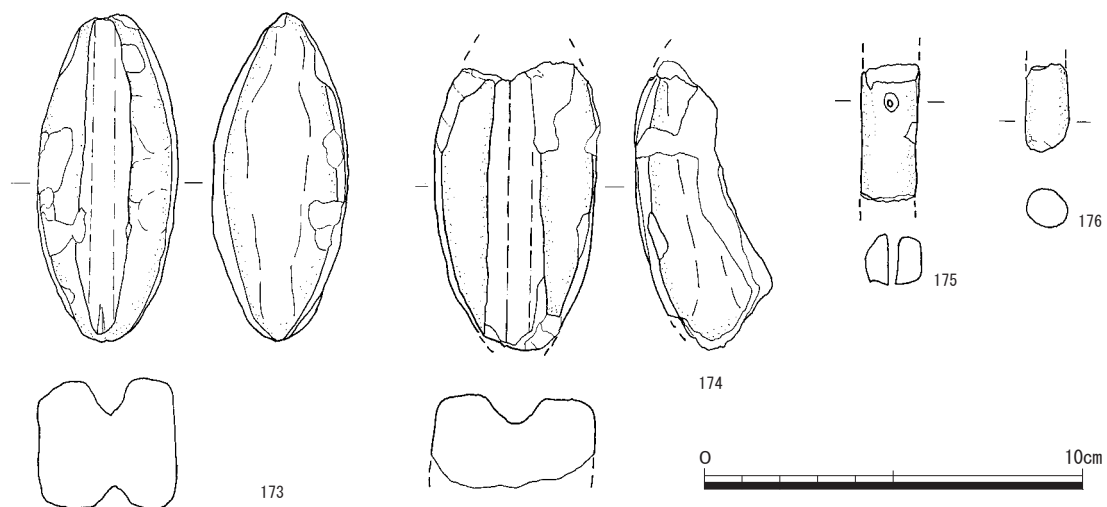


図23 Ⅱ区17トレンチ出土土錘

## 2. 各トレンチの成果

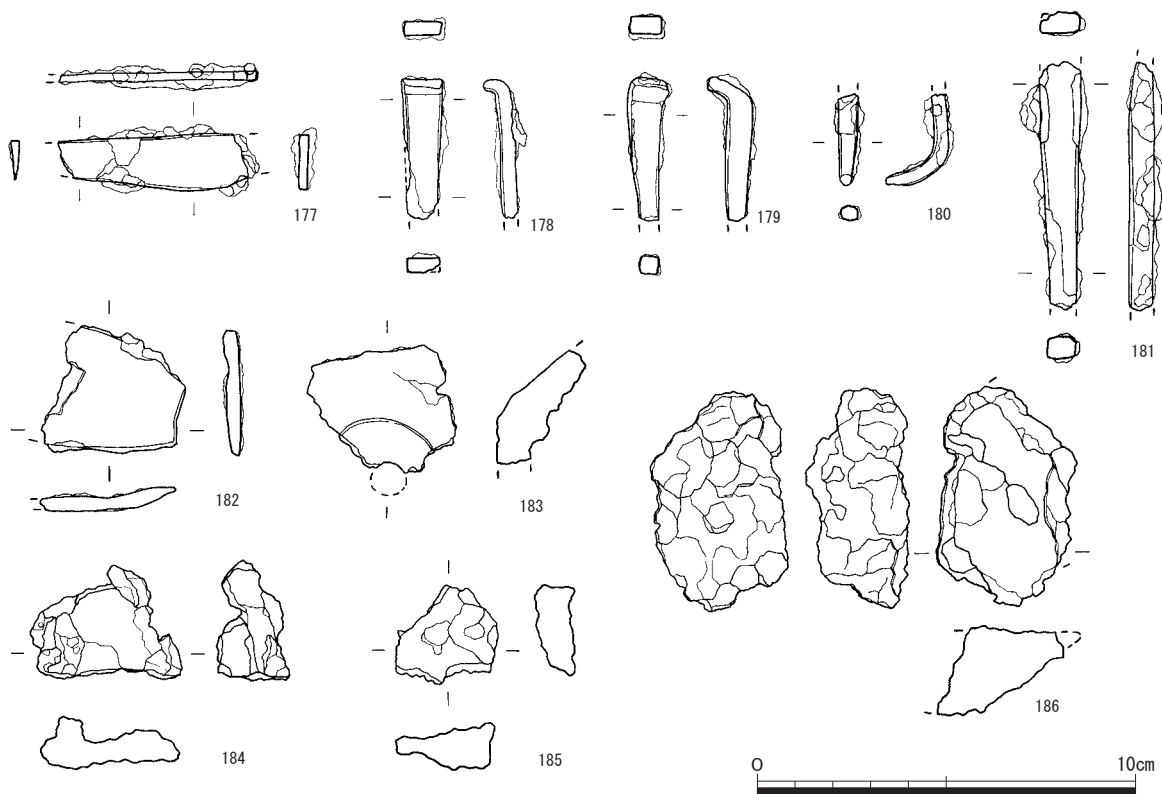


図24 II区17トレンチ出土鉄製品・鍛冶関連遺物

### 【参考文献】

- 柴田昌兎 2015「瀬戸内海における製塩考古学の現状と課題」『東アジア塩業考古学の提唱』愛媛大学東アジア古代鉄文化研究センター
- 高橋照彦 1995「3. 緑釉陶器」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 高橋照彦・中久保辰夫編2012『篠窯跡群大谷3号窯の研究』大阪大学文学研究科考古学研究報告第5冊、大阪大学大学院文学研究科考古学研究室
- 橋本久和 2009『中世考古学と地域・流通』真陽社
- 橋本久和 2018『概論 瓦器碗研究と中世社会』真陽社
- 山下峰司 1995「4. 灰釉陶器・山茶碗」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 山本悦世 1993「吉備系土師器碗の成立と展開」『鹿田遺跡3』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第6冊、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 山本信夫 2000『大宰府条坊跡 XV - 陶磁器分類編 -』太宰府市の文化財第49集、太宰府市教育委員会

## 第4章 宮ノ浦遺跡出土貝類について

### 1. はじめに

宮ノ浦遺跡ではこれまで各時代の遺構や包含層から貝類が出土し、第5次～第8次調査で出土した貝類については、種類の同定とそれらに対する考察が行われてきた〔山崎2016、黒住2018・2019〕。これまで西部瀬戸内地域では、今治市波方町の江口貝塚での発掘調査で縄文時代の出土貝類に対する詳細な検討が行われ、弥生時代の貝塚の資料についても集成がおよんだ〔宮本1991〕。しかし、古墳時代以降の貝類に関しては、ほとんど検討した例がなかった。その点で宮ノ浦遺跡における調査成果は、西部瀬戸内地域における貝類消費の歴史を語るうえでたいへん重要であり、その研究に先鞭をつけたといえよう。

さて、宮ノ浦遺跡では第10次・第11次調査においてもⅡ区4トレンチで多数の貝類を検出できた。ここではⅡ-4層と2号遺構から出土した貝類について同定した結果を提示し、若干の考察を行いたい。

### 2. 貝類の検討成果

#### (1) Ⅱ-4層

4トレンチではⅡ層全体にわたって貝類の出土がみられた。しかし、Ⅱ-1層から3層にかけて出土した貝はその破碎率が高く、種類の同定が可能なものは少量であった。Ⅱ層上層は槽状遺構をはじめとする各種の遺構が検出されており、人間活動の痕跡を多数残している。このことがⅡ層の1～3層における貝類の破碎率の原因とみられる。

Ⅱ-4層出土貝類の種類と構成については表1のとおりである。

今回調査を行ったⅡ-4層では、スガイが24.19%ときわめて卓越しており、アサリ（15.32%）、レイシガイ（11.69%）というように後続する。またマガキが少ないという点も指摘できる。第7次・第8次調査におけるⅡ区5トレンチでも、スガイが卓越し、その他はレイシガイ・イシダタミ等が目立ち、マガキが非常に少ないという結果が示されており〔黒住2019〕、今回のⅡ-4層の結果と非常に類似している。このような類似点の一方で、5トレンチで多く出土したコシダカガンガラはⅡ-4層ではみられないという相違点もある。

#### (2) 2号遺構

2号遺構出土貝類の種類と構成については表2のとおりである。

2号遺構の貝類については、スガイが45.92%と卓越する点はⅡ-4層や5トレンチと同じであるが、レイシガイ（10.54%）、イシダタミガイ（4.77%）と後続する貝の種類が異なっている。なお、レイシガイは同定標本数に破片を多く含むため、慎重に評価する必要がある。Ⅱ-4層で多かった

## 2. 貝類の検討成果

表1 宮ノ浦遺跡Ⅱ区4トレンチⅡ-4層出土の貝類

|    | 貝 種 名     | 類   | 学 名                                       | 同定<br>標本数 | 構成率     | 生 息 場 所                 |
|----|-----------|-----|-------------------------------------------|-----------|---------|-------------------------|
| 1  | マガキ       | 斧足綱 | <i>Crassostrea gigas</i>                  | 4         | 1.61%   | 内湾／潮間帯中下部／岩礁・転石         |
| 2  | ケガキ       | 斧足綱 | <i>Saccostrea kegaki</i>                  | 1         | 0.40%   | 外海／潮間帯中下部／岩礁・転石         |
| 3  | イタボガキ     | 斧足綱 | <i>Ostrea denselamellosa</i>              | 1         | 0.40%   | 内湾／上部浅海帯／砂礫底            |
| 4  | アサリ       | 斧足綱 | <i>Ruditapes philippinarum</i>            | 38        | 15.32%  | 内湾・外海／潮間帯中下部／砂泥底        |
| 5  | カリガネエガイ   | 斧足綱 | <i>Barbatia virescens</i>                 | 9         | 3.63%   | 潮間帯から浅い海の岩礁             |
| 6  | サルノカシラガイ  | 斧足綱 | <i>Pseudochama retroversa</i>             | 2         | 0.81%   | 外海／潮間帯下部～上部浅海帯／岩礁       |
| 7  | ナミマガシワガイ  | 斧足綱 | <i>Anomia chinensis</i>                   | 3         | 1.21%   | 岩礁域。岩や小石、貝殻などに付着        |
| 8  | キクザルガイ科   | 斧足綱 | <i>Chamidae</i>                           | 3         | 1.21%   | 外海／潮間帯下部～上部浅海帯／砂泥底      |
| 9  | ユキノカサガイ科？ | 斧足綱 | <i>Patellidae</i>                         | 2         | 0.81%   | 潮間帯下の岩礁                 |
| 10 | サザエ蓋      | 腹足綱 | <i>Turbo "sazae"</i>                      | 6         | 2.42%   | 外海／潮下帯／岩礁+食用持ち込み        |
| 11 | アカニシ      | 腹足綱 | <i>Rapana venosa</i>                      | 3         | 1.21%   | 内湾・外海／潮間帯下部～上部浅海帯／砂泥底   |
| 12 | イシダタミガイ   | 腹足綱 | <i>onodonta labio</i>                     | 18        | 7.26%   | 内湾・外海／潮間帯中部／岩礁・転石       |
| 13 | イボウミナ     | 腹足綱 | <i>Batillaria zonalis</i>                 | 1         | 0.40%   | 内湾／潮間帯中部／泥底             |
| 14 | ウミナ       | 腹足綱 | <i>Batillaria multiformis</i>             | 17        | 6.85%   | 内湾／潮間帯中部／砂泥底            |
| 15 | オオヘビガイ    | 腹足綱 | <i>Serpulorbis imbricatus</i>             | 5         | 2.02%   | 外海／潮間帯中下部／岩礁・転石         |
| 16 | クマノコガイ    | 腹足綱 | <i>Tegula xanthostigma</i>                | 1         | 0.40%   | 外海／潮間帯中部／岩礁・転石          |
| 17 | スガイ       | 腹足綱 | <i>Lunella coreensis</i>                  | 60        | 24.19%  | 内湾・外海／潮間帯中部／岩礁・転石       |
| 18 | ツメタガイ     | 腹足綱 | <i>Glossaulax didyma</i>                  | 3         | 1.21%   | 内湾・外海／潮間帯下部～上部浅海帯／砂泥底   |
| 19 | フトヘナタリガイ  | 腹足綱 | <i>Cerithidea moerchii</i>                | 7         | 2.82%   | 内湾／潮間帯上部／アシ原            |
| 20 | ヘナタリ      | 腹足綱 | <i>Pirenella nipponica</i>                | 4         | 1.61%   | 内湾／潮間帯中部／泥底             |
| 21 | ヘソアキクボガイ  | 腹足綱 | <i>Chlorostoma argyrostoma turbinatum</i> | 2         | 0.81%   | 潮間帯から水深20mの岩礁域          |
| 22 | レイシガイ     | 腹足綱 | <i>Thasis clavigera</i>                   | 29        | 11.69%  | 内湾・外海／潮間帯下部～上部浅海帯／岩礁・転石 |
| 23 | シドロガイ     | 腹足綱 | <i>Strombus vittatus japonicus</i>        | 1         | 0.40%   | 潮間帯下部から水深50メートルの砂地      |
|    | カキ類       | 斧足綱 |                                           | 8         | 3.23%   |                         |
|    | サザエか？（巻貝） |     |                                           | 4         | 1.61%   |                         |
|    | 大型巻貝の破片   |     |                                           | 4         | 1.61%   |                         |
|    | 不明        |     |                                           | 12        | 4.84%   |                         |
|    |           |     | 合 計                                       | 248       | 100.00% |                         |

アサリは極端に減少している。一方、イガイ（2.78%）、イタヤガイ（0.40%）、ウチヤマタマツバキ（0.40%）、ナガニシ（0.20%）など、Ⅱ-4層にはみられなかった貝が少なからず存在する点には注意が必要である。また、ハマグリはほとんどが完形で出土し、殻長の平均は約5.7cmと大型であった。第6次・第7次発掘調査報告で黒住耐二氏が提示した表には貝類の生息場所が示されている〔黒住2018〕。生息場所を考慮した場合、殻軸を遺す大型アカニシを含めて、イガイ、ウチヤマタマツバキ、ナガニシ、そしてサザエ、イタヤガイは普通の潮干狩り等では得られない種類であることを黒住氏から直接ご教示いただいた。Ⅱ-4層出土貝類と比較した場合、2号遺構出土貝には日常的に消費される貝とはやや異なる様相があると指摘できよう。

表2 宮ノ浦遺跡Ⅱ区4トレンチ2号遺構出土の貝類

|    | 貝 種 名      | 類   | 学 名                                       | 同定<br>標本数 | 構成率     | 生 息 場 所                 |
|----|------------|-----|-------------------------------------------|-----------|---------|-------------------------|
| 24 | マガキ        | 斧足綱 | <i>Crassostrea gigas</i>                  | 4         | 0.80%   | 内湾／潮間帯中下部／岩礁・転石         |
| 25 | アサリ        | 斧足綱 | <i>Ruditapes philippinarum</i>            | 13        | 2.58%   | 内湾・外海／潮間帯中下部／砂泥底        |
| 26 | ハマグリ       | 斧足綱 | <i>Meretrix lusoria</i>                   | 5         | 0.99%   | 内湾／潮間帯下部～上部浅海帯／砂泥底      |
| 27 | オニアサリ      | 斧足綱 | <i>Protothaca jedoensis</i>               | 2         | 0.40%   | 潮間帯から水深20メートルの小石混じりの砂地  |
| 28 | オキシジミ      | 斧足綱 | <i>Cyclina sinensis</i>                   | 3         | 0.60%   | 内湾／潮間帯中下部／泥底            |
| 29 | イガイ        | 斧足綱 | <i>Mytilus coruscus</i>                   | 14        | 2.78%   | 外海／潮間帯下部～上部浅海帯／岩礁・転石    |
| 30 | イタヤガイ      | 斧足綱 | <i>Pecten albicans</i>                    | 2         | 0.40%   | 水深10～100メートルの砂地         |
| 31 | サザエ        | 腹足綱 | <i>Turbo "sazae"</i>                      | 3         | 0.60%   | 外海／潮下帯／岩礁＋食用持ち込み        |
| 32 | アカニシ       | 腹足綱 | <i>Rapana venosa</i>                      | 7         | 1.39%   | 内湾・外海／潮間帯下部～上部浅海帯／砂泥底   |
| 33 | インダタミガイ    | 腹足綱 | <i>Monodonta confusa</i>                  | 24        | 4.77%   | 内湾・外海／潮間帯中部／岩礁・転石       |
| 34 | ホソウミニナ     | 腹足綱 | <i>Batillaria cumingii</i>                | 3         | 0.60%   | 外海に面する干潟・岩の間の泥底         |
| 35 | ウミニナ       | 腹足綱 | <i>Batillaria multiformis</i>             | 4         | 0.80%   | 内湾／潮間帯中部／砂泥底            |
| 36 | スガイ        | 腹足綱 | <i>Lunella coreensis</i>                  | 231       | 45.92%  | 内湾・外海／潮間帯中部／岩礁・転石       |
| 37 | フトヘナタリガイ   | 腹足綱 | <i>Cerithidea moerchii</i>                | 4         | 0.80%   | 内湾／潮間帯上部／アシ原            |
| 38 | ヘソアキクボガイ   | 腹足綱 | <i>Chlorostoma argyrostoma turbinatum</i> | 20        | 3.98%   | 潮間帯から水深20mの岩礁域          |
| 39 | レイシガイ      | 腹足綱 | <i>Thasis clavigera</i>                   | 53        | 10.54%  | 内湾・外海／潮間帯下部～上部浅海帯／岩礁・転石 |
| 40 | ウチャマタマツバキ  | 腹足綱 | <i>Polinices sagamiensis</i>              | 2         | 0.40%   | 外海／上部浅海帯／砂泥底            |
| 41 | キクスズメ      | 腹足綱 | <i>Sabia conica</i>                       | 5         | 0.99%   | 潮間帯～潮下帯の腹足目の貝殻の上        |
| 42 | ナガニシ       | 腹足綱 | <i>Mytilus coruscus</i>                   | 1         | 0.20%   | 水深の浅い砂泥地                |
|    | サザエ蓋       | 腹足綱 |                                           | 9         | 1.79%   | 外海／潮下帯／岩礁＋食用持ち込み        |
|    | カキ類        | 斧足綱 |                                           | 17        | 3.38%   |                         |
|    | 不明（巻貝角柱など） |     |                                           | 77        | 15.31%  |                         |
|    |            |     | 合 計                                       | 503       | 100.00% |                         |

### 3. 結 論

宮ノ浦遺跡の第10次・第11次調査において出土した貝類の種類同定を行い、その構成を検討した。その結果、4トレンチⅡ－4層から出土した貝類は、隣接する5トレンチにおける貝の構成と近似することがわかり、これが中世のこの遺跡における通常の組成であると解釈した。これに対し、4トレンチ2号遺構出土の貝類は、それとはやや異なり、大型アカニシ、イガイ、ナガニシ、ウチャマタマツバキ、サザエ、イタヤガイなど普通の潮干狩り等では得られない種類が含まれていることがわかった。地域は異なるが、南西諸島の宮古島では政治の中心地であった平良遺跡の住屋地区〔黒住1999〕や沖縄本島の今帰仁城における特定貝（チョウセンサザエ、シャコガイなど）が普段とは異なる大規模会食の廃棄物と考えられている〔黒住2014〕。普段とは異なる貝種という点で、2号遺構の出土貝類もこの地域における普段の食事ではなく、特別な食事に供されたものと考えられまいだろうか。

3. 結論

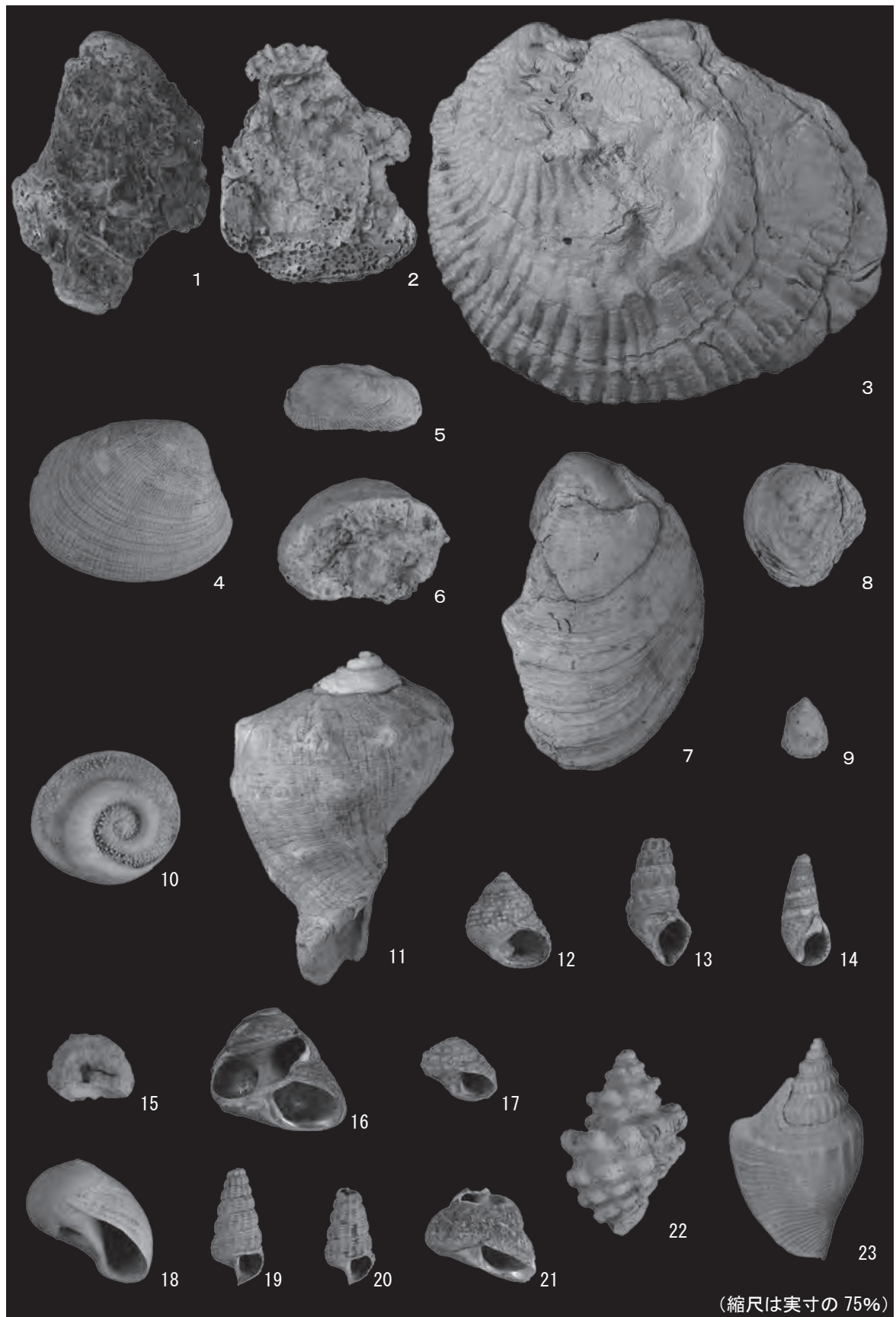


写真3 宮ノ浦遺跡Ⅱ区4トレンチⅡ-4層出土貝類

鈴木康之氏は、古代における儀礼的な共同飲食について論じ〔鈴木2011〕、宮ノ浦遺跡における古代の黒色土器、緑釉・灰釉陶器あるいは越州窯系青磁にもそれとの関連を述べている〔鈴木2020〕。10世紀頃には国衙・郡衙に連なる勢力がこの浜を訪れ、塩や海産物などの貢納に関する何らかの契約儀礼が行われ、その後、荘園成立期以降の11世紀～12世紀、12世紀後半～13世紀初頭には、その儀礼が荘園領主に連なる勢力にも受け継がれたとみている〔鈴木2020〕。2号遺構でみられた廃棄された大量の土器もその飲食儀礼と関わるものであろう。宮ノ浦遺跡の2号遺構における貝類の検討から、中世における貝と儀礼的飲食の関係について新たな成果を得ることができた。

(福本佳織)

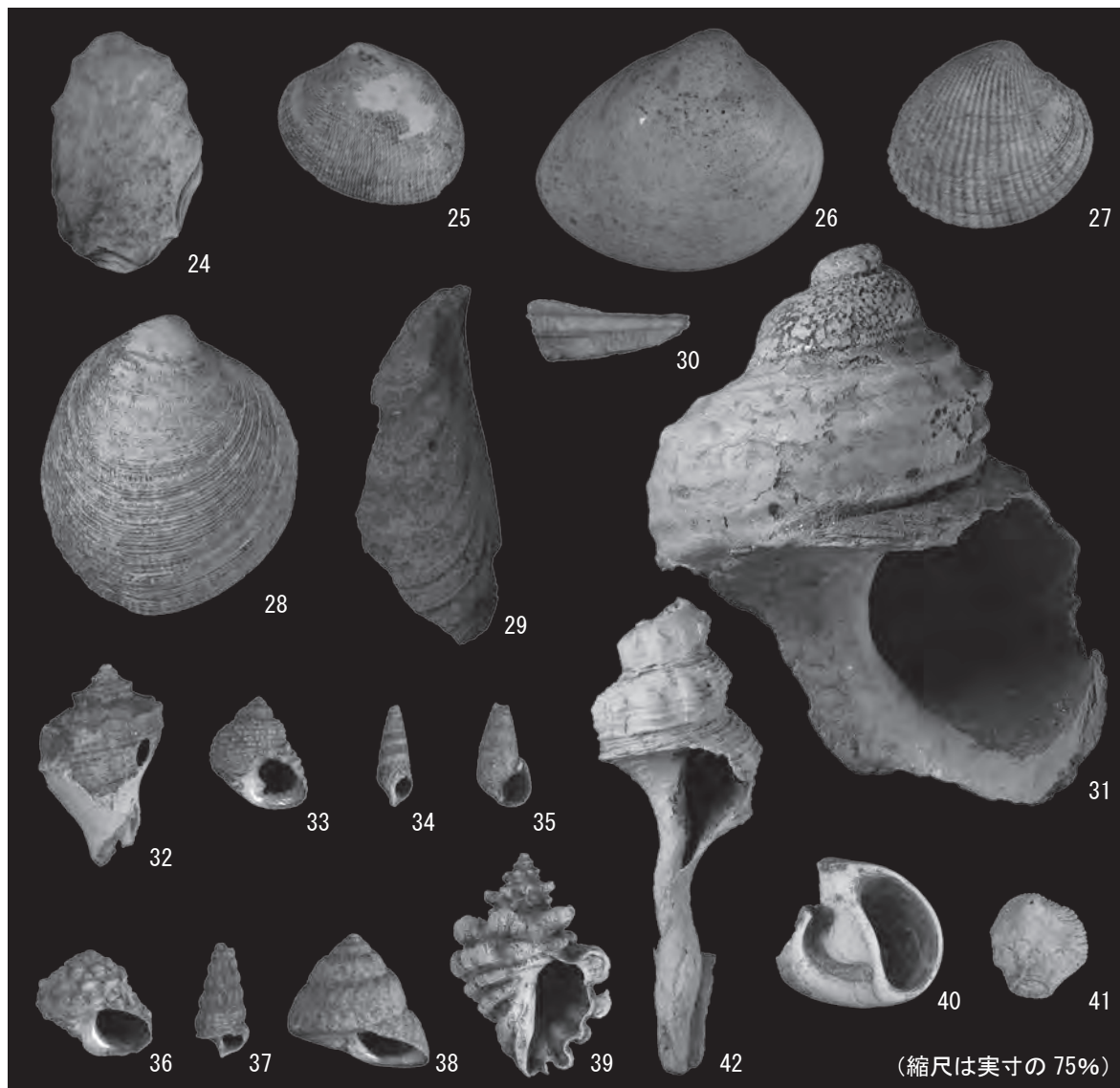


写真4 宮ノ浦遺跡Ⅱ区4トレンチ2号遺構出土貝類

### 3. 結論

#### 謝 辞

本文をまとめるにあたり、山崎純男先生、黒住耐二先生から多くのご教示をいただきました。末筆ながら感謝の意を申し上げます。

#### 【参考文献】

- 黒住耐二 1999「貝類遺存体」『住屋遺跡（Ⅰ）』平良市埋蔵文化財調査報告書第4集、平良市教育委員会
- 黒住耐二 2014「貝類遺体からみた沖縄諸島の環境変化と文化変化」『琉球列島先史・原史時代における環境と文化の変遷に関する実証的研究 研究論文集』六一書房
- 黒住耐二 2018「貝類遺体からみた宮ノ浦遺跡－第6・7次発掘調査－」『愛媛県越智郡上島町宮ノ浦遺跡Ⅲ－第6次・第7次発掘調査報告－』愛媛県越智郡上島町教育委員会
- 黒住耐二 2019「貝類遺体からみた宮ノ浦遺跡－第7次・第8次発掘調査Ⅱ区堆積物サンプル資料－」『愛媛県越智郡上島町宮ノ浦遺跡Ⅳ－第8次発掘調査報告－』愛媛県越智郡上島町教育委員会
- 鈴木康之 2011「日本中世の宴会と土器」『家具道具室内史』第3号、家具道具室内史学会
- 鈴木康之 2020「宮ノ浦遺跡における古代末～中世初頭の出土資料について」『東寺領荘園（新見荘・弓削島荘）の考古学的基礎研究』2016年度～2019年度科学研究費補助金基盤研究（B）研究成果報告書、愛媛大学アジア古代産業考古学研究センター
- 宮本一夫 1991「江口貝塚第1次調査の成果と課題」『江口貝塚第1次調査』愛媛大学法文学部考古学研究報告第1冊、愛媛大学法文学部考古学研究室
- 山崎純男 2016「宮ノ浦製塩遺跡出土の貝類について」『愛媛県越智郡上島町宮ノ浦遺跡Ⅱ－第1次～第5次発掘調査報告－』愛媛県越智郡上島町教育委員会

## 第5章 成果と課題

**縄文土器とその包含層の形成** 第9次調査の5トレンチ南東隅で発見された縄文土器包含層の広がり、第10次調査で再設定した東の4トレンチにおいて確認することができた。1×2mの先行トレンチの中で、縄文時代の包含層が2層あることがわかり、ローリングを受けた小片が多いⅣ－1層と撚糸文土器片を含むⅣ－2層に分層された。第11次調査では、4トレンチを広く調査し、また先行トレンチで遺物の分布が南にのびるという確信から、南に17トレンチを設けて発掘を開始した。東壁沿いの2号遺構を保存するために調査面積が狭まった4トレンチでは、Ⅳ－2層中での遺物出土量はさほどなく、撚糸文土器や条痕文土器も5トレンチほどには出土せず、出土した土器片も小さかった。新たな所見は、本層の上面で、彦崎Ⅱ式土器や打製石鏃を含む遺物群が面的に分布することであり、Ⅳ－2層上面として分離して遺物を取りあげることができた。またⅣ－1層から2層におよぶ自然流路が発見され、そのなかから里木Ⅱ式や沈線文土器が出土し、自然流路の年代も中期末葉と押さえることができる。

Ⅳ層は花崗岩が風化してできた真砂土を主体とし、Ⅳ－1層はその色調と粘性から土壌化していることがわかる。その土壌化は2層でもわずかに認められるが、3層以下では粒度が大きくなり、最下層では固結層に達した。湧水のために確認できなかったが、東の元見山でみられるような花崗岩の岩体に近くなるものとみられる。このように浜堤下に埋没丘陵があることがほぼ確実となった。2022年度は元見山の西麓からⅡ区西端にかけてボーリング調査（サウンディング法）を実施する予定であり、埋没丘陵の様態に関してもさらなる検討を進めたい。

ただし、埋没丘陵での縄文時代の包含層形成は単純ではなく、また形成後の遺存・淘汰も複雑であったと考えられる。Ⅳ－2層中の縄文土器片は、4トレンチよりも5トレンチでの出土が多く、密度も高く、一定レベルで検出された。4トレンチでも東側ではほとんど出土しなかった。これに対し、Ⅳ－2層上面の土器片は、4トレンチ南西部で面的に集中して検出された。このことは各時期の遺物が集中域を違って分布している可能性が高い。Ⅳ－1、2層が南に向けて厚くなることから、すでにⅢ層まで掘り下げた17トレンチでの包含層調査も重要であるが、撚糸文や条痕文の集中域は5トレンチよりも想定されるため、調査方法も再検討する必要がある。

さて、第10次・第11次調査で、複数の時期にわたる縄文土器が発見されたことはたいへん重要である。とりわけ撚糸文土器は、第9次調査出土品にはみられなかった特徴が認められ注目される。この二次の調査で出土した撚糸文土器には厚手で、焼成温度が低く、撚糸文を密に施し、刺突文も伴う口縁部（図9－1）がある。第9次調査出土の撚糸文土器は、薄く、硬質で、撚糸文の間隔が広がった。この二相が時期差を示すとすれば、Ⅳ－2層中の調査もさらに精度を上げる必要があろう。

（村上恭通）

**脚台式製塩土器とその時期** 第11次調査の17トレンチにおける脚台式製塩土器の出土は本書で報告したとおりである。主として西壁沿いに設定した先行トレンチで、Ⅱ－4層とⅢ層上面から口縁部片が4点、脚台部片が15点出土した。特に、Ⅲ層上面では体部下半の形状を推測させるやや大型の破片も検出されている（図20－135）。これらの脚台端部径は平均2.6cmと小さく、器壁も薄い。したがって、柴田昌児氏の芸予諸島周辺地域の製塩土器編年の芸予Ⅲ－3類〔柴田2015〕と考えられる。

宮ノ浦遺跡の調査では、脚台式製塩土器の年代決定が重要課題とされており、既往の調査でも、脚台式製塩土器と古式土師器の共伴関係は注目されてきた〔柳本・大山2016〕。今回の調査でも製塩土器に伴って古式土師器が出土している。それらの年代は布留2式を中心とする前後の段階が想定されている。Ⅱ－4層とⅢ層で検出された古式土師器は5点であり、そのうち図11－34～36の3点は時期の検討が可能である。Ⅱ－4層出土の34は甕の口縁部であり、口縁部の形状に加えて器壁が0.9cmと厚いことから、布留4式以降と考えられる。Ⅲ層出土の35は小形丸底鉢の口縁部である。内外面ともにミガキが丁寧に施されて精製されており、布留0式以前に比定される。36は高坏の脚柱部である。脚柱が小型であり、脚柱内部に粘土を充填した付加法が認められることから、布留1～2式の範疇と考えられる。その他、Ⅲ層からは31と33が出土しており、在地甕の口縁部と考えられ、型式の比定は容易ではない。しかしながら、内湾する口縁部は布留1～2式の形状に近似しており、36の高坏が共伴していることから、年代は布留1～2式と考えるのが妥当だろう。したがって、Ⅲ層の古式土師器の年代は布留0～2式の範疇におさまるものとみられる。

しかし、宮ノ浦遺跡Ⅰ区における調査では、6トレンチⅣ層、15トレンチⅦa層、18トレンチSK10において、豊富な量の土器が出土しており、そのなかで芸予Ⅲ－2類と布留2式の共伴は確実である。特に18トレンチSK10の遺物は一括性が高い。その点、第11次調査で出土した土器は同じ層位から出土しているものの、製作時期と埋没時期が同じと判断する証拠としては、質的にも、数的にもあまりにも脆弱な資料といわざるをえない。したがって、芸予Ⅲ－3類製塩土器に確実に伴う土師器の型式を確定するには慎重な検討が必要である。そのためには、第11次調査で発掘ができなかった17トレンチのⅢ層の精査を来年度実施し、確証を得たい。

（古江七海）

**中世の槽状遺構について** 4トレンチではⅡ層上面で、切り合い関係をもつ2号、3号遺構という2基の槽状遺構が検出された（図7・8）。2基とも掘り方に粘土とシルトが混在した粘質土あるいはシルト質土を部分的に下塗りした後、土坑の壁面や底面に対して丹念に粘土を貼り、さらに粘土の表面には亜円礫、円礫を貼り付けるという工程で構築されている。遺構の年代については、2号遺構は12世紀中葉ごろであり、3号遺構も出土土器から2号よりも大きく遡るものではない。

第9次調査では、Ⅱ区の10トレンチ、15トレンチで粘土貼りの槽状遺構が検出されており、遺構の年代は4トレンチの2号、3号遺構とほぼ同時期である。これらの遺構について、16世紀代の三重県池ノ上遺跡、小狐遺跡〔増田・浜口編1993〕の「粘土坑」と称される類例と比較し、槽状遺構

の性格を製塩のための鹹水槽と結論付けられた〔村上2021〕。そして、同じ層位から検出された14トレンチのその他の粘土貼り土坑や焼土、16トレンチの土坑群が槽状遺構と合わせて製塩に関わる一つの遺構群を構成するものと想定されている。今回4トレンチで検出された2基の槽状遺構もその構造から鹹水槽と評価できるであろう。ただし、これらには新旧2段階あり、やや距離の離れた位置にある10トレンチ、15トレンチの遺構群と同時期に操業されていたのかも現状では判断ができない。短期間における操業空間の移動といった状況も想定しておく必要がある。

一方、構造や構築法という点について、4トレンチの槽状遺構の内壁や底面に礫を貼り付けるという技法はこれまで未確認である。先述した池ノ上遺跡では、内部から礫が検出された鹹水槽が10基以上検出されている。礫は100～200mmの亜角礫、亜円礫、円礫である。この遺跡の鹹水槽の断面図によれば、遺構覆土の上部に亜角礫、亜円礫を多量含んでいる例が多いものの、底面に貼られた粘土の上面にも少量の礫が観察できる。粘土上面の礫は、その大きさ、形から4トレンチの槽状遺構の礫と同様に、構築材の可能性も考えられよう。広島県廿日市市の廿日市町屋跡では、近世末の大型鹹水槽が発掘されており、内貼りされた粘土の表面には玉砂利状の円礫が密に貼り付けられていた<sup>(1)</sup>。礫を内壁にもつ鹹水槽は、現在のところ宮ノ浦遺跡の発見例が最古と考えられるが、その発生と展開、そして機能性について今後も検討せねばならない。

(馬 赤嬰)

**槽状遺構（2号遺構）の出土遺物** 4トレンチ2号遺構から土師質土器小皿、杯、鍋、移動式カマド、須恵器椀、和泉型瓦器椀が出土した（図12～14）。本遺構の最大の特徴は、和泉Ⅱ－2期〔橋本2018〕の和泉型瓦器椀を多数含むことであり、一括性が高く、時期的にも幅がなく絞られる点にある。それらは完形もしくはそれに近い形で出土し、土師質土器小皿、杯、鍋、移動式カマドなどよりも出土点数が多い。備後では、管見の限り、当該期の良い一括資料が乏しく、対比すべき資料をみいだすのが困難である。一方、伊予には今治市八町1号遺跡や同馬越遺跡で良好な一括資料がある〔中野編1995、小野編2001〕。伊予への和泉型瓦器椀の大量搬入は12世紀末～13世紀初頭頃と指摘されており〔山内2005、2006〕、八町1号遺跡では和泉Ⅱ－2期に比定される和泉型瓦器椀の出土が多い。しかしながら、宮ノ浦遺跡の本遺構における和泉型瓦器椀の出土点数はそれをはるかに凌駕している。宮ノ浦遺跡では、これまで楠葉型瓦器椀や畿内産黒色土器B類椀なども豊富であり、畿内との交流関係が強いことが改めて指摘される。

また、本遺構から出土した土師質土器の小皿と杯は、当該期の伊予における在地土器の形態および特徴とは異なる。瀬戸内海に面した今治平野では、それらの底部の切り離し技法は回転糸切りであり、回転ヘラ切りはごくわずかしみられず、小皿の口径は9.0cm前後、杯は15.0cmを呈するものが大半である〔青木2021〕。一方で、備後を含む吉備地域での底部の切り離し技法は回転糸切りではなく、回転ヘラ切りである。2号遺構出土の土師質土器は、いずれも底部の切り離し技法が回転ヘラ切りであり、小皿、杯ともに今治平野出土資料よりも法量が小さい。そのため、伊予ではなく、備後をはじめとした吉備地域に淵源をもつ土器である可能性が高い。宮ノ浦遺跡では、過去の調査

で山本編年Ⅰ－Ⅱ期〔山本悦1993〕に位置付けられる吉備型土師質土器碗が出土しており、少なくとも11世紀後半には吉備地域との交流がはじまっていたことが判明している。2号遺構では吉備型土師質土器碗そのものは出土していないが、吉備地域由来と考えられる土師質土器の小皿、杯は、宮ノ浦遺跡と近畿との関係についての仲介的な吉備のあり方を示唆している。

宮ノ浦遺跡が位置する佐島は、保元3（1158）年に石清水八幡宮の荘園領として文書に記されている。2号遺構出土土器群は12世紀中葉とまさにその時期に位置付けられ、荘園成立期の資料として評価できるだけでなく、当該期における上島諸島や芸予諸島の地域社会を考えるうえできわめて重要な資料である。今後は鈴木康之氏が指摘しているように、石清水八幡宮との関係や国衙、中央権門との結びつき、塩生産との関わりについて検証していく必要がある〔鈴木2020〕。

（青木聡志）

**中世の鉄素材と鉄器生産** 宮ノ浦遺跡の鉄器生産については、第6次・第7次調査のⅠ区27トレンチとN15・N16グリッドにおいて古代・中世の鞆羽口、鍛冶滓と鉄製品が出土したことから議論が始まった〔村上2018〕。さらに第8次調査では、その下層から鞆羽口の先端部片が古式土師器群とともに出土し、当遺跡の鉄器生産が古墳時代前期にまで遡ることが判明した〔村上2019〕。第9次調査では、Ⅱ区でも古代・中世の鍛冶滓、鍛造剥片などが出土し〔有馬・青木編2021〕、両区で鉄器生産が行われていたことが明らかとなった。

そして第10次・第11次調査では、上述のような鉄器生産関連遺物だけでなく、塊状鉄製品2点と板状鉄製品3点が出土した（図17）。この塊状鉄製品は、一般的な鉄製品にはみられないような厚みを持ち、その表裏面に鍛打で生じたとみられるわずかな凹みが観察されることから、鉄素材そのものか、あるいは鍛延が始まった直後の鉄素材の姿をのこしているものと評価される。また板状鉄製品は塊状鉄製品と比較して薄くなっているものの、一般的な鉄製品に比べれば厚い。板状鉄製品は平板であり、またその厚みに違いがあることからすると、塊状鉄製品を素材として、鍛延されて徐々に薄くなっていくプロセスを示すものと解釈できる。

塊状鉄製品から想定される鉄素材の形態は、弧状の外周をのこす図17-124からすると小判形が想定され、あるいは石鹼形までは推測が許されよう。中世における鉄素材の形態については、これまでも多々議論されており、棒状鉄製品がその代表的な例である〔桃崎2008〕。ただし、棒状鉄製品は理想的な素材ではあるが、変形されていれば素材ではないし、焼き入れ等の熱処理が行われていればさらにその素材としての意味を失う。棒状鉄製品であれば、近世以降の庖丁鉄のような鉄素材が中世にまで遡るのかどうか注目される。いずれにせよ、宮ノ浦遺跡で発見された塊状鉄器は中世の鉄素材の一形態として評価できよう。

宮ノ浦遺跡Ⅰ区N15グリッドでは、鞆羽口、鍛冶滓に加え、大量の鍛造剥片や粒状滓が検出されている。鍛冶滓の噛み込み木炭を資料として行われた年代測定の結果、奈良～平安時代の年代（calAD 779～984）が得られた〔大澤・パリノ・サーヴェイ2021〕。古代の海浜遺跡における鉄器生産とその背景については、これまでも論じられているが〔村上1993、1998、田代・水野1999〕、

宮ノ浦遺跡も数少ない瀬戸内地域の例として数を加えたこととなる。そして中世にも重厚な鉄素材の供給を得て、鉄器生産が行われていたことが明らかになった。今後は塊状鉄製品の金属学的分析を通じて、その性質と供給地を検討し、生産物が何であったのかを明らかにし、また何よりも遺跡内で鍛冶遺構が発見されることを期待したい。

(鄭 宗鎬)

**弓削島荘遺跡の史跡指定と宮ノ浦遺跡** 現在、上島町では保存目的調査として、弓削島荘遺跡と宮ノ浦遺跡の調査を実施している。平成23年度から実施している宮ノ浦遺跡の発掘調査では、古墳時代前期（3～4世紀頃）の多量の製塩土器および製塩炉が確認され、また中世の塩田に関連する遺構が検出されている。この製塩遺跡としての側面をもつ佐島の宮ノ浦遺跡の調査がその北東に位置する弓削島での塩田（塩浜）調査の端緒となった。

さらに、平成27年10月に国宝「東寺百合文書」が世界の記憶（ユネスコ記憶遺産）に登録されたことを受けて、「東寺百合文書」に記録されている弓削島荘の実態を明らかにするために、平成28年度から令和2年度にかけて弓削島全域およびその周辺地域を対象とした弓削島荘総合調査事業が実施された。この総合調査の成果に基づき、令和3年10月11日付け官報告示（官報号外第230号、文部科学省告示第164号）により、「弓削島荘遺跡」が正式に国の史跡に指定された。平安時代後期から室町時代まで存続した荘園遺跡である弓削島荘遺跡は、7つの史跡指定地で構成されている。荘園に関わる東泉寺、高浜八幡神社、願成寺、弓削神社、定光寺、揚浜式塩田であったと考えられる大田林の塩浜、および弓削島の北東に位置し漁業が行われた百貫島とその周辺海域が国史跡に指定された。本遺跡は、文書にみられる塩浜、寺社などの荘園時代の痕跡が今も遺存しており、中世の荘園の具体的様相を知る上で稀有な事例である。また、瀬戸内海における中世の製塩業の実態や、瀬戸内海の海上交通を知る上でも重要と評価され、史跡の指定にいたった。

史跡弓削島荘遺跡を構成する史跡指定地は製塩遺跡、寺社、漁業の場としての網場遺跡であり、その種別も多様である。このように広範囲に分布する多様な遺跡を適切に保存活用していくために、現在、上島町は史跡保存活用計画の策定をまさにはじめようとしている。

当然のことであるが、史跡のあり方は弓削島荘遺跡のみで解釈できるものではなく、宮ノ浦遺跡を含めた周辺の関連遺跡や歴史文化資源等にも目を向ける必要がある。宮ノ浦遺跡の調査成果は史跡弓削島荘遺跡のあり方にも大きな影響を与えるものであり、その重要性は増している。史跡指定後も弓削島荘遺跡の保存目的調査を継続しているが、宮ノ浦遺跡の縄文時代から中世までの豊富な考古学的な成果は、この地域の「東寺百合文書」の時代のみならず、それ以前の時代も生き活きと叙述してくれている。このことは、瀬戸内における宮ノ浦遺跡の地域にとっての大きな意義と呼べるであろう。

(有馬啓介)

**まとめ** 以上、2020年、2021年の8月に実施した宮ノ浦遺跡の第10次・第11次発掘調査の成果と課題について述べてきた。Ⅱ区での調査は第7次から開始されたため、五次にわたる発掘で、縄文時代、古墳時代、古代～中世の遺構または包含層を対象として取り組んできたこととなる。縄文時代と古墳時代の包含層はまだ調査面積がわずかであり、本報告書で示した課題に第12次調査以降も確実に取り組むことになる。一方、中世の遺構については、第9次調査での所見を追認し、さらに新たな所見を得ることができた。

本総括において馬赤嬰は、4トレンチで検出された鹹水槽と考えられる槽状遺構について、その構造についてまとめた。2基のうち、2号遺構は鹹水槽としての機能を終えたあと、遺棄され、その内部に完存度の高い和泉型瓦器碗を主体とする土器が大量に流入していた。青木聡志が論じたように、環瀬戸内では類のない一括遺物であり、これまでに出土した楠葉型瓦器碗や畿内産黑色土器B類碗などの豊富さと併せて、畿内との交流関係が強いことを指摘した。さらに第4章で福本佳織は、この土器群に共伴した大型アカニシ、イガイ、ナガニシ、ウチヤマタマツバキ、サザエ、イタヤガイなどが、普通の潮干狩り等では得られない種類であり、特別な食事に供されたものと評価した。特別な食材を料理し、豊富な畿内系土器で食事を振る舞う風景は、まさに鈴木康之氏が指摘した飲食儀礼を彷彿とさせる〔鈴木2020〕。鈴木氏は、10世紀頃には国衙・郡衙に連なる勢力がこの浜を訪れ、塩や海産物などの貢納に関する何らかの契約儀礼が行われ、その後、荘園成立期以降の11世紀～12世紀、12世紀後半～13世紀初頭には、その儀礼が荘園領主に連なる勢力にも受け継がれたと指摘している。石清水八幡宮に塩を貢納した荘園が佐島に置かれたことは周知されており、宮ノ浦遺跡がその荘園の遺跡である蓋然性がきわめて高くなったといえよう。もとより佐島は、陸が直接海に没する海岸が多く、塩田とその関連施設、そして役所関連の建物を造営しうる平坦地は、この宮ノ浦遺跡と福良湾に面した地域しかない。その意味では、今後、福良地区を対象とした調査を行い、その蓋然性を高めるという積極的な調査もあり得るであろう。

有馬啓介の総括にあるように、折しも2021（令和3）年10月に「弓削島荘遺跡」が正式に国の史跡に指定された。弓削島荘は東寺に塩を貢納した荘園であり、高浜八幡神社、大田林では揚浜式塩田のものと思われる塩浜の浜床が発見されている。宮ノ浦遺跡Ⅱ区では、製塩関連施設は明らかになりつつあるものの、それにともなう塩田は検出されていない。塩田があるとすれば、鹹水槽や塩釜に関連すると推測される焼土の分布する区域から、南の海岸寄りにその位置が想定されるが、そこには宅地や道路があって調査は困難であろう。今は、塩田は弓削島で、関連施設は佐島の宮ノ浦遺跡で解明に努め、その成果を補いながら、塩の荘園の構造を明らかにすることが一つの方策といえよう。宮ノ浦遺跡は立荘前夜にあたる古代後半の遺物が豊富であり、弓削島荘の前史を予察するうえでも指針ともなる。

さて、新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けて、第10次・第11次調査は学生の参加が大きな制約を受けた。のみならず、発掘後に行う遺物の整理作業も報告書の製作作業も、大学に自由な出入りができない学生は例年のように進められなかった。調査研究を保証する環境から程遠い劣悪な状況のなかで、限られた時間を最大限に活かしながら、何とか本書の刊行に漕ぎ着けた。ただた

だ新型コロナ感染の終息を祈り、残されたタスクの完遂を誓い、そして次年度以降の宮ノ浦遺跡をめぐる調査研究がさらに進展することを祈念しながら搁筆することとしたい。

(村上恭通)

【註】

(1) 廿日市町屋跡の発掘調査に参加して鹹水槽の調査を担当した村上恭通氏に直接のご教示を得た。

【参考文献】

- 青木聡志 2021「愛媛県における古代～中世の土器編年－今治平野の9世紀から12世紀を中心に－」『紀要愛媛』第17号、公益財団法人愛媛県埋蔵文化財センター
- 有馬啓介・八木宏明編2016『愛媛県越智郡上島町宮ノ浦遺跡Ⅱ－第1次～第5次発掘調査報告－』愛媛県越智郡上島町教育委員会
- 有馬啓介・曾根大地編2020『弓削島庄総合調査報告書』愛媛県越智郡上島町教育委員会
- 有馬啓介・青木聡志編2021『愛媛県越智郡上島町宮ノ浦遺跡Ⅴ－第9次発掘調査報告－』愛媛県越智郡上島町教育委員会
- 大澤正己・パリノ・サーヴェイ株式会社 2021「宮ノ浦遺跡第8次発掘調査Ⅰ区出土鉄滓の分析」『愛媛県越智郡上島町宮ノ浦遺跡Ⅴ－第9次発掘調査報告－』愛媛県越智郡上島町教育委員会
- 小野倫良編2001『馬越遺跡発掘調査報告書』今治市埋蔵文化財調査報告書第58集、今治市教育委員会
- 柴田昌児 2015「瀬戸内海における製塩考古学の現状と課題」『東アジア塩業考古学の提唱』愛媛大学東アジア古代鉄文化研究センター
- 鈴木康之 2020「宮ノ浦遺跡における古代末～中世初頭の出土資料について」『東寺領荘園（新見荘・弓削島荘）の考古学的基礎研究』2016年度～2019年度科学研究費補助金基盤研究（B）研究成果報告書、愛媛大学アジア古代産業考古学研究センター
- 田代弘・水野聡哉 1999「律令期の土器製塩遺跡における鍛冶遺構」『京都府埋蔵文化財情報』第74号、財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 中野良一編1995『八町1号遺跡－2次調査区－』今治市埋蔵文化財調査報告書第22集、今治市教育委員会
- 橋本久和 2018『概論 瓦器碗研究と中世社会』真陽社
- 文化庁監修 文化庁文化財第二課 2021「新指定の文化財－記念物－」『月刊文化財』9月号（696号）、第一法規
- 増田安生・浜口元編1993『池ノ上遺跡・小狐遺跡・西黒部西山遺跡』三重県埋蔵文化財調査報告108－3、三重県埋蔵文化財センター
- 村上恭通 1993「海の中道遺跡の鉄製品－古代の食糧生産・供給基地における鉄器生産－」『海の中道遺跡Ⅱ』朝日新聞社西部本社・海の中道遺跡発掘調査実行委員会
- 村上恭通 1998『倭人と鉄の考古学』青木書店
- 村上恭通 2018「第7章 総括 1. 宮ノ浦遺跡とその時代」『愛媛県越智郡上島町宮ノ浦遺跡Ⅲ－第6次・第7次発掘調査報告－』愛媛県越智郡上島町教育委員会
- 村上恭通 2019「第7章 総括 1. 発掘調査の成果」『愛媛県越智郡上島町宮ノ浦遺跡Ⅳ－第8次発掘調査報告－』愛媛県越智郡上島町教育委員会
- 村上恭通 2021「第5章 総括 1. 発掘調査の成果」『愛媛県越智郡上島町宮ノ浦遺跡Ⅴ－第9次発掘調査報告－』愛媛県越智郡上島町教育委員会
- 桃崎祐輔 2008「中世の棒状鉄素材に関する基礎的研究」『七隈史学』九州中世学の構築特集号、第10号、七隈史学会
- 柳本照男・大山裕矢 2016「第8章 考察 古式土師器について」『愛媛県越智郡上島町宮ノ浦遺跡Ⅱ－第1次～第5次発掘調査報告－』愛媛県越智郡上島町教育委員会
- 山内英樹 2005「四国における瓦器碗の様相－畿内産と在地型の認識－」『第24回中世土器研究会瓦器碗生産の展開』日本

中世土器研究会

山内英樹 2006「四国における瓦器碗の展開」『中近世土器の基礎研究X X』日本中世土器研究会

山本悦世 1993「吉備系土師器碗の成立と展開」『鹿田遺跡3』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第6冊、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

圖 版





1. 宮ノ浦遺跡遠景（北から）



2. 調査前風景（南から）

図版 2



1. 4 トレンチ北壁 (一部)



2. 4 トレンチ南壁 (一部)



3. 4 トレンチ東壁



4. 4 トレンチ西壁



1. 4 トレンチⅡ層上面（南から）



2. 4 トレンチ2号遺構（東から）

図版 4



1. 4トレンチ2号遺構（南西から）



2. 4トレンチ3号遺構（南から）



3. 4トレンチ3号遺構遺物出土状況（西から）



4. 4トレンチ4号遺構（一部、西から）



5. 4トレンチⅡ層鉄塊出土状況（北から）



6. 4トレンチⅣ層上面縄文土器出土状況（北西から）



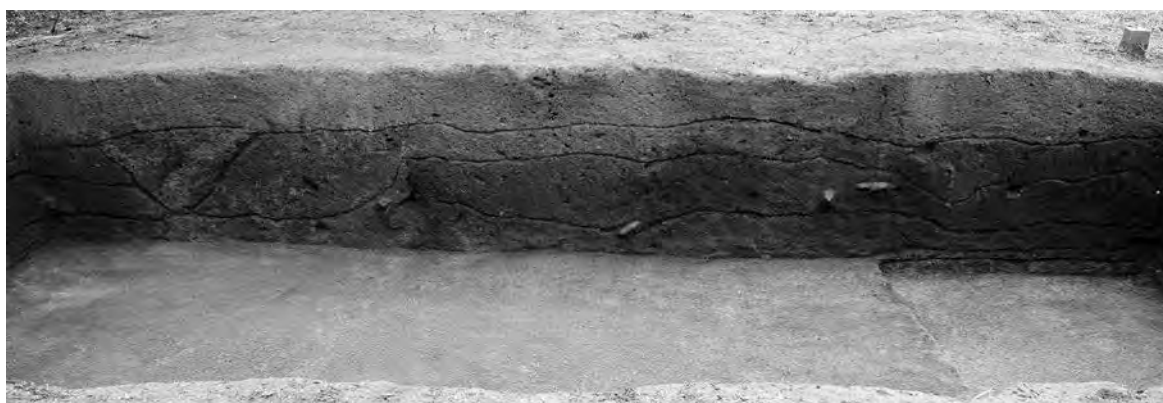
7. 4トレンチ縄文土器・チップ出土状況（西から）



8. 4トレンチ石鏃・チップ出土状況（北から）



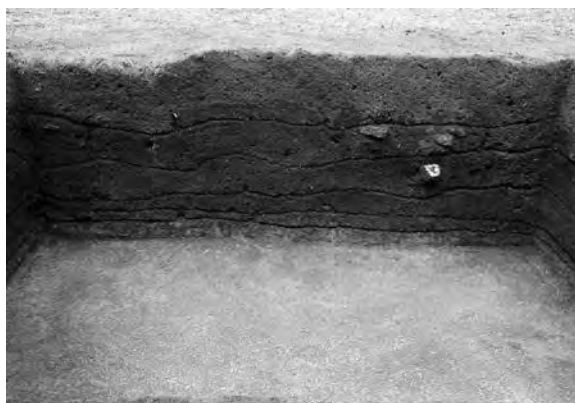
1. 17トレンチ北壁



2. 17トレンチ南壁



3. 4トレンチ東壁・17トレンチ東壁

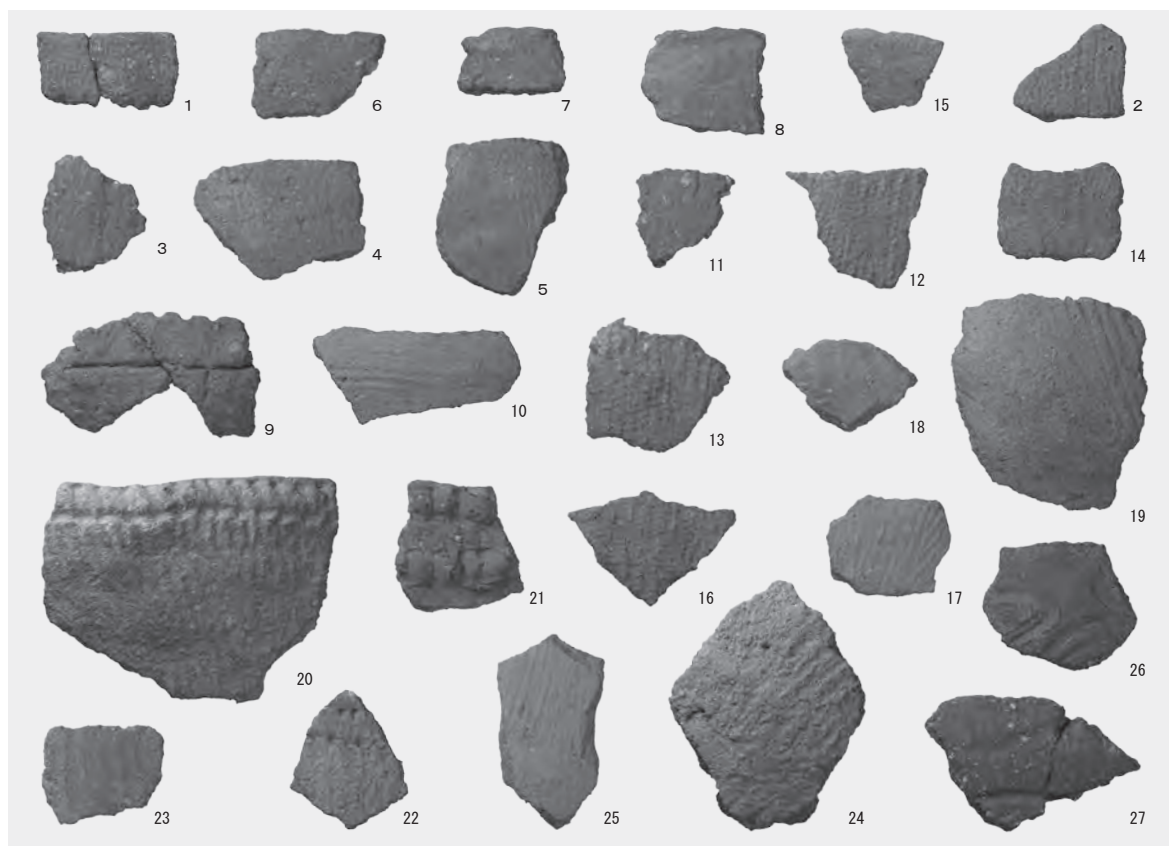


4. 17トレンチ西壁

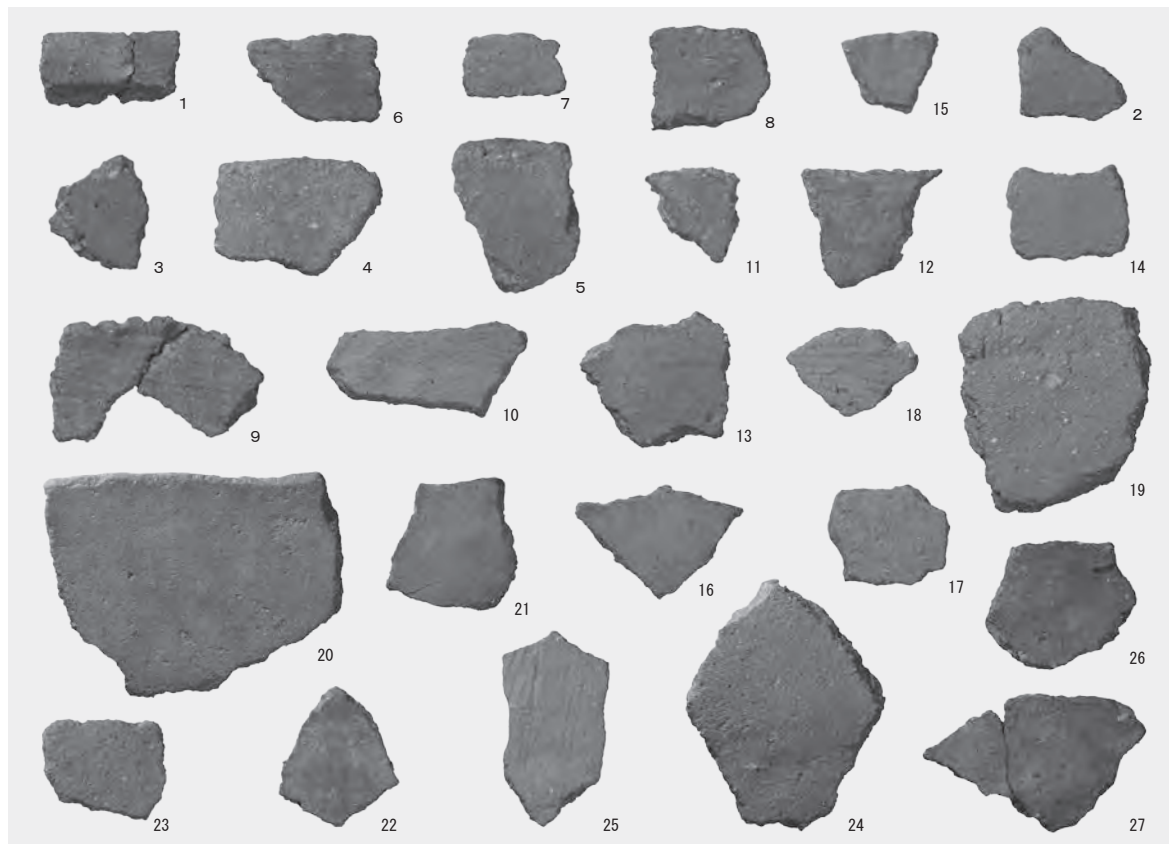


5. 17トレンチⅢ層古式土師器・製塩土器（北から）

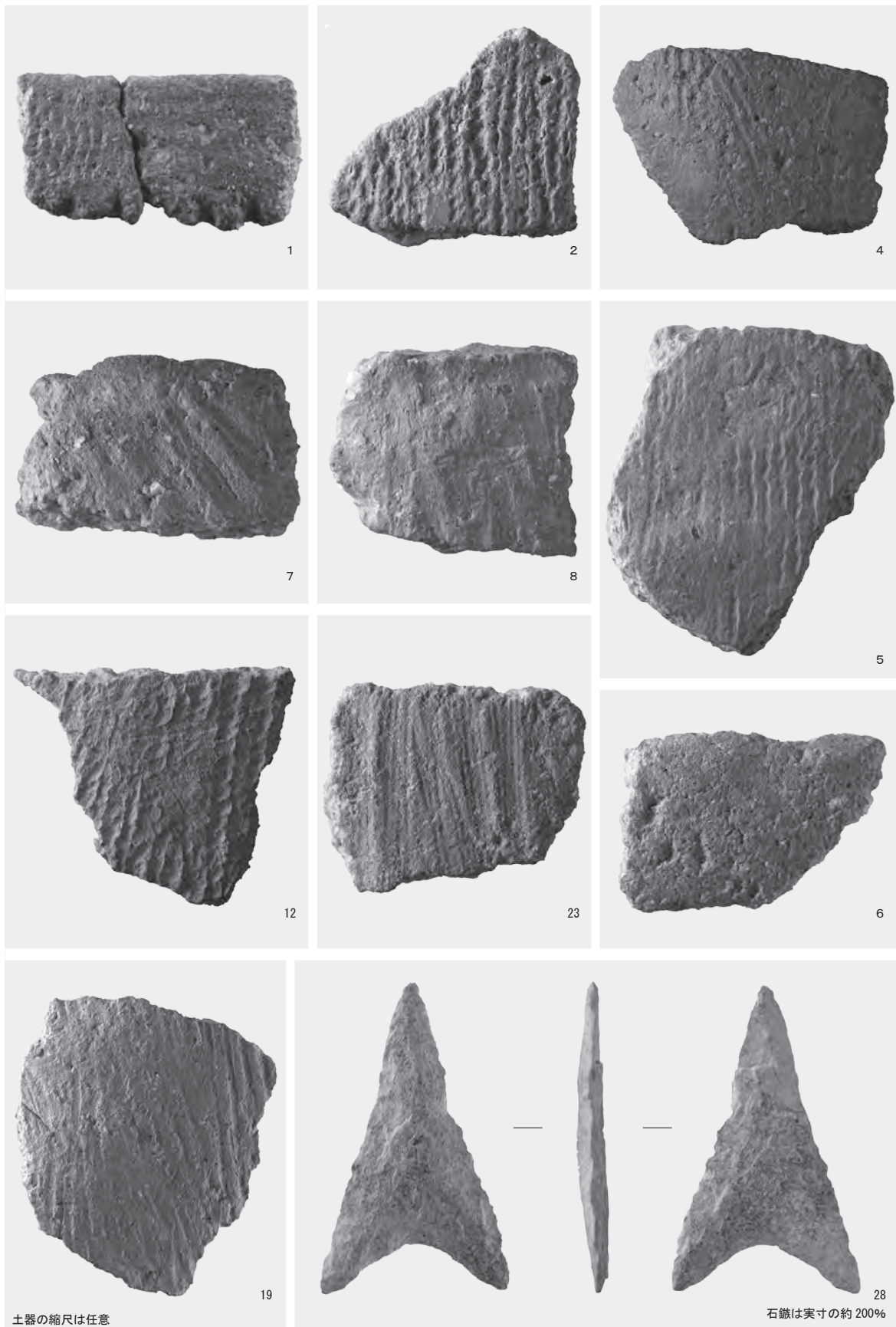
図版 6



4トレンチ出土縄文土器（表面）

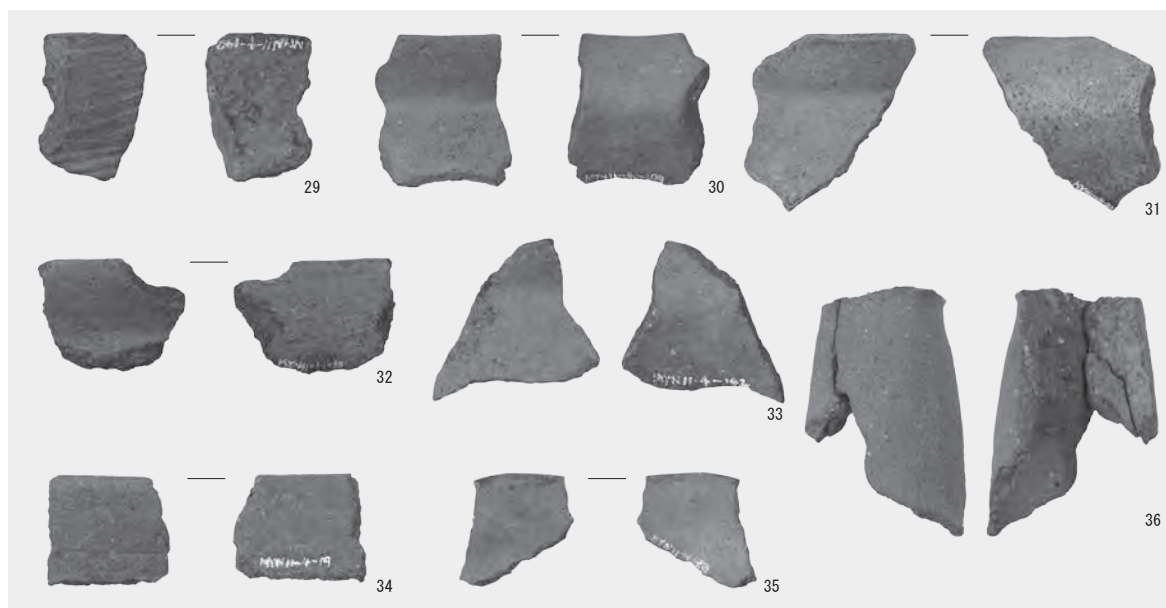


4トレンチ出土縄文土器（裏面）

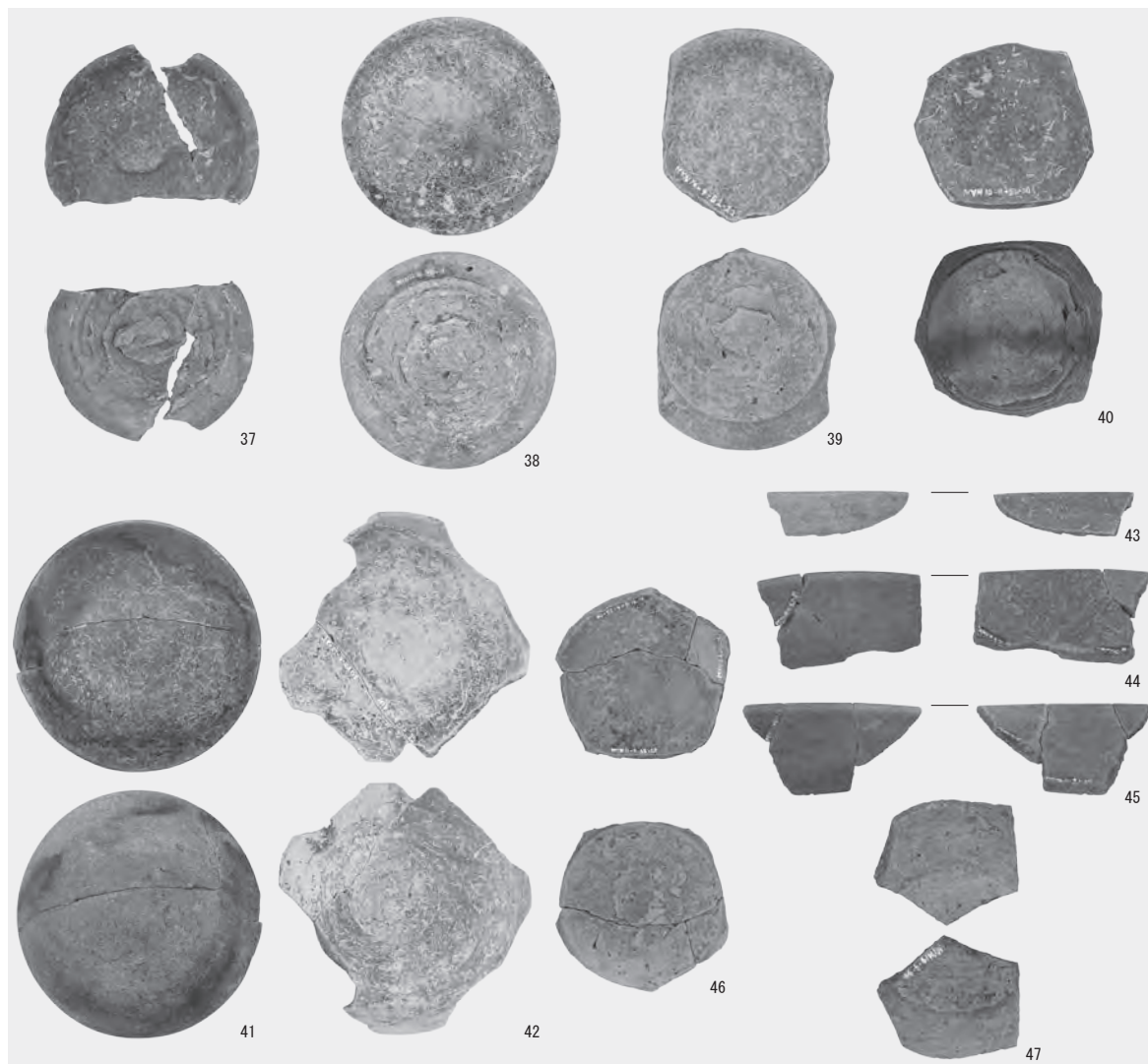


4トレンチ出土縄文土器・石鏃

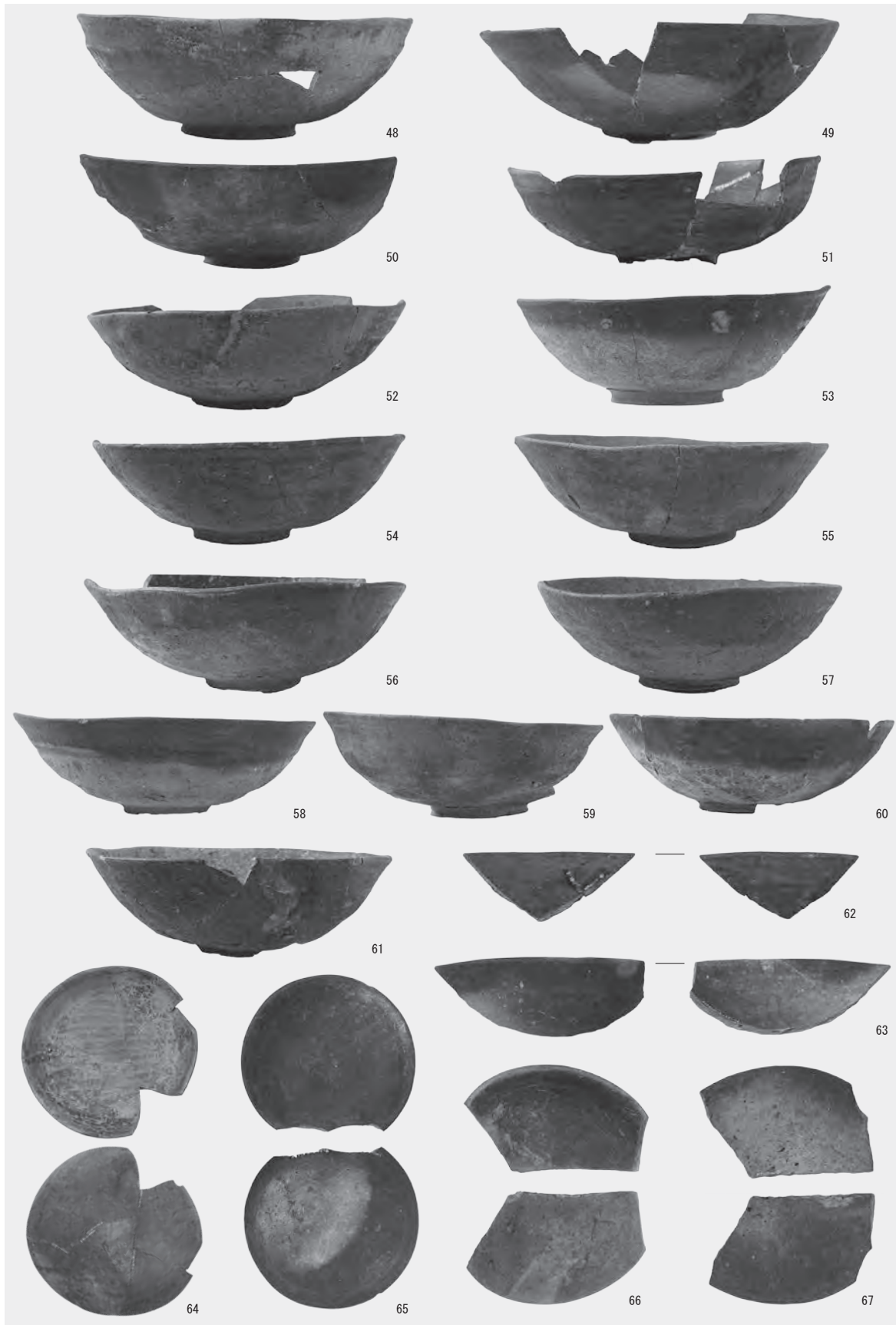
図版 8



4トレンチ出土弥生土器・古式土師器



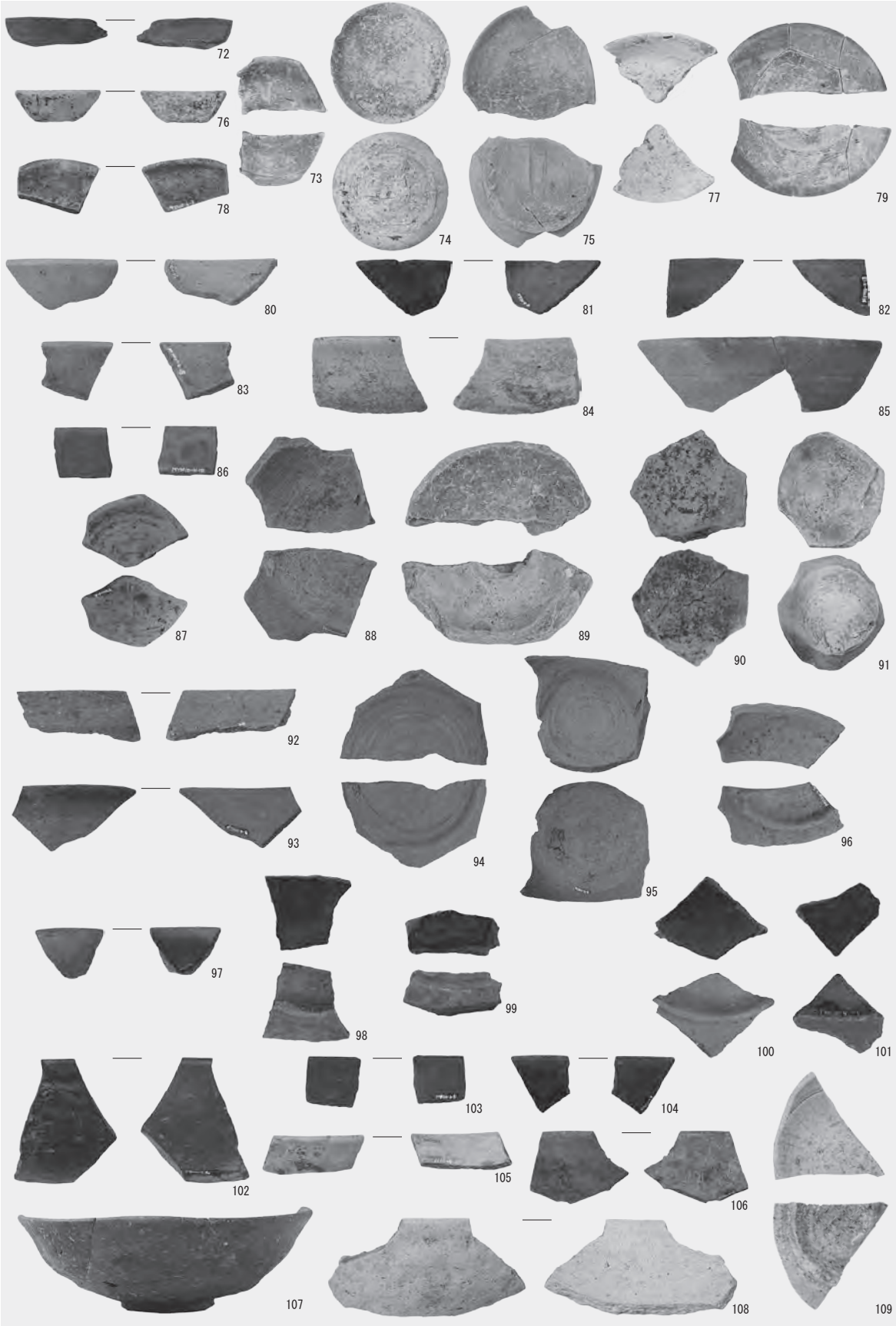
4トレンチ2号遺構出土遺物1



4トレンチ2号遺構出土遺物2

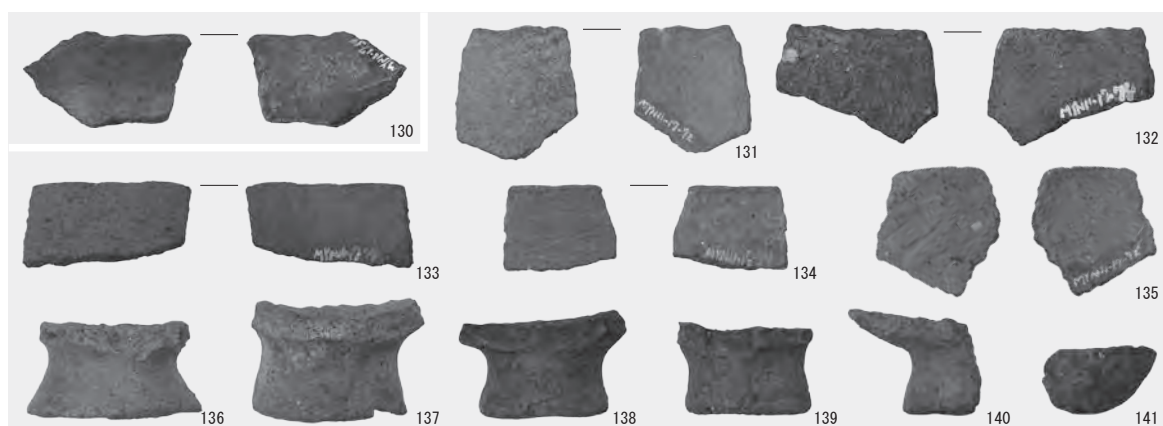


4トレンチ2号遺構出土遺物3

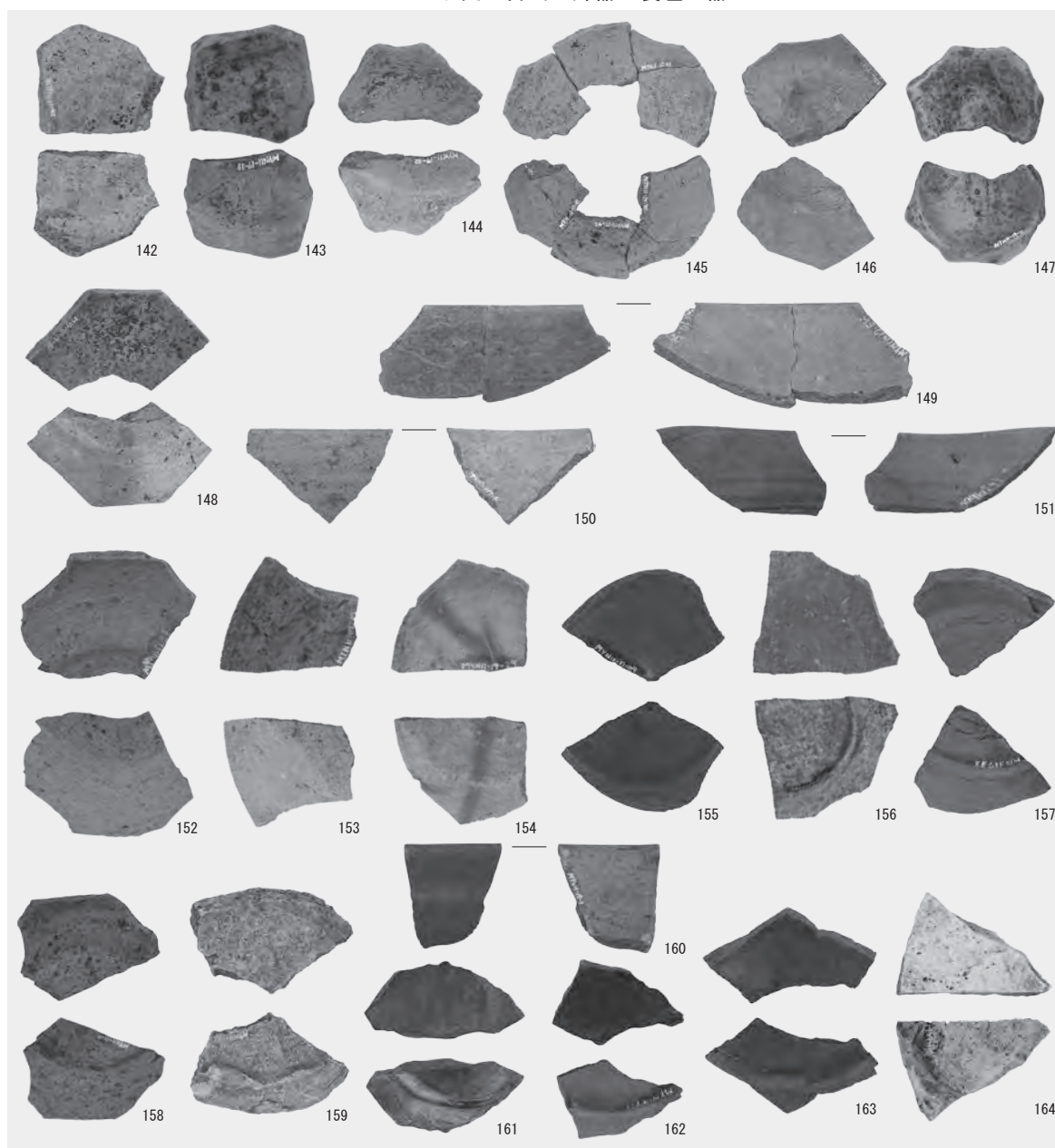


4トレンチⅡ層出土遺物

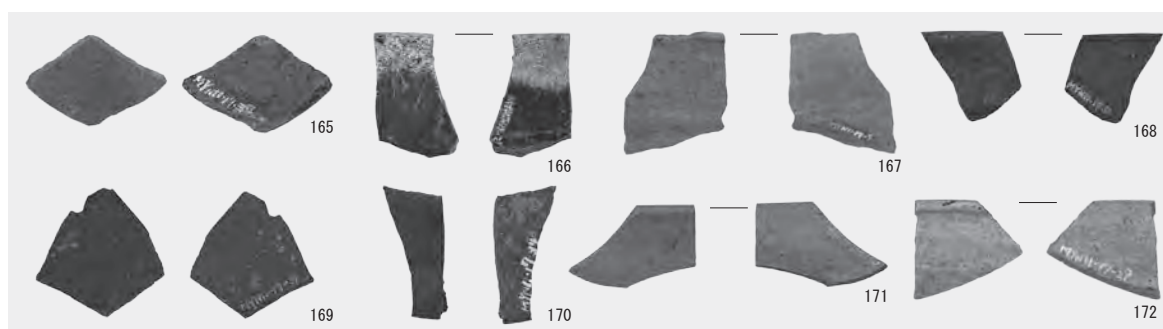
図版12



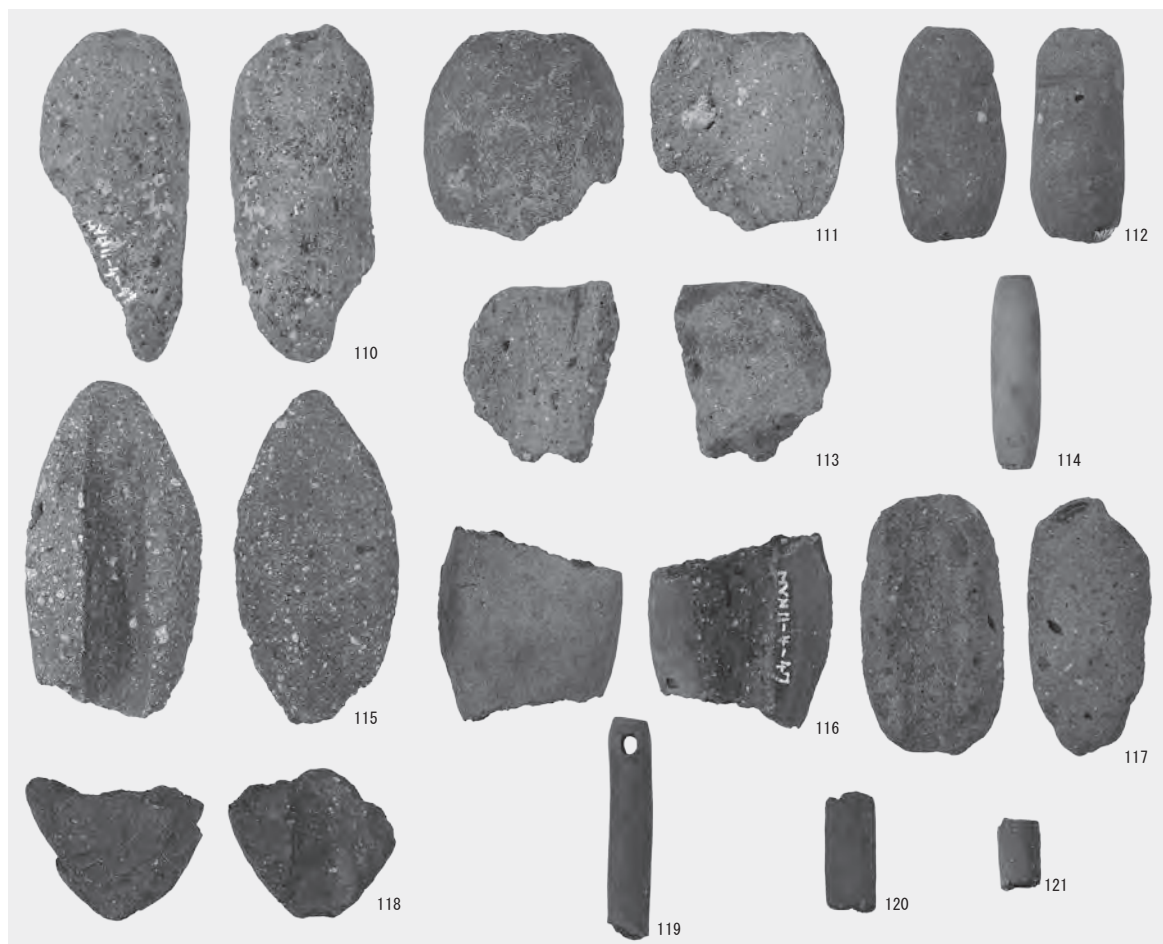
17トレンチ出土古式土師器・製塩土器



17トレンチ出土古代～中世の土器



17トレンチ出土陶磁器

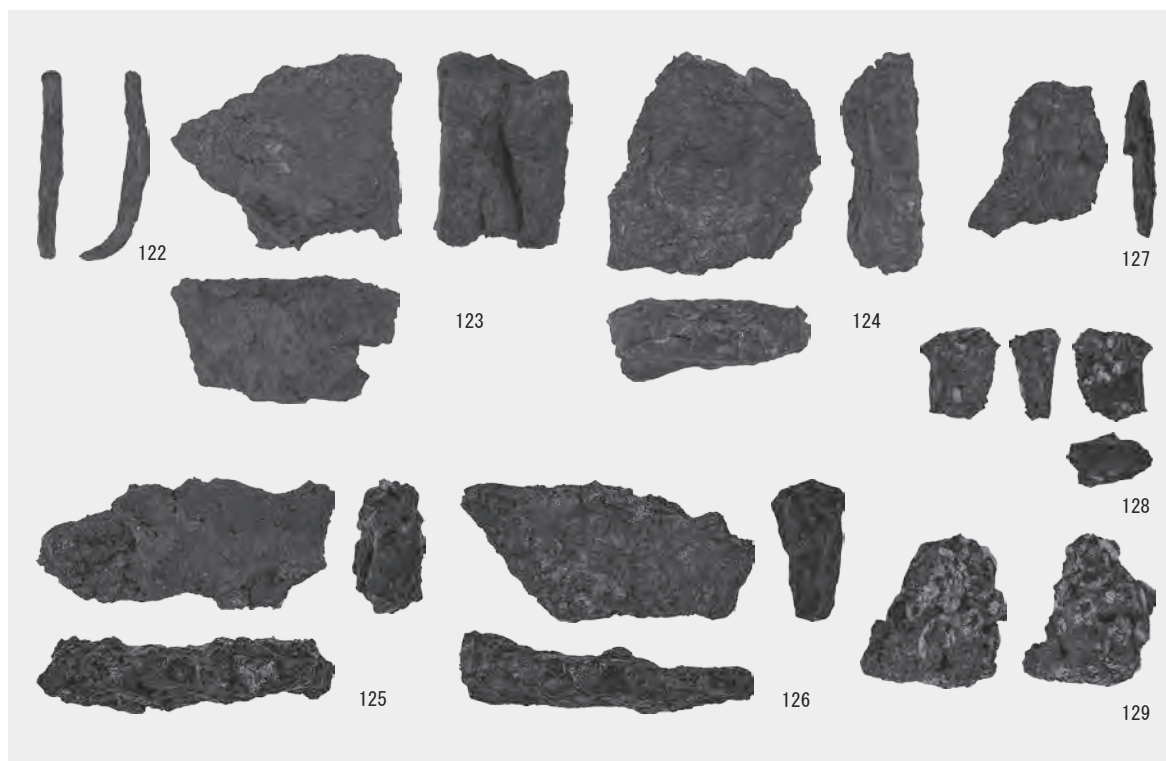


4トレンチ出土土錘

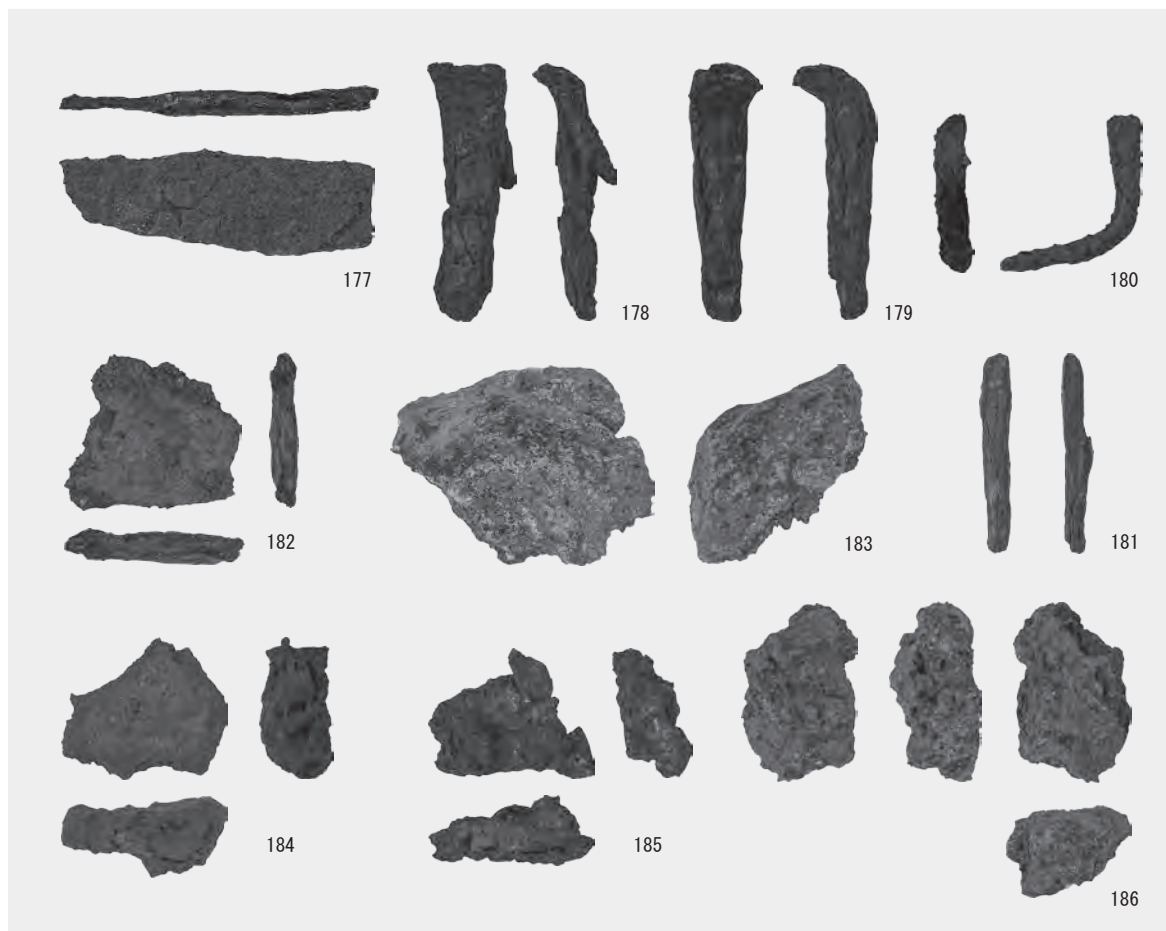


17トレンチ出土土錘

図版14



4トレンチ出土鉄製品・鍛冶関連遺物



17トレンチ出土鉄製品・鍛冶関連遺物

## 報告書抄録

|                   |                                                                                                                                                                                                            |                          |      |              |                                                                                |                                    |                                 |        |
|-------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------|------|--------------|--------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------|---------------------------------|--------|
| ふりがな              | えひめけんおちぐんかみじまちょう みやんないせき                                                                                                                                                                                   |                          |      |              |                                                                                |                                    |                                 |        |
| 書 名               | 愛媛県越智郡上島町 宮ノ浦遺跡Ⅵ                                                                                                                                                                                           |                          |      |              |                                                                                |                                    |                                 |        |
| 副 書 名             | 第10次・第11次発掘調査概報                                                                                                                                                                                            |                          |      |              |                                                                                |                                    |                                 |        |
| シリーズ名             | 上島町教育委員会埋蔵文化財発掘調査報告                                                                                                                                                                                        |                          |      |              |                                                                                |                                    |                                 |        |
| シリーズ番号            | 9                                                                                                                                                                                                          |                          |      |              |                                                                                |                                    |                                 |        |
| 編著者名              | (編者) 有馬啓介、馬赤嬰 (著者) 青木聡志、有馬、大塩啓一郎、笹田朋孝、鄭宗鎬、永田耀、福本佳織、藤田一希、古江七海、馬、村上恭通                                                                                                                                        |                          |      |              |                                                                                |                                    |                                 |        |
| 編集機関              | 上島町教育委員会                                                                                                                                                                                                   |                          |      |              |                                                                                |                                    |                                 |        |
| 所 在 地             | 〒794－2520 愛媛県越智郡上島町弓削佐島583番地 TEL 0897-77-2128                                                                                                                                                              |                          |      |              |                                                                                |                                    |                                 |        |
| 発行年月日             | 2022年3月25日                                                                                                                                                                                                 |                          |      |              |                                                                                |                                    |                                 |        |
| ふりがな<br>所収遺跡名     | ふりがな<br>所在地                                                                                                                                                                                                | コード                      |      | 北 緯          | 東 経                                                                            | 調査期間                               | 調査面積<br>㎡                       | 調査原因   |
|                   |                                                                                                                                                                                                            | 市町村                      | 遺跡番号 |              |                                                                                |                                    |                                 |        |
| みやんな いせき<br>宮ノ浦遺跡 | え ひめ けん お ち ぐん<br>愛媛県越智郡<br>かみじまちょう<br>上島町<br>ゆ げ さしま<br>弓削佐島                                                                                                                                              | 38356                    |      | 34° 14′ 42″  | 133° 11′ 30″                                                                   | 2020<br>0807～17<br>2021<br>0801～23 | 8㎡<br><br>16㎡                   | 保存目的調査 |
|                   | 種別                                                                                                                                                                                                         | 主な時代                     |      | 主な遺構         | 主な遺物                                                                           |                                    | 特記事項                            |        |
|                   | 集落<br>散布地                                                                                                                                                                                                  | 縄文時代<br>古墳時代<br>古代<br>中世 |      | 槽状遺構<br>集石遺構 | 縄文土器、石鏃、弥生土器、古式土師器、製塩土器、土師質土器、須恵器、黒色土器、瓦器、吉備型土師器、施釉陶器、貿易陶磁器、土錘、土製品、鉄製品、鉄滓、自然遺物 |                                    | 縄文時代早期前半以前の撚糸文土器が出土、中世の槽状遺構等を検出 |        |
| 要約                | Ⅱ区4トレンチと17トレンチの発掘調査を行ない、中世初頭の槽状遺構2基、集石遺構1基を検出した。槽状遺構（2号遺構）には瓦器碗などの12世紀中葉の遺物がアカニシやサザエなどの貝類と一括で廃棄されていた。また鉄素材あるいは鍛延中の鉄素材と考えられる鉄塊が出土した。古墳時代では古式土師器と脚台式製塩土器が共伴する包含層が確認された。そして花崗岩の風化土層から撚糸文土器や条痕文土器などがまとまって出土した。 |                          |      |              |                                                                                |                                    |                                 |        |



---

愛媛県越智郡上島町

宮ノ浦遺跡 VI

— 第10次・第11次発掘調査概報 —

(上島町教育委員会埋蔵文化財発掘調査報告第9集)

2022年3月25日発行

|       |                                                |
|-------|------------------------------------------------|
| 編集・発行 | 愛媛県越智郡上島町教育委員会<br>〒794-2520 愛媛県越智郡上島町弓削佐島583番地 |
| 印刷    | 株式会社ハラプレックス<br>〒799-1594 愛媛県今治市喜田村1-2-1        |

---

